

教育・研究年報

平成 30 年度

徳 島 文 理 大 学
人 間 生 活 学 部

ま え が き

平成 30 年度人間生活学部教育・研究年報を刊行いたします。ご覧下さいまして、年報のありかた、あるいは教員の活動に対し、ご指導を賜りますことを願っております。

人間生活学部は、6 学科（学生定員 400 名）からなり、各学科が協力し合って総合的に人間生活学の教育・研究をすすめています。多様な学科構成こそが人間生活学部の特徴・メリットです。しかし、平成 29 年度には日本高等教育評価機構による認証評価において定員充足率の向上が重大な課題であると指摘を受けまして、平成 30 年度、各学科は、広報活動をさらに活発化させ、教育の質の向上に懸命の努力をしてきました。

厳しい課題を念頭にしまして、平成 30 年度を振り返り、多くの出来事の中から各学科の活動や特徴を紹介しましょう。

まず人間生活学科から紹介します。生活経営学、食物学、被服学、住居学、保育・保健・養護学の能力と実践力を身につけた教員・社会人の育成に努めました。心理学科と共に養護教諭の養成に工夫を重ね、模擬保健室を活用し、より实际的・具体的な実習・教育を展開しました。人間生活学科は「人生 100 年時代における生活の質向上」を探究する学科として、社会と生活の変化に対応して活躍する人材を育成します。

食物栄養学科では、管理栄養士国家試験に合格できる学力をつけることを教育の基本にして、冬期講習等、国家試験合格率向上のための工夫を重ねてきました。さらに、栄養や保健、衛生の高度な学識と技術をもち、「人間栄養学」を実践できる管理栄養士を養成し、生活習慣病を予防する栄養教諭の養成にも力を注ぎました。これらの目的のために、栄養学、解剖生理学、病理学、臨床栄養学を深く学ぶことができます。

児童学科では、昨年度に引き続き国公立の小学校・幼稚園・保育所・認定こども園等の就職合格率も向上しました。また学生による合唱の発表等、学科長の専門である音楽活動にも力を入れました。小学校教諭 1 種免許状などを取得するとともに、教育情報処理を学び、実践現場でコンピュータ類を有効に活用できる高度な教育的実践力の形成につとめました。

メディアデザイン学科は、IT 社会にふさわしい情報技術関連のスペシャリストを目指す学科であり、「情報領域」「調査分析領域」「コンテンツ領域」などを総合的に学ぶことができるという他大学にはない特色を活かしつつ、美波町の人形浄瑠璃「赤松座」の復活など地域社会活性化プロジェクトに積極的に参加しました。

建築デザイン学科では、3 次元のモノ作りである 3D プリンタの応用やドローンなど最先端の技術を積極的に取り入れる一方、美波町における古民家のリノベーションや吉野川市の高垣調査など地域に密着した活動を継続しました。そして人間生活学部に属するメリットを生かし、人と生活と環境を大切にして、建築の 3 要素である「強・用・美」をそなえた建築・インテリアを創造する人材を育成しています。

心理学科は公認心理師法の施行で注目を集めています。中四国における臨床心理士養成校のパイオニアとしての永年の経験を元に、新たな国家資格である公認心理師養成に向けてカリキュラム等の整備をしました。教員自身が、初めて行われた公認心理師試験を合格して着実に教育体制を整えています。心の問題は、学校教育現場においてとても重要で、心理学を学び養護教諭をめざす人材の育成にも力を入れています。

このように、いくつかの出来事だけでも、人間生活学部各学科が、多くの課題に果敢に挑戦していることのお端をお分かりいただけたらと思います。

日本の大学を取り巻く状況は大変厳しいものがありますが、2 年後の本学 125 周年に向けて、上に記したような各学科の取組を一層発展させていけば、我々は本学の明るい未来を必ず見出していくことができるものと確信しています。

人間生活学部長 森田 孝夫

平成 30 年度 人間生活学部自己点検・自己評価報告書

目 次

まえがき 人間生活学部長 森田 孝夫

第 1 章	人間生活学部の概要	
第 1 節	学部の沿革と基本理念	1
第 2 節	学部の構成	3
第 3 節	学部運営組織（各種委員会の構成）	5
第 4 節	学部各種委員会活動報告	8
第 2 章	各学科スタンダード	
第 1 節	人間生活学科	33
第 2 節	食物栄養学科	34
第 3 節	児童学科	35
第 4 節	メディアデザイン学科	36
第 5 節	建築デザイン学科	37
第 6 節	心理学科	38
第 3 章	卒業生満足度評価の調査	
第 1 節	大学全体	39
第 2 節	人間生活学部	40
第 3 節	卒業生満足度評価アンケートの結果に対する総評	40
第 4 章	学生の授業評価アンケート	
第 1 節	大学全体	41
第 2 節	人間生活学部	42
第 3 節	平成 30 年度後期授業評価アンケートの結果に対する総評	42
第 5 章	研究授業報告	
第 1 節	スケジュール	43
第 2 節	研究授業報告書	44
第 6 章	教員活動状況の調査	
第 1 節	人間生活学科	52
第 2 節	食物栄養学科	60
第 3 節	児童学科	86
第 4 節	メディアデザイン学科	112
第 5 節	建築デザイン学科	122
第 6 節	心理学科	134
編集後記		153

第1章 人間生活学部の概要

第1節 学部の沿革と基本理念

(1) 沿革

本学園は明治28(1895)年、学祖村崎サイ先生が「女も独り立ちできねばならぬ」と唱え、自立協同を建学の精神として、私立裁縫専修学校を創立したことに始まるが、その後、この専修学校が時代の変化・要請と共に拡大発展し、昭和36(1961)年には徳島女子短期大学(家政科)、次いで昭和41(1966)年に徳島女子大学(家政学部)が設置された。現在の人間生活学部はこうした歴史的発展のうえに成り立っているものである。

〔沿革の概要〕

昭和41(1966)年	徳島女子大学家政学部家政学科設置
昭和42(1967)年	管理栄養士専攻設置 管理栄養士専攻設置が管理栄養士養成施設として認可
昭和45(1970)年	児童学科設置
昭和49(1974)年	被服学科設置(昭和61年廃止)
平成5(1993)年	家政学専攻科設置
平成6(1994)年	生活環境情報学科設置
平成9(1997)年	大学院家政学研究科食物学専攻・生活環境情報学専攻修士課程設置
平成10(1998)年	大学院家政学研究科に児童学専攻修士課程設置 人間発達学科設置 大学院家政学研究科に人間生活学専攻博士後期課程設置 大学院家政学研究科児童学専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成機関に指定
平成12(2000)年	児童学科が保育士養成施設として指定認可
平成14(2002)年	家政学部を人間生活学部に変更 家政学科管理栄養士専攻を食物栄養学科に、生活環境情報学科を生活情報学科と住居学科に改組転換 家政学科家政学専攻を人間生活学科に変更
平成15(2002)年	人間福祉学科設置 人間発達学科を心理学科に変更
平成18(2006)年	生活情報学科をメディアデザイン学科に変更
平成19(2007)年	人間福祉学科を人間福祉学部人間福祉学科として独立
平成21(2009)年	住居学科を建築デザイン学科に変更

(2) 基本理念

家政学部は昭和41年に設置されたが、その後、科学技術の急速な進歩や産業構造の高度化に伴って、社会構造も複雑化し、その結果、教育の大衆化、生活様式や価値観の多様化、情報化、少子高齢化、さらには心の問題、ヒューマンリレーションの欠如といった諸々の問題が生じてきて、人間生活が大きく変貌してきた。

このような人間生活をめぐる社会的諸事象の変化に即応可能な人材を育成するため、従前のような衣食住を中心とする伝統的な家政学の分野を超えた新しい学部の在り方や内容を発展的・総合的に再検討する必要が生じてきた。そこで、これまでの歴史的・社会的役割とその成果は継承しつつ、有意な教育・研究体制を確立して、より一層の社会的貢献を果たすべく、平成14年に家政学部を人間生活学部として新しくスタートさせ、今日に至っている。

現在、本学部は、それぞれに特色ある目的・内容を持った6学科と専攻科より構成されている。このいずれもが人間の「生」と深く関わったものである。人間は環境(文化的・社会的・自然的環境等)

との相互作用によって規定され得る生命体であるが、この観点から言えば、人間の「生」の問題は、取りも直さず生命の保持、健康の維持・促進、人間としての成長と発達、人間らしい生活の営みと行動の在り方、対人関係、文化の習得とその創造などと常に不可分の関係にある。しかし、そこには幾多の解決されねばならない課題も存在しているため、本学部では人間の自立と環境との共生という観点から、これらの課題解決に向けて常に科学し、新しいビジョンの下に創造していくことのできる人材、従って社会の新しい分野を担うことのできる人材の育成を目指している。それだけに本学部は諸科学、つまり人文科学、自然科学、社会科学等が有機的に連関するところに成り立つ特色ある学部であると言える。人間の開発・人間の自立の問題も、こうした関連科学の探究によってこそ保障されるものであると考えられる。

ところで、現代は「知識基盤社会」と言われ、知の伝達、知の創造と発見、知の応用が大切であるとされるが、快適で健全なる人間生活の創造を考えると、「知識基盤社会」にふさわしい人間の教育をこそ重視していかなければならない。このため、本学部では建学の精神に立脚して、次のような人間の育成をめざすものである。

第一は、豊かな人間性を身に付けた人材の育成である。教育の目的は、まさしく人格の完成にある。このため、充実した教育・研究を通じて、倫理観に裏付けられた知性と技能を有する個性豊かな品位ある人間の育成を目指す。このことは「人間の自立」、「知性と人間性の尊重」における根本精神でもある。

第二には、高度な専門的知識・技能の習得を目指すことにある。基礎・基本の習得と幅広い教養教育の確立を前提として、知の時代にふさわしい先端的な知識・技能を広い視野から身に付けた人材、つまり社会から常に必要とされ、しかも地域社会においてのみならず、国際的にも貢献できる実践的な専門家の養成をねらいとする。

第三には、意欲的で創造的な人間教育である。学生のやる気・意欲を喚起し、夢と情熱を持って新しい事柄や未知の分野に柔軟な思考力で挑戦していく教育、従って知識・技能の応用力を高めつつ、学問的なパイオニア精神を培い、豊かな創造力を身に付ける教育を重視する。変化に対応できる人間教育である。

第2節 学部の構成

現在、人間生活学部は1～4学年をあわせて約1,100名の学生を擁し、それぞれに特色ある人間生活、食物栄養、児童、メディアデザイン、建築デザイン、心理の6学科と専攻科から構成された学内最大の学部である。

ここで各学科の特性について要約的に述べれば、まず**人間生活学科**では、人間生活に関する衣食住のみならず、育児・保健・家族、さらには家庭経済や消費、環境問題などを含めた内容を総合的に学びつつ、より健全なる人間の生き方を総合的に追究していく。学部のなかでは最も伝統ある学科である。**食物栄養学科**は、化学や生物などの内容を把握し、同時に人体の構造特性や機能等を理解したうえで、生活習慣病の予防をも視野に入れながら、人間の生命や健康に関わる食物栄養の特性などを実験等によって深く追究していく学科である。このため、管理栄養士養成を主たる目的としている。**児童学科**は、乳幼児期から児童期において「教育は人なり」という観点から、子どもの健全なる成長・発達と確かな学力を保障し、かつ生きる力を育むことのできる専門的力量と豊かな指導性、従って総合的な人間力を身に付けた教育・保育の専門家を養成する学科である。

さらに**メディアデザイン学科**は、IT社会にふさわしい情報技術関連のスペシャリストを目指す学科であり、ソフトウェアの開発・ネットワークの構築技術、さらにはインストラクショナルデザインなどを幅広く習得して、常に進展し続けるIT社会に即応可能な人材育成に力点を置いている。平成19年1月のメディアセンターの完成により、最先端の情報施設・設備が整えられたことから、今後さらなる教育・研究の充実が期待される学科である。**建築デザイン学科**は、21世紀のよりよい住まいの創造、即ち住生活空間をまちづくりや環境共生、インテリアなどの観点から、常にフレッシュな感覚を持って、総合的・実践的に指導する学科である。国家資格・公認心理師法の施行で社会の注目を集めている**心理学科**は、複雑化する社会ならびに学校教育現場においてクローズアップされている心の問題に正面から取り組み、心のメカニズムや対人関係のあり方、人間の考え方（思考方法）、そして、カウンセリングの方法などを具体的・実践的に学び、メンタルヘルスに関わる専門的知識・技能を習得している。

専攻科については、平成17年度から従来の家政学専攻科を人間生活学専攻科に名称変更し、これに伴って家政学専攻も人間生活学専攻となり、現在では児童学専攻と人間生活学専攻の2専攻となっている。これらの専攻科では、学部の内容を踏まえた上で、さらに内容の深化・発展を図ることになる。

なお、これらの学科(専攻科含む)で取得可能な免許・資格及び定員については以下の別表のとおりである。

(別表)

学 科 名	取得可能な免許状・資格	入学定員	編入定員
人間生活学科	教員免許高一種・中一種（家庭・保健）、養護教諭一種、フードスペシャリスト、社会福祉主事の任用資格、医療秘書	40	※
食物栄養学科	管理栄養士国家試験受験資格（実務経験不要）、栄養士、栄養指導員・食品衛生監視員・食品衛生管理者の任用資格、教員免許高一種・中一種（家庭）、栄養教諭一種、医療秘書	90	※
児童学科	教員免許小一種・幼一種、保育士、社会福祉主事・児童指導員・社会教育主事、レクリエーション・インストラクター、スポーツ・レクリエーション指導者、准学校心理士	110	※
メディアデザイン学科	教員免許高一種（情報）、上級情報処理士(N)、社会調査士、プレゼンテーション実務士、Webデザイン実務士	30	※
建築デザイン学科	教員免許高一種・中一種（家庭）、一級建築士受験資格（実務2年）、二級建築士受験資格（実務不要）、一級・二級建築施工管理技士受験資格、インテリアプランナー、インテリアコーディネーター、福祉住環境コーディネーター検定	40	※
心理学科	養護教諭一種、認定心理士、社会福祉主事・児童指導員の任用資格、医療秘書 （公認心理師、臨床心理士は大学院修士修了受験資格）	90	※
※印の編入定員については、定員に余裕がある場合にのみ受け入れる。		(計) 400	

〔専攻科〕

専攻科	専 攻	修業年限	取得可能な免許状	入学定員	入学資格
人間生活学専攻科	人間生活学専攻	1年	教員専修免許/高・中（家庭）、養護教諭	8	大学卒業生
	児童学専攻		教員専修免許/小・幼	6	

第3節 学部運営組織（各種委員会の構成）

人間生活学部における運営組織については、教授が参加する学部教授会、全教員が参加する学部教授総会、学部長および各学科長による学科長会議、各学科の教員による学科会議、ならびに役割に応じた各種の委員会（全学的委員会への参加および学部独自に設置された各種委員会）がある。

学部教授総会は第2火曜日に開催することを原則としている。学部教授会は学部教授総会の一部として実施される他、必要に応じて学部長が招集する。

全学的委員会への参加を表1に、学部の各種委員会の構成を表2に示す。大学院等と学部を兼ねている教員もいるため、大学院等の委員会も含めて示している。

なお、学部の「教員養成推進委員会」については、平成17年度に全学的な視点からの教員養成対策委員会並びに教員養成対策室が設けられたことから、従来の「教育実習委員会」をこれに対応させて「教員養成推進委員会」に名称変更した。

学部の各種委員会について、各委員は2年毎に交代することを原則としている。平成30年度の学部委員会は12の委員会から構成されており、それぞれにおいて選出された委員長（委員会によっては副委員長も選出）のリーダーシップの下に、学部教授会での決議事項等を踏まえて、その役割を果たしている。

各種委員会の会議については、委員会活動の課題に応じて適宜開催されるが、その具体的な活動内容については委員長が毎年3月末に学部長に報告することになっている。

表1 平成30年度委員一覧（全学的委員会）

平成30年度 委員一覧

人間生活学部
平成30年6月5日現在

区分	委員会	各学科委員						備 考	
		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理		
全 学 的 委 員 会	学生指導協議会		犬伏					●学生支援グループ関係 1名（任期2年）（30年度：食物栄養学科） ●学部学生指導委員会委員長とする（31、32年度：児童学科）	
	人権教育推進委員会	竹内						●学生支援グループ関係 1名（任期2年） （30年度：人間生活学科）（31、32年度：児童学科）	
	紀要編集委員会					森田		●教育・研究支援グループ関係 1名（任期2年） （30年度：建築デザイン学科）（31、32年度：心理学科）	
	全学入試委員会		中橋					●教務グループ関係 各1名 *	
	センター試験委員		坂井(隆)						
	セクハラ防止委員会	防止員 相談員			松本			●庶務・渉外グループ関係 各1名 *	
	インターンシップ推進委員会			仁宇				●就職支援部関係 1名（任期2年） （30、31年度：児童学科）	
	就職支援委員会					森岡		●就職支援部関係 1名（任期2年）（30年度：建築） ●学部就職支援委員会委員長とする（31、32年度：心理学科）	
	教育開発機構	教務委員会		石堂					●教務グループ関係 25-27古本 28-29森岡 30-石堂 ●学部教務委員会委員長とする *
		入試制度検討部会					森田		●教務グループ関係(含む入学前教育) * 18-20田主 21-24福光 25-27黒澤 28-29永山 30-森田
		一般教育研究部会			西原				●全学共通教育センター・語学センター関係(含む新入生教育) *
		FD研究部会				山城			●教育・研究支援グループ関係 * 21-25橋田 26-27北川 28-29河口 30-山城
	教職課程委員会	竹原		三橋川端			貴志	●教務グループ関係 4名（任期2年：30、31年度） ●教職科目担当 3名(内2名は児童学科、1名は心理学科) ●学部代表 1名(教職免許取得者の多い上記以外の学科) 生活と栄養が交互(29、30年度：人間生活学科)	
	倫理審査委員会	藤田	石堂					●庶務・渉外グループ関係 2名（任期2年）22/10月 藤田副委員長 医師1名、その他1名 *	
	ホームページ委員会				長濱			入試広報部関係 1名	
	チーム医療促進委員会		坂井(隆) 森川				山崎	委員長 * 医師、管理栄養士、臨床心理士各1名	
	実験動物委員会		石堂					永浜委員長 *	
	組み替えDNA委員会		石堂					葛原委員長 *	
	選学管理委員会	岡部						総務関係 1名(任期1年：隔年) * 29-30岡部	
	学長補佐	藤田	石堂						
	公開講座企画委員	藤田							
	退学者防止対策検討委員会	竹内(理)	犬伏	岡山	古本	川村	小坂		
	e-ポートフォリオ委員会								
	広報担当者会			林	長濱			学部広報担当委員会の正・副委員長とする	
	自己点検・評価実施委員会 (認証評価委員会)	岡部	石堂	河口	篠原	森岡	岡林	H29年度認証評価を受けて3年後の改善報告作成のために、H30年度の委員は学科長。	
	宿泊セミナー運営委員会	30年度実施	岡部 竹原	森川 亀村	西原 五反地	山城 篠原	山田 川村	東 藤崎	
		31年度実施	藤田 岡部	亀村 小川	五反地 田中	清澄 篠原	山田 笠井	藤崎 小坂	○各学科より2名を選出して構成する。(半数を前年度委員とする) ○任期2年。実施委員会(委員長は学部長)委員を兼ねる。 ○任期は翌年の実施後のアンケート処理までとする。
	○上記の委員は、各委員会に出席し、その内容を学部教授会において報告・連絡するとともに、必要に応じて議案を提出するなどして、それぞれの責務において速やかな対応を図るように努める。同時に、学部の関連する委員会とも密接な連携を図る。 * 学部長指名								

表2 平成30年度委員一覧（人間生活学部各種委員会）

区分	委員会	各学科委員						備考
		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	
人間生活学部委員会	教務委員会 (学科長)	岡部	◎石堂	河口	篠原	森岡	岡林	○各委員は、自己の所属する学科のカリキュラム実情を十分に把握したうえで、学科間のカリキュラム調整を行う。 ○委員長は全学教務委員を兼ねるとともに、他学部・学科及び教務グループとの調整等を行う、など。
	教育研究委員会 (各学科1名)	竹内	岩田	◎三橋	○清澄	山田	岡林	○大学院担当の教員(各専攻1名)が含まれるように配慮する。 ○教員の研究発表会を運営する(年間を通じての発表者の選出、計画の立案、実施など)。 ○図書購入の申請リスト作成等を行う(年2回)など。
	入学試験委員会 (各学科1名)	岡部	◎坂井	津守	清澄	山田	高橋	○委員長は全学入学試験委員を兼ねる。 (なお2018年度は坂井隆志先生が勤める。)
	自己点検・自己評価委員会 (各学科1名)	竹原	小川	岡	◎山城	笠井	藤崎	○学生による授業評価や研究授業等に関する運営全般を行う。(年間を通じての計画作成・実施など) ○原則として、年1回(3月頃)報告書を作成する(授業評価、研究授業、研究発表、就職状況、各科スタンダードの達成状況、新入生のイメージ調査の概要、共同研究の概要、社会的活動や業績など)
	学生指導委員会 (各学科1名)	藤田	◎犬伏	松本	長濱	川村	小坂	○委員長は、学生指導協議会の委員も兼ねる。 ○学生生活に関する各種調査を実施し、学生の生活指導に役立つよう、報告書を作成する。 ○クラス担任及びチューターの学生指導に関する内容をまとめたり、必要に応じて問題提起を行う、など。
	広報担当委員会 (各学科1名)	竹内	坂井(堅)	○林	◎長濱	池田	青木	○委員長は、ホームページ委員会の委員も兼ねる。 ○広報誌(専攻科、大学院含む)の作成を担当する。(入試広報部と連携) ○ホームページ(専攻科、大学院含む)の作成や修正を行い、常に新しい情報を収集して提供する、など。
	教員養成対策委員会	岡部	石堂	河口	篠原	◎森田 森岡	岡林	○学部長及び学科長をもって構成する。 ●委員長は学部長とする。
	教員養成推進委員会 (各学科1名)	竹原	松原	◎三橋	古本	川村	○貴志	○委員長は、必要に応じて学部の教員養成対策委員会に出席できる。 ○委員会は教員養成向上のため、学部の教員養成対策委員会及び教員養成対策室と密接な連携を取り合って、必要事項についての円滑な実施を図る。 ○各種の校外実習(教育・保育・臨地実習等)を充実させるため、教育実習の手引き等を参考にして、その趣旨の徹底化を促す。 ○必要に応じてアンケート調査等を実施し、実習における事前・事後指導を含む問題点を明確にするとともに、その改善策を提示する、など。
	就職支援委員 (各学科1名)	藤田	近藤	仁宇	清澄	森岡	◎東	○委員長は全学就職支援委員会の学部委員を兼ねる。
	中期目標・中期計画策定委員会							●委員長は学部長が務める。
	通路ウォーク委員	藤田	森川	五反地	清澄	川村	貴志	
	防災対策検討委員会	竹原	中川	川端	山城	山田	◎礪原	
	災害時初期対応者		橋田 石堂 中橋 坂井(堅)	三橋 林 岡		山田	中津東	
	<p>○任期中に欠員が生じた場合、残任期間について補充することを原則とする。 ○各委員会においては、委員長及び副委員長を選出し、職務が円滑に遂行されるようにする。 ○各委員会の委員長は、年間の活動状況(委員会開催の日時、活動の概要、各委員の参加状況等)を別紙の様式に従って記載し、毎年学部長に提出する。(3月中旬に提出) ○全学的委員の交替については、原則として人間生活学科、食物栄養学科、児童学科、メディアデザイン学科、建築デザイン学科、心理学科の順とする。なお、各委員は、学部教授会で、必要に応じて当該委員会での報告等を行う。</p>							

◎ 委員長 ○ 副委員長

第4節 学部各種委員会活動報告

平成30年度 人間生活学部教務委員会活動報告

教務委員会委員長
石堂 一巳

平成30年度は全学教務委員会を三回開催した。

1. 学修成果の可視化
 2. 授業・試験へ遅刻の取り扱い
 3. カリキュラムマップとナンバリングについて
 4. 履修単位の上限について
 5. GPAの利用について
 6. 英語検定等による単位認定について
- について議論した。

1. 学修成果の可視化のために初年次に実習する日本語能力テストを活用し、高学年次にもう一度実施して、個人ごとの学修成果を可視化する提案がなされた。詳細については議論中である。
2. 人間生活学部では履修の手引きに「授業開始より10分以上経過して入室した場合は、欠席とする。」と明記されている。試験についても、各学科とも試験時間60分の場合、30分までの遅刻は受験可能としている。
3. カリキュラムマップが学科毎に完成している。今後は、カリキュラムマップからナンバリングを作成することになった。詳細なナンバリング方法については継続して審議する。
4. 単位数の上限については、キャンパスガイドおよび履修ガイドに年間40単位を上限とし、例外については、教職単位や成績優秀者の例外については具体的に記載することになった。
5. GPAの利用については、「卒業時に参考とする」と履修ガイドに記載することとした。
6. 英語検定やTOEICなどの得点を使って、英語Aの成績評価とする提案が国際部からなされた。学部・学科による事情があるため人間生活学部学科長会議で検討された結果、TOEIC 500点以上および英語能力検定2級以上をもって本学の英語Aの優単位認定とする案が提案された。

I 委員会の目的

1. 図書（図書館収蔵）購入に関する事務を取り扱う：大学院生・学部生の勉学に資するため図書館の収蔵する図書を各委員から推薦して頂き、委員会がとりまとめて購入申請を行う。
2. 「新任教員の研究紹介」発表会（年 1 回）を実施する：学部新たに新任された教員の研究領域、業績、今後の教育・研究の展望を発表して頂く会を実施する。日時・場所の設定、発表者への依頼、抄録集の作成、当日の運営を行う。

II 委員会の構成

1. 各学科より 1 名を選出して構成する。図書申請は大学院の図書も含まれるため、大学院担当の教員（各専攻 1 名）が必ず含まれることとする。
2. 平成 29 年度委員
竹内理恵（人間生活学科）、岩田深也（食物栄養学科）、◎三橋謙一郎（児童学科）
○清澄良策（メディアデザイン学科）、山田實（建築デザイン学科）岡林春男（心理学科）
〔◎印：委員長、○印：副委員長〕【敬称略】
3. 役割：図書申請（清澄・学部および大学院担当）
「新任教員の研究紹介」発表会
（会場：清澄、司会・運営：山田、岡林、抄録作成等：三橋、岩田、竹内）

III 委員会開催の概要

一. 第 1 回教育研究委員会

日 時：平成 30 年 5 月 23 日（水）16:30～17:35

場 所：9 号館 10 階（研究室⑥）

出席者：三橋（司会・児童学科）、山田（建築デザイン学科）、岩田（食物栄養学科）、岡林（心理学科）、竹内（人間生活学科）、清澄（書記・メディアデザイン学科）【敬称略】

議題

1. 図書申請について

- (1) 大学及び大学院担当：清澄が担当する。
- (2) 申請時期：第Ⅰ期（7 月）、第Ⅱ期（10 月）、予備（第Ⅲ期 12 月）
- (3) 広報：6 月、9 月の学部教授会

申請して購入する金額が決まっているので、多くの申請が出されるように各学科で連絡することが話し合われた。

2. 新任教員の研究発表会について

今年度もこれまでと同様に、新任教員を対象に研究領域や研究内容に関する発表を実施することになった。

(1) 発表対象者

今年度の発表対象者は、次の 6 名である。【敬称略】

- ① 食物栄養学科（2 名）中川利津代、亀井典生
- ② 児童学科（1 名）岡直樹
- ③ 心理学科（3 名）青木宏、小坂清文、山崎暁子

協議の結果、5 名が今回の発表者として選出（下線）された。

残りの方の発表については、来年度に発表して頂くことになった。尚、事務兼任の先生ならびに助教の先生は、平成 29 年度より対象としないことにしている。

- (2) 日程：9 月 11 日（火）学部教授会終了後（途中 10 分休憩）

(3) 場所：図書館3階 AV ホール（学部教授会と同じ場所）

(4) 担当（敬称略）

①司会（タイムキーパーを含む）：山田、岡林

②資料作成：三橋、岩田、竹内

資料の原稿締切（平成30年8月24日）、発表の資料を作成する方は当日持参

③会場設営：清澄

(5) 発表形式：15分（発表13分、質疑応答2分）昨年度と同様

3. 当委員会における副委員長の設置について

本年度は当委員会に副委員長を置くこととする。清澄が担当する。

二. 第2回教育研究委員会

日 時：平成30年10月22日（月）16:30～17:05

場 所：9号館10階（研究室⑥）

出席者：三橋（司会・児童学科）、山田（建築デザイン学科）、岩田（食物栄養学科）、岡林（心理学科）、竹内（人間生活学科）、清澄（書記・メディアデザイン学科）【敬称略】

議題

1. 図書申請について

執行状況：第Ⅰ期（学部用266万/530万、大学院用11万/70万）であり、第Ⅱ期（10月）を含めても余裕がある。よって、第Ⅲ期（12月18日〈火〉締め切り）で再募集をすることになった。電子ジャーナルの申請については調査中。教職課程で資料とする小・中学校等の教科書は、実験実習費を活用する。

2. 教員の研究紹介発表会の総括について

9月11日（火）の学部教授会後に開催された研究発表会は、発表13分、質問2分、合計15分で5名の発表があった。来年度の発表に1名（山崎暁子）がまわる予定であること、また、発表時間等は本年度と同様とすることを確認した。【敬称略】

3. 卒業研究のあり方について

最高点の制限、共同研究の人数、締切期日、字数・枚数制限、発表会開催等について、学科ごとの現状を報告した。今後、各学科の実情に合わせて学科で独自に続けていくことを確認した。

	最高点の制限	共同研究の人数	締切期日	字数・枚数制限	発表会開催等	優秀卒業研究の選定
児童学科	95点	制限なし	1月末	20枚以上	なし	学科会議で決定
人生学科	規定なし	制限なし （論文は個人で作成）	1月下旬	30枚以上	1月 （希望者のみ）	発表者から教員が協議
食栄学科	規定なし	制限なし	9月中下旬	なし	なし	なし
心理学科	規定なし	2名まで	1月下旬	なし	1月	学科会議で決定
メディア	規定なし	制限なし	1月末	30枚以上	2月上旬	学科会議で決定
建築学科	規定なし	制限なし	1月末	なし	1月予定	発表会後学科会議決定

三. 第3回教育研究委員会

日 時：平成31年2月8日（金）16:30～17:00

場 所：9号館10階（研究室⑥）

出席者：三橋（司会・児童学科）、岩田（食物栄養学科）、岡林（心理学科）、竹内（人間生活学科）、
清澄（書記・メディアデザイン学科）【敬称略】

欠席者：山田（建築デザイン学科）【敬称略】

議題

1. 図書申請の最終報告（清澄）

I期（7月）、II期（10月）、III期（12月）の3回、人間生活学部全教員からの購入希望図書を集約し、申請を行った。

	予算	執行金額	冊数
学部図書	5,300,000円	5,299,971円	878冊(DVD含む)
大学院図書	700,000円	699,195円	50冊(DVD含む)

2. 教員の研究紹介発表会について

平成30年度の人間生活学部教員のうち、心理学科の山崎暁子先生は、平成31年度の発表とする。平成31年度の新任教員の人数は不明であるが、平成31年度の新任教員研究紹介発表会の人数も最大8名とし、日時は9月教授会後、発表時間等は本年度と同様とする。

3. 卒業研究のあり方について

発表会の開催、優秀卒業研究の選定について、各学科で現状の報告がなされた。

IV 活動のまとめ

図書申請と新任教員の研究発表の2件を中心に活動を行った。図書申請について今回も、学科間調整を行わなかったが、今後その必要が生じた場合は、委員会の大きな業務となることが予想される。新任教員の研究紹介については1昨年度より、発表対象者を教育・研究に主として従事する先生方をお願いすることにした。したがって、本年度は教員の研究紹介対象者は6名となり、そのうち5名の先生に発表をお願いした。そして、残る1名の先生には諸事情により、平成31年度をお願いすることになった。

I 委員会の目的

- ① 学生確保に資する方策を検討する。
- ② 人間生活学部における入学試験に関する事項について、学科間の意見を調整し、学部教授会にて承認を得る。
- ③ 特別推薦入学試験（1年次、3年次編入）における指定校への申請および辞退または取消しの可否を検討する。
- ④ 全学入試制度検討委員会および全学入試委員会と人間生活学部教授会との円滑な情報交換に資する。
- ⑤ 学務入試グループと連携を図る。

II 入試委員会の活動概要

(1) 構成メンバー

委員長：坂井(隆)(食栄)

委員：岡部(人間生活)、津守(児童)、清澄(メディア)、山田(建築デザイン)、高橋(心理)

全学入試委員会委員：中橋(食栄)

センター試験担当：坂井(隆)(食栄)

(2) 主な作業

- ・入試要項の確認
各学科に入試要項の校正を依頼、とりまとめ
- ・地方試験場派遣者の検討・決定
地方試験場派遣者の選出を各学科へ依頼、とりまとめ
- ・平成30年11月施行調査(プレテスト)の監督者選出
- ・入試問題仕分け作業
- ・各種入試志願者の情報確認
各種入試志願者の情報確認を各学科に依頼
- ・各種入試合否判定
各種入試の合格者数、合格得点率などのデータ入力
- ・全学入試委員会への参加
i チャレンジ型入試について各学科の意見のとりまとめ
全学入試委員会で提示された検討課題を各学科に伝達、回答のとりまとめ
- ・大学入試センター試験業務
試験監督割振り、試験会場準備、試験実施および実施後の処理など
- ・学務入試グループとの連携：
A0入試面談日固定案の検討
センター試験業務：準備、実施他

(3) 活動のまとめ

入試委員長および全学入試委員は、年度内に複数回の各種入試に対応する必要がある、かつ人間生活学部は学科数が多く、入試業務は多岐にわたった。来年度から、人間生活学部では新たな入試制度を導入することとなるため、より一層スムーズに業務処理が行えるよう努めたい。

I 委員会の目的

全ての学生が学生生活の充実をはかり、実りある大学生活を送れるようにその方策を検討する。

II 委員会の構成

1. 各学科より 1 名を選出して構成する。

2. 平成 30 年度委員

藤田義彦(人間生活学科)、○犬伏知子(食物栄養学科)、松本有貴(児童学科)、長濱太造(メディアデザイン学科)、川村恭平(建築デザイン学科)、小坂清文(心理学科) [○印：委員長] 【敬称略】

III 委員会開催の概要

一. 第 1 回学生指導委員会

日時：9 月 18 日（火）9 時 20 分から 10 時 10 分

場所：1 号館 11 階（大学院演習室）

出席者：藤田、松本、長濱、川村、小坂、犬伏（司会、記録）

協議内容

1. 今年度、学生指導委員会として何を行うか？

H29 年度の「クラブ・サークル活動に関するアンケート」内容を参考に、内容も前年比較のため同様にして行う。ただし、質問 8 の「クラブ・サークルの顧問との接触などその関係について」の質問は除く。

2. アンケートの時期については、12 月の各学科の HR で行ってもらい、年内締め切りとする。

3. QR コードなど、アンケートの仕方については、長濱先生が、前年度委員長の山城先生や篠原先生にお聞きして作成してくださる。

4. 結果を学生が見える方向で考える。

5. 委員会として、結果として見えたことを話し合う。

6. 結果を、年報に残す。

7. 次回の会議は、集計結果がでてから、平成 31 年 1 月中に行う。

二. 第 2 回学生指導委員会

日時：平成 31 年 1 月 18 日（金） 9 時 30 分から 10 時 20 分

場所：1 号館 11 階 大学院演習室

出席者：藤田、松本、長濱、川村、小坂、犬伏（司会、記録）

協議内容

1. 平成 30 年度 クラブ・サークル活動に関するアンケート結果を長濱先生がまとめてくださったが、これをどうするか。

2. 学科によって、回答率に差がでた。昨年とは回答率に差があるので、昨年度と比較はしなくても、今年度のみでまとめる。

3. せっかく、学生がアンケートに答えてくれたので、その結果はどうであったか、知らせるべきではないか。

4. 教員は、共有フォルダーの学生指導委員会の中にアンケート結果を保存し、学生にはパソコ

ン室の学生が見える「読み込み専用フォルダー」に保存する。(長濱先生が保存してください)

5. ポータルのお知らせで、アンケート結果はパソコン室の「読み込み専用フォルダー」に保存してあるので見てください。と知らせる。(期限は、3月の末まで)
その時の、鏡の文章は小坂先生が考えてくださった。

「クラブ・サークル活動に関するアンケート」の集計結果について、学生指導委員会からお知らせします。

本アンケートは、平成30年11月15日から同年12月20日までの間、人間生活学部在籍している1,096人の人間生活学部の学生を対象に学生ポータルサイトを利用して実施され、327人(回答率29.8%)の学生から回答がありました。

回答者の男女別と所属状況別の内訳は、女子70.6%・男子29.4%、「所属している」55.4%・「かつては所属していたが、今は所属していない」14.1%・「今まで1度も所属したことはない」30.6%でした。

また、回答者のうち、各クラブ・サークルへの所属(歴)の多かったのは、「所属している、していた文化部」別では「文理食生活研究部」13人、「うたおは部」9人、「所属している、していた体育部」別では「ダンス部」6人、「女子サッカー部」6人、「陸上競技部」6人、「所属している、していた同好会・サークル・郷土芸能振興サークル・委員会」別では「エイサー団体ニライカナイ(沖縄県人会)」8人、「籠球同好会」7人、「山城祭実行委員会」6人などでした。

なお、詳しい集計結果については、本年2月7日(木)から3月29日までの間、学内のコンピュータ室のパソコンで、次のフォルダを開いてご覧ください。

マイコンピュータ→読み込み専用領域(Z)→人間生活学部_学生指導委員会
本年度のアンケートへの協力、ありがとうございました。」

6. 平成30年度のクラブ・サークル活動に関するアンケート集計結果は、年報に載せる。

三. 総括

学生ポータルのお知らせで学生さんに連絡し、アンケートを行ってもらったが学科によって回答率に差がでた。アンケートには、全員回答してほしいがなかなか現実には難しいと思った。この、結果も一部の学生さんの意見ではあると思うが、何か今後役に立てることができれば意味があると思う。

人間生活学部（学生指導委員会）

平成 30 年度学生アンケート（クラブサークル）集計結果

表 回答者数と回答率

	人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
在籍者数	91	230	302	51	144	278	1096
回答者数	46	119	111	24	8	19	327
回答率(%)	50.5%	51.7%	36.8%	47.1%	5.6%	6.8%	29.8%

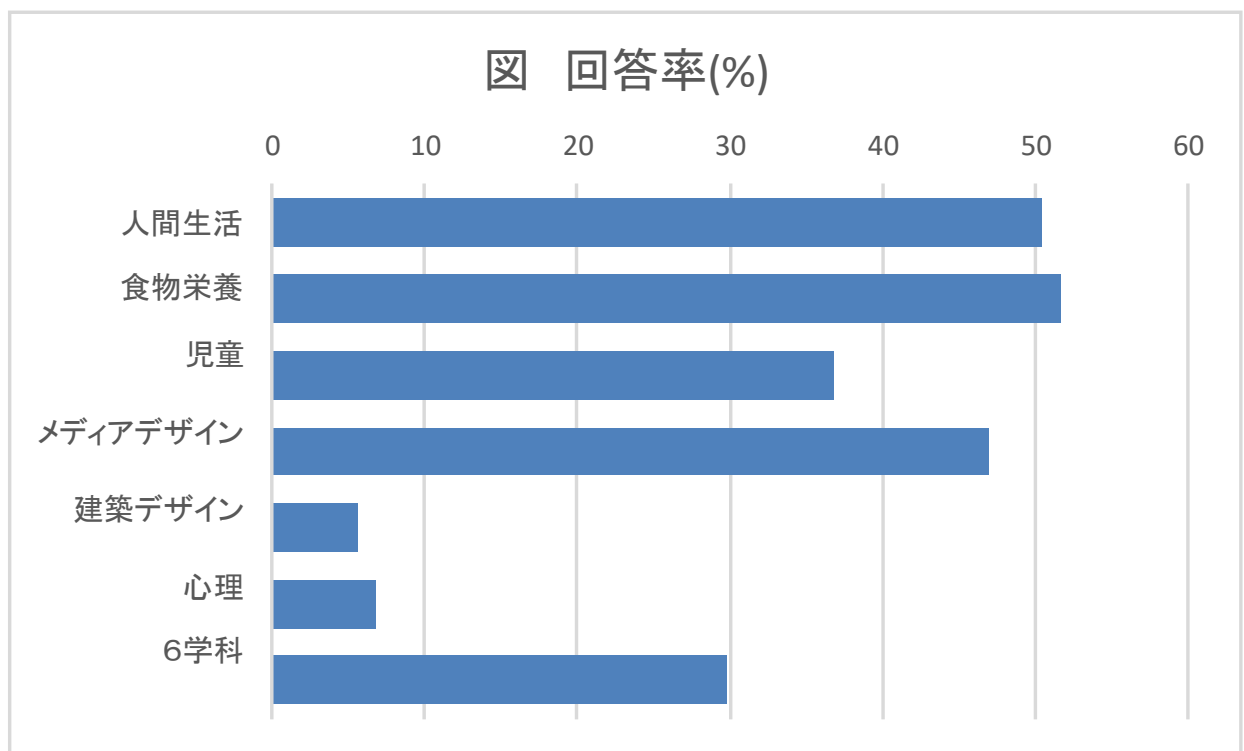


表 性別		人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
1.女性	人数	27	99	76	8	5	16	231
	学科の%	58.7%	83.2%	68.5%	33.3%	62.5%	84.2%	70.6%
2.男性	人数	19	20	35	16	3	3	96
	学科の%	41.3%	16.8%	31.5%	66.7%	37.5%	15.8%	29.4%
合計	人数	46	119	111	24	8	19	327
	学科の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

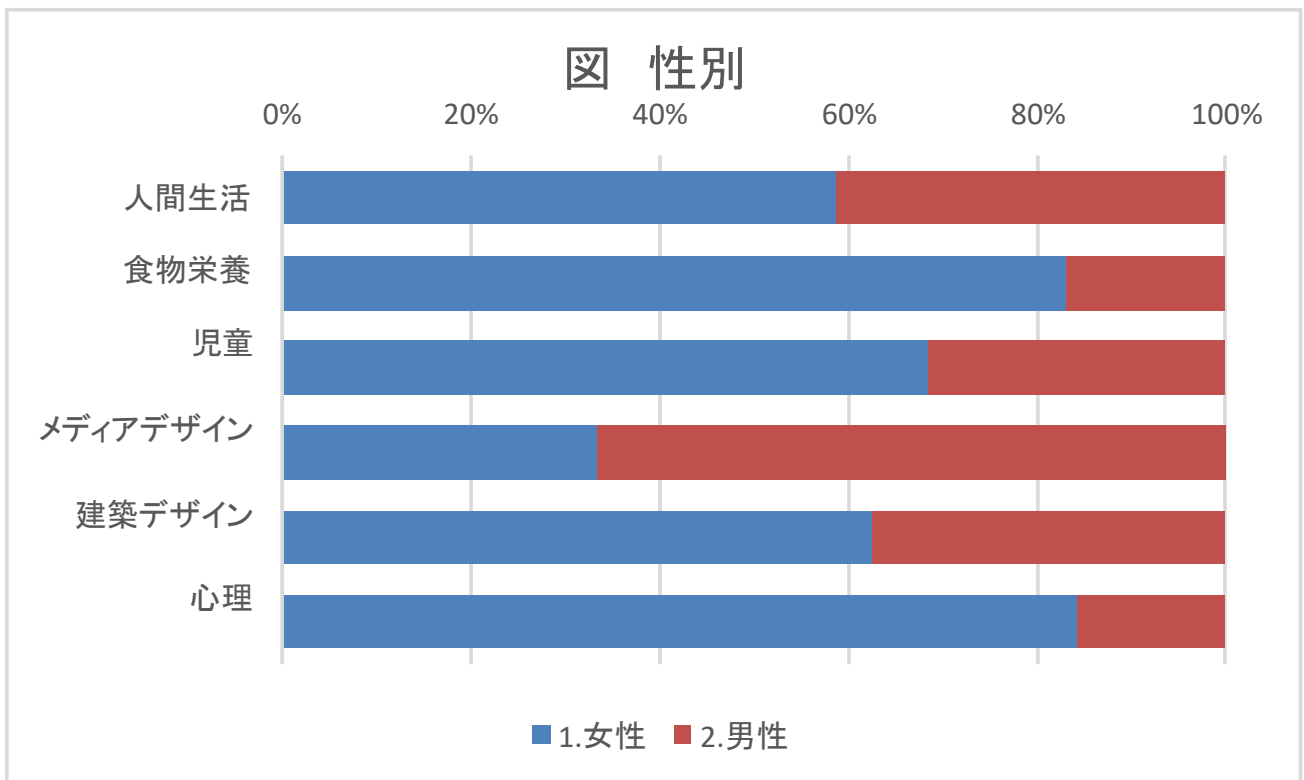


表 学年		人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
1年生	人数	20	27	35	9	5	9	105
	学科の%	43.5%	22.7%	31.5%	37.5%	62.5%	47.4%	32.1%
2年生	人数	18	41	61	7	3	4	134
	学科の%	39.1%	34.5%	55.0%	29.2%	37.5%	21.1%	41.0%
3年生	人数	6	13	10	5	0	4	38
	学科の%	13.0%	10.9%	9.0%	20.8%	0.0%	21.1%	11.6%
4年生	人数	2	38	5	3	0	2	50
	学科の%	4.3%	31.9%	4.5%	12.5%	0.0%	10.5%	15.3%
合計	人数	46	119	111	24	8	19	327
	学科の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

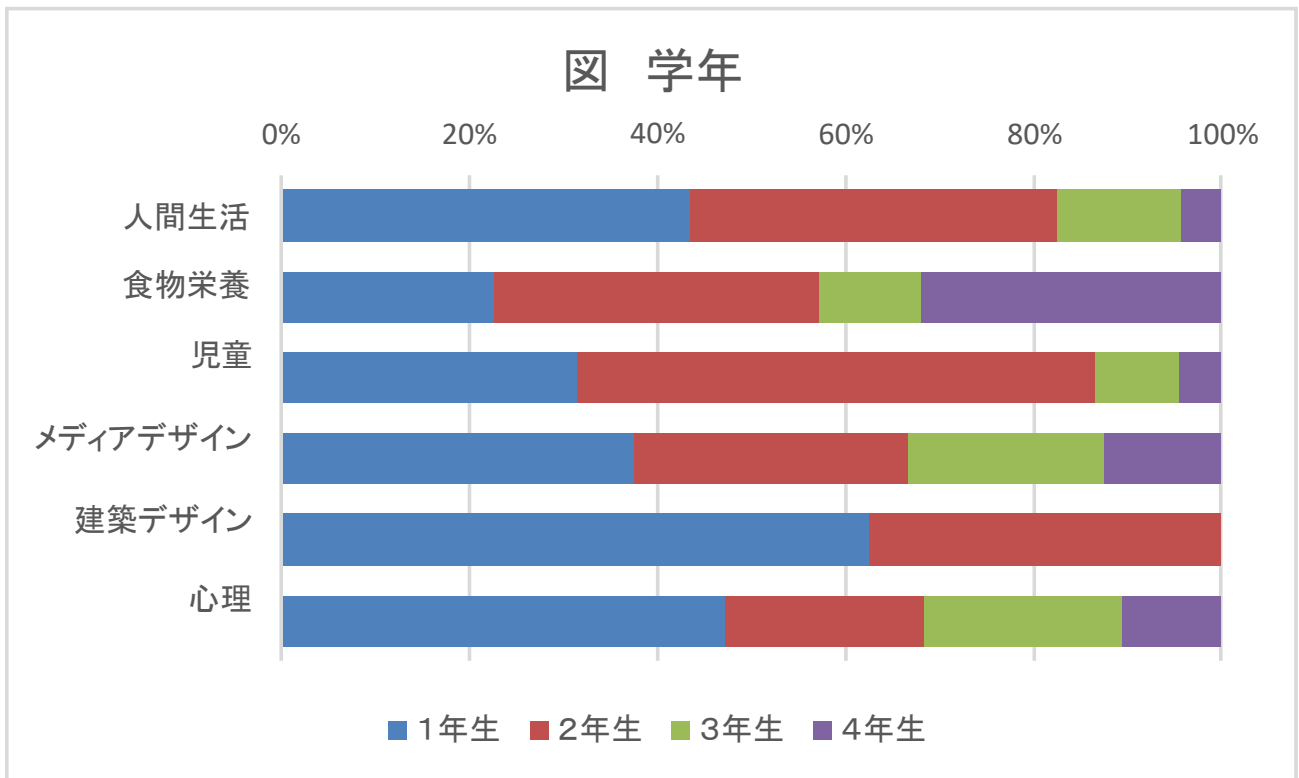


表 クラブ・サークルに所属していますか

		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	合計
1.所属している	人数	27	54	68	12	6	14	181
	学科の%	58.7%	45.4%	61.3%	50.0%	75.0%	73.7%	55.4%
2.かつては所属していたが、今は所属していない	人数	5	22	12	4	0	3	46
	学科の%	10.9%	18.5%	10.8%	16.7%	0.0%	15.8%	14.1%
3.今まで1度も所属したことはない	人数	14	43	31	8	2	2	100
	学科の%	30.4%	36.1%	27.9%	33.3%	25.0%	10.5%	30.6%
合計	人数	46	119	111	24	8	19	327
	学科の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

図 クラブ・サークルに所属していますか

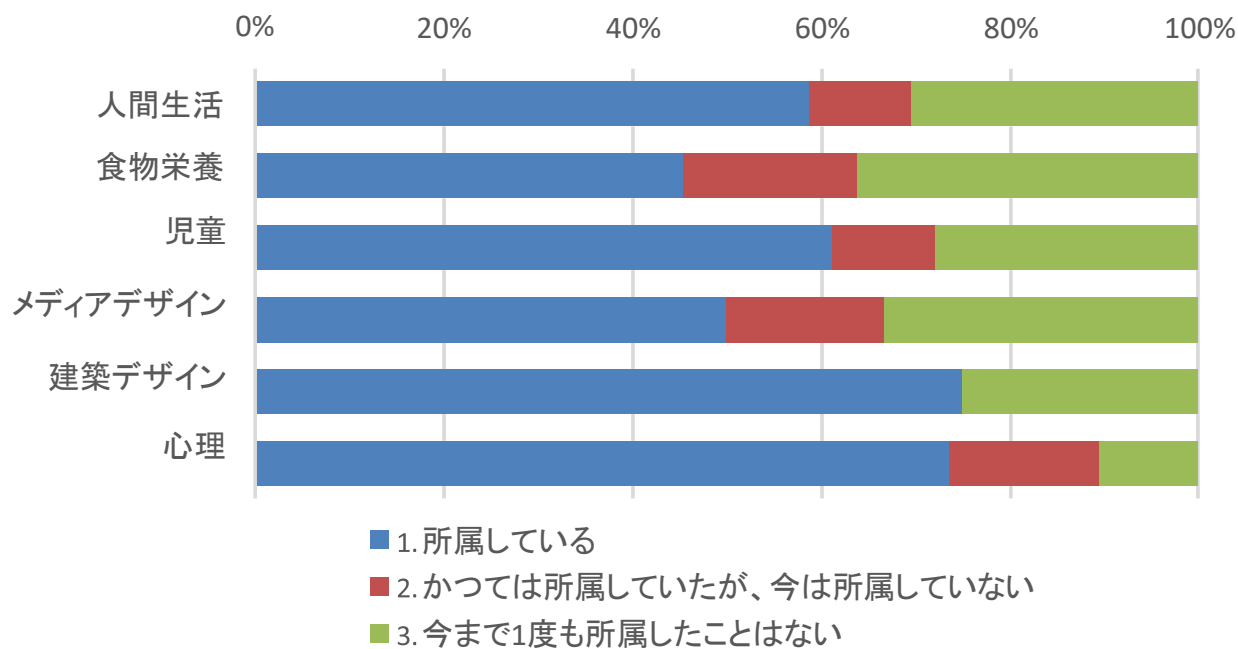


表 所属している、していた文化部の名称							
	人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建 築 デザイン	心理	合計
BBS部	1	0	1	0	1	3	6
HOTSTAFF部	0	2	4	1	0	2	9
うたおは部	2	0	9	0	0	0	11
コミックアート部	2	1	1	2	1	3	10
学生ボランティア部	0	0	1	0	0	0	1
軽音楽部	2	5	3	1	0	0	11
写真部	0	3	1	2	0	0	6
手話部Friends	0	1	0	0	0	0	1
書道部	0	1	0	0	0	0	1
人形浄瑠璃部	0	1	1	2	0	0	4
地域貢献まちづくり後援部	1	0	0	0	0	0	1
茶道部	0	3	1	0	0	0	4
文理食生活研究部	3	13	0	0	0	0	16
放送部ナナイロ☆アンテナ	0	0	0	4	0	2	6
和太鼓部億	1	2	0	1	0	1	5
箏曲部	0	0	0	0	0	1	1
合計	12	32	22	13	2	12	93

表 所属している、していた体育部の名称

	人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
ダンス部	1	4	6	1	0	0	12
バドミントン部	0	2	1	1	0	0	4
フットサル部	0	0	3	0	0	0	3
弓道部	0	1	2	0	0	0	3
剣道部	1	0	2	0	0	1	4
硬式テニス部	1	3	2	0	0	0	6
準硬式野球部	2	1	0	0	0	0	3
女子サッカー部	3	2	6	0	0	2	13
女子バスケットボール部	1	0	4	0	0	0	5
女子バレーボール部	0	5	1	0	0	0	6
卓球部	0	0	1	0	0	0	1
男子サッカー部	1	1	2	0	0	0	4
男子バスケットボール部	0	2	0	0	0	0	2
男子バレーボール部	1	0	1	1	0	0	3
軟式野球部	2	1	3	0	0	0	6
日本拳法部	0	3	0	0	0	0	3
陸上競技部	1	0	6	0	0	0	7
合計	14	25	40	3	0	3	85

表 所属している、していた【同好会・サークル・郷土芸能振興サークル・委員会】の名称

	人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
dreamhouse	0	0	0	0	2	0	2
KOKORO	1	0	0	0	1	2	4
エイサー団体ニライカナイ（沖縄県人会）	2	4	8	0	0	0	14
クラブ執行委員会	1	1	0	0	0	1	3
とくしまピアサークル	1	0	0	0	0	0	1
ハンドベルクワイア	0	0	2	0	0	0	2
羽球同好会	3	4	3	0	1	1	12
軽射撃同好会	0	1	0	0	0	0	1
高知県人会～TOSAMONO～	0	2	3	0	0	1	6
山城祭実行委員会	2	6	1	0	1	0	10
天文同好会	0	0	1	0	0	0	1
徳島文理大学連	1	4	4	0	0	0	9
文理食生活研究部	1	0	0	0	0	0	1
籠球同好会（バスケットボール）	1	2	7	0	0	0	10
合計	13	24	29	0	5	5	76

表 クラブ・サークルを辞めた理由（複数回答）

		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	合計
1 興味がなくなった	人数	2	3	3	0	0	0	8
	学科の選択率%	40.0%	14.3%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
2 先輩の指導について 行けなくなった	人数	0	6	2	0	0	0	8
	学科の選択率%	0.0%	28.6%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	
3 人間関係	人数	1	6	3	1	0	3	14
	学科の選択率%	20.0%	28.6%	25.0%	25.0%	0.0%	100.0%	
4 勉強する時間がなくな った	人数	2	10	3	2	0	1	18
	学科の選択率%	40.0%	47.6%	25.0%	50.0%	0.0%	33.3%	
5 アルバイトができな い	人数	2	4	2	0	0	1	9
	学科の選択率%	40.0%	19.0%	16.7%	0.0%	0.0%	33.3%	
6 その他（引退等）	人数	1	9	4	2	0	1	17
	学科の選択率%	20.0%	42.9%	33.3%	50.0%	0.0%	33.3%	
合計	人数	5	21	12	4	0	3	45

図 クラブ・サークルを辞めた理由（複数回答）

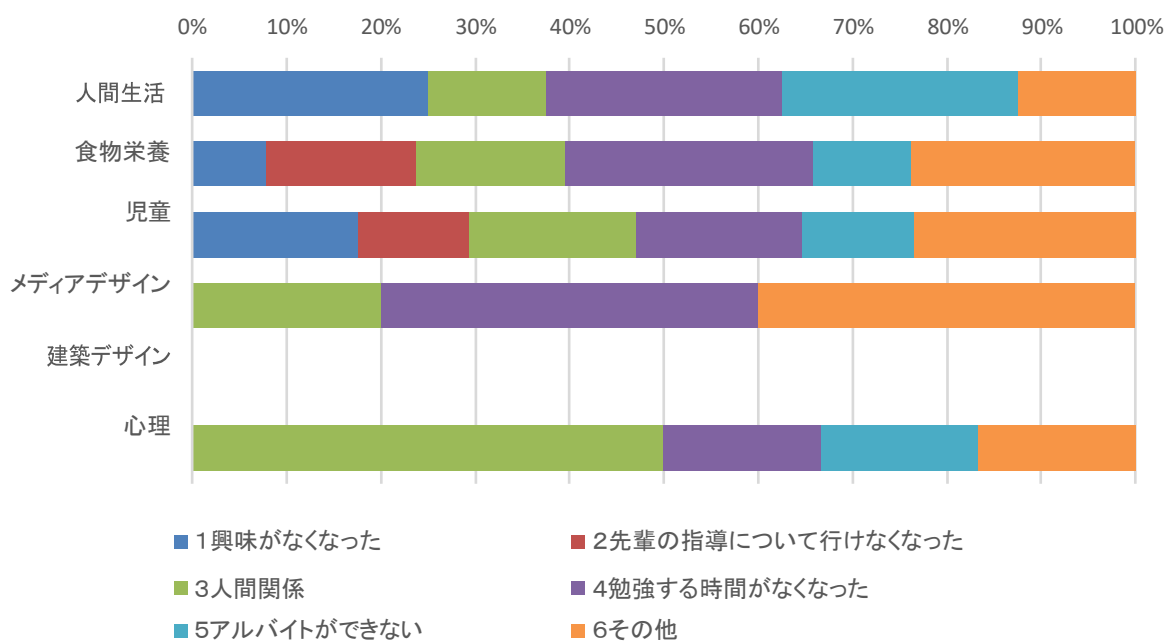


表 大学に入学後どのくらい経過してして所属したか

		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	合計
1か月以内	人数	7	24	20	3	0	3	57
	学科の%	21.9%	31.6%	25.0%	18.8%	0.0%	17.6%	25.1%
半年以内	人数	6	7	14	6	3	5	41
	学科の%	18.8%	9.2%	17.5%	37.5%	50.0%	29.4%	18.1%
1年以内	人数	7	6	8	3	2	1	27
	学科の%	21.9%	7.9%	10.0%	18.8%	33.3%	5.9%	11.9%
それ以上	人数	10	35	28	4	1	6	84
	学科の%	31.3%	46.1%	35.0%	25.0%	16.7%	35.3%	37.0%
無回答	人数	2	4	10	0	0	2	18
	学科の%	6.3%	5.3%	12.5%	0.0%	0.0%	11.8%	7.9%
合計	人数	32	76	80	16	6	17	227
	学科の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

図 大学に入学後どのくらい経過してして所属したか

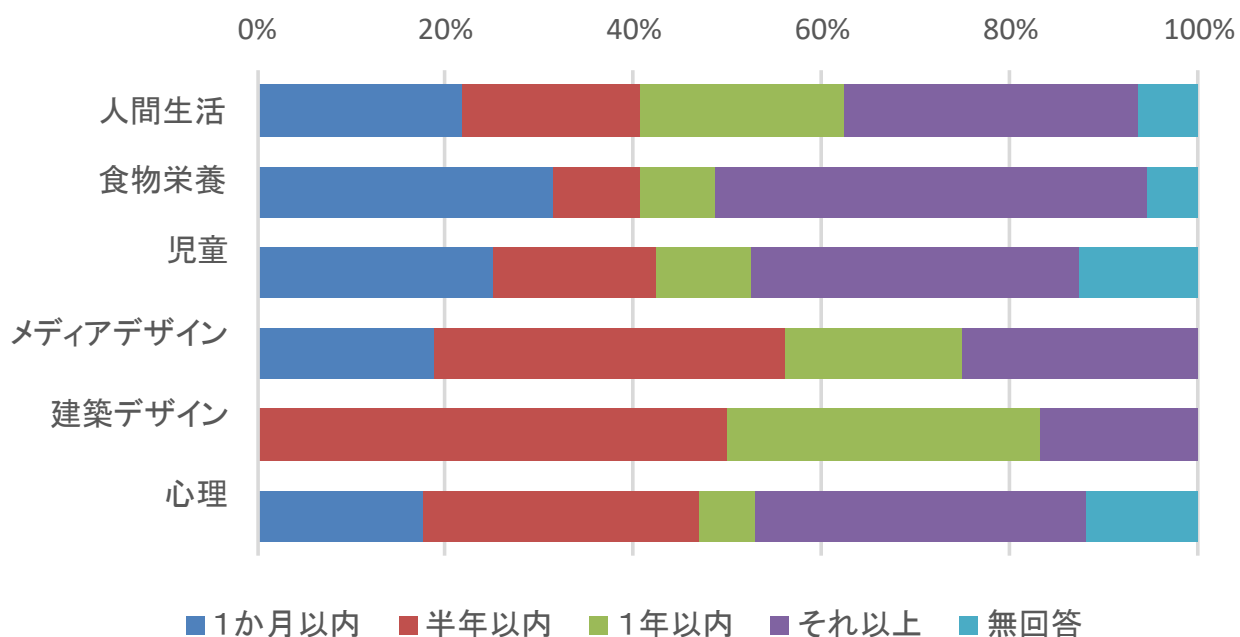


表 クラブ・サークルに所属した理由（複数回答）

		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	合計
1 活動内容に興味を持った	人数	22	50	53	14	1	13	153
	学科の選択率%	68.8%	68.5%	68.8%	87.5%	16.7%	76.5%	
2 友人関係を広げたかった	人数	8	21	22	8	3	9	71
	学科の選択率%	25.0%	28.8%	28.6%	50.0%	50.0%	52.9%	
3 友人に誘われた	人数	9	20	26	2	3	5	65
	学科の選択率%	28.1%	27.4%	33.8%	12.5%	50.0%	29.4%	
4 共通の趣味の友人を作りたかった	人数	4	4	9	5	0	6	28
	学科の選択率%	12.5%	5.5%	11.7%	31.3%	0.0%	35.3%	
5 特に理由はない	人数	1	4	4	0	0	1	10
	学科の選択率%	3.1%	5.5%	5.2%	0.0%	0.0%	5.9%	
6 その他	人数	1	1	5	0	0	0	7
	学科の選択率%	3.1%	1.4%	6.5%	0.0%	0.0%	0.0%	
合計	人数	32	73	77	16	6	17	221

図 クラブ・サークルに所属した理由（複数回答）

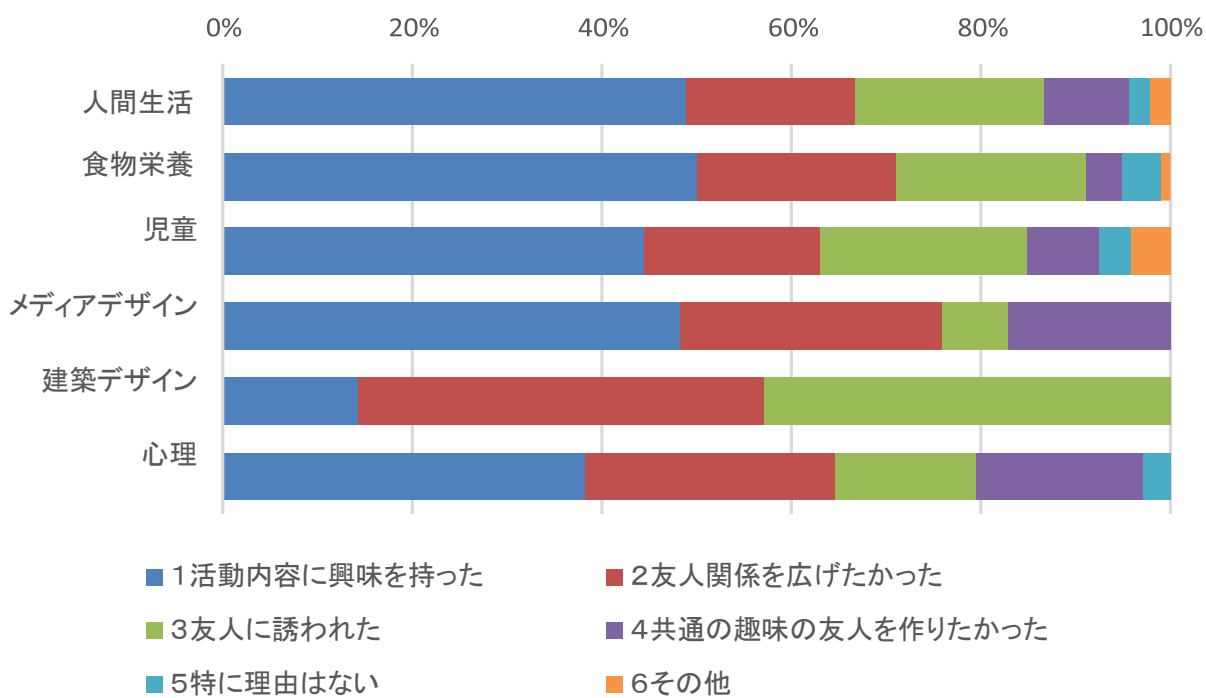


表 所属当初と比べて、現在の参加状況

		人間生活	食物栄養	児童	メディアデザイン	建築デザイン	心理	合計
1.当時よりも頻繁に参加している	人数	4	9	8	2	0	1	24
	学科の%	12.5%	11.8%	10.0%	12.5%	0.0%	5.9%	10.6%
2.当時と変わらずに参加している	人数	13	19	36	6	2	9	85
	学科の%	40.6%	25.0%	45.0%	37.5%	33.3%	52.9%	37.4%
3.当時よりも参加する頻度は減っている	人数	9	29	22	3	4	4	71
	学科の%	28.1%	38.2%	27.5%	18.8%	66.7%	23.5%	31.3%
4.当時からほとんど参加したことがない	人数	1	4	6	1	0	1	13
	学科の%	3.1%	5.3%	7.5%	6.3%	0.0%	5.9%	5.7%
無回答	人数	5	15	8	4	0	2	34
	学科の%	15.6%	19.7%	10.0%	25.0%	0.0%	11.8%	15.0%
合計	人数	32	76	80	16	6	17	227
	学科の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

図 所属当初と比べて、現在の参加状況

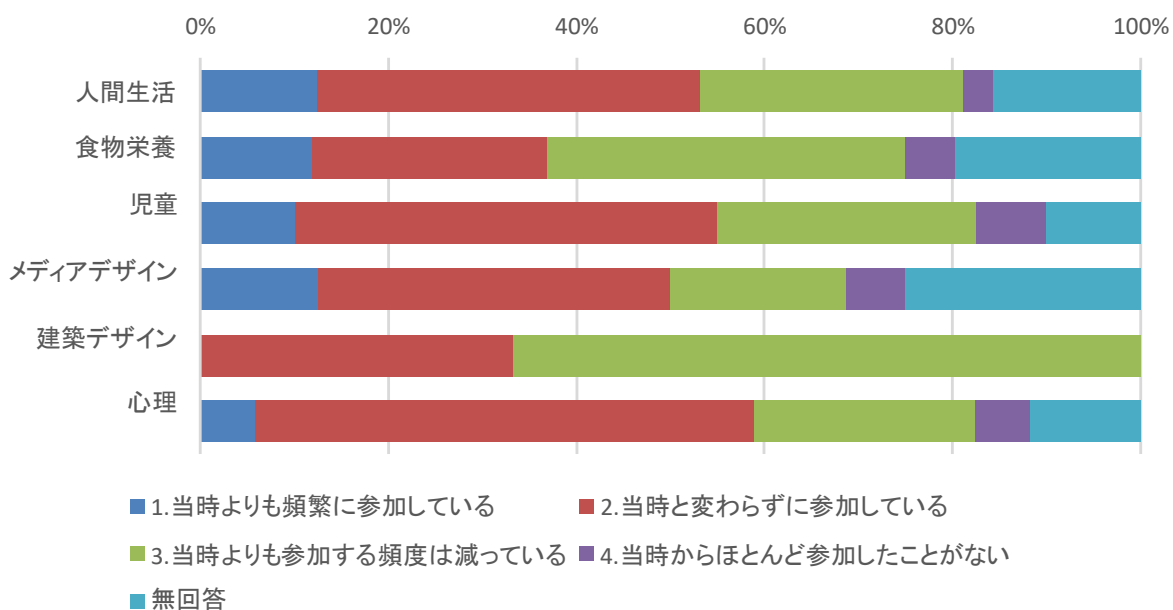


表 現在も続ける理由（複数回答）

		人間生活	食物栄養	児童	メディア デザイン	建築 デザイン	心理	合計
1 クラブ・サークル活動 を行うため	人数	19	31	48	9	1	11	119
	学科の選択率%	67.9%	52.5%	69.6%	75.0%	16.7%	78.6%	
2 交友関係を広げる・深 めるため	人数	10	23	25	6	3	8	75
	学科の選択率%	35.7%	39.0%	36.2%	50.0%	50.0%	57.1%	
3 友人と遊ぶため	人数	5	9	14	4	0	3	35
	学科の選択率%	17.9%	15.3%	20.3%	33.3%	0.0%	21.4%	
4 惰性	人数	0	10	5	0	0	3	18
	学科の選択率%	0.0%	16.9%	7.2%	0.0%	0.0%	21.4%	
5 特に理由はない	人数	5	10	5	1	2	2	25
	学科の選択率%	17.9%	16.9%	7.2%	8.3%	33.3%	14.3%	
6 その他	人数	0	2	2	0	0	0	4
	学科の選択率%	0.0%	3.4%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	
合計	人数	28	59	69	12	6	14	188

図 現在も続ける理由（複数回答）

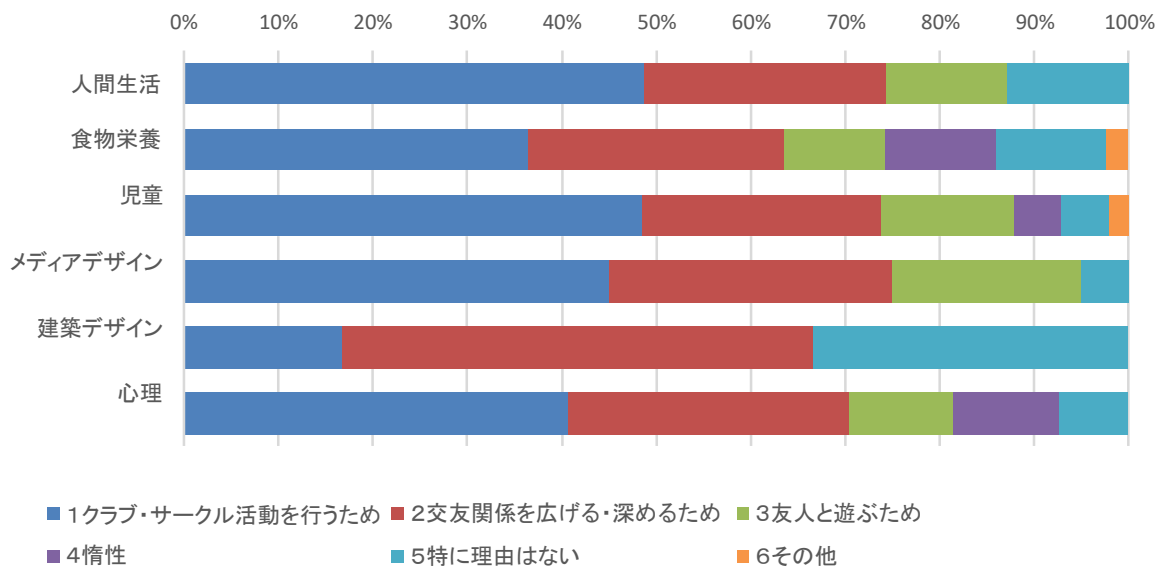


表 クラブ・サークル活動について、御意見があれば、思ったことを何でも御自由にお書きください。

<p>7号館の部室で活動しているのですが、空調と電気(蛍光灯以外)が無いのが不便という意見をよく聞きます。部室も狭いため、物の置き場に限りがあったり、人が多いときは入れないこともあります。 夏や冬には環境がよくないことで参加者が激減します。部室での活動がメインなため、活動を続けていくうえでこういった点は重要だと思います。将来的に改善を検討していただきたいです。</p>
<p>みんなといろんな事を共有することが出来る。 楽しい部活をすることができ、絆を深めれる。</p>
<p>海外遠征を許可して欲しいです。海外に行くリスクは高いと思いますが、それによって得られるものはとても価値のあるものだと思います。よろしくお願いします。</p>
<p>サークル費が少ない</p>
<p>一年生の文理学の行事（コンサート）と学祭の行事を一緒にしないでほしかったです。学祭になるとHOTSTAFF部はとて忙しくなるうえに文理学の方へ行きにくい雰囲気も出来てしまっていたので大変でした。</p>
<p>各部、部長を筆頭に積極性及び自発性のある人が少ない為、更なる活性化や改善等は非常に困難である。また、クラブ・サークル構成員、個々の責任能力を高めることも重要課題として提示させて頂く。</p>
<p>学校から援助してもらえるお金が大幅に減って困っている。</p>
<p>学祭のテント代が高い</p>
<p>頑張ります</p>
<p>将来の役に経つと思うので、楽しく活動しています。</p>
<p>部員は40名を越え、増える一方なのに部費が年々減らされています。増減の理由は明言するべきだと思います。</p>
<p>部費がほしい。</p>
<p>部費が急に半額になるのは活動制限が多くなるのでもう少し段階的に経費削減を行って欲しい</p>
<p>部費が減額されてとても活動しづらいです。</p>
<p>部費をもっとあげてください</p>
<p>放送部は部活動内容上インターネットを使うことが頻繁にあります。Wi-Fiが近い部室に変えていただくか、インターネット環境が整った部室の移動をお願いしたいです。</p>
<p>輪が広がって楽しそうだなと思います</p>
<p>やりたいと思える部活・サークルがなかった。</p>
<p>やりたいと思える部活・サークルがなかった。</p>
<p>1年誘って飲み会で酒はともかくタバコはやめた方がいいと思う</p>
<p>学費や実習費がありお金に余裕がないのと、授業の関係で時間がありません。</p>
<p>活発に活動していていいと思う。</p>

平成 30 年度人間生活学部広報委員会活動報告

広報委員会委員長 長濱太造

1. はじめに

人間生活学部広報委員会は、学部 6 学科から各 1 名の広報委員により構成され、入試広報部との連携のもと、大学案内やホームページの作成、各種の広報活動を行っている。平成 30 年度は委員会を 1 回開催し、その後もメール等で情報共有を行った。

2. 平成 30 年度 第 1 回人間生活学部広報委員会

日時：2019 年 12 月 1 日 18 日（金） 14:50～15:40

場所：メディアセンター 4 階・スタジオ型講義室

出席：青木（心理） 池田（建築） 坂井（食物） 竹内（生活） 長濱（メデ）

山城（メデ） 林（児童） （五十音順 敬称略）

※山城先生は大学院 HP 担当として参加

議題 1. 人間生活学部独自ホームページのリニューアルについて

議題 1-1. セキュリティ確保について

- ・学部 HP の範囲は、6 学科+専攻科+大学院（現状どおり）。
- ・セキュリティ確保＝ハードとソフトのセキュリティ確保。
- ・現在の状況は、ハードは本学のサーバーで、ソフトは BlognPlus（無料ソフト）を使用している。
- ・本学のサーバーはしっかりと守られているが、BlognPlus はすでにアップデートが止まっており、安全とはいえない状況である。よって、リニューアルする必要がある。
- ・大学選考時に HP は高校生だけでなく、保護者も必ず見る。ハッカー等に乗っ取られ、悪用されるような事態は断じて防がなければならない。
- ・学部 HP のセキュリティ確保が最優先である。
- ・リニューアルに必要な予算を確保するため、学部長と話を進める。

議題 1-2. 受験生を増やすための魅力的な内容について

- ・心理学科の HP リニューアルが進められている。臨床心理相談室の HP を 2018 年度中に、学科と大学院の HP を 2019 年度中にリニューアルして公開する予定である。
- ・心理学科の HP リニューアルを先行事例として課題等を蓄積し、学部 HP リニューアル時に役立てる。青木先生が情報収集にあたって下さる。
- ・人間生活学科が 2020 年度からコース制を開始するので、2019 年度中に HP 等で広報を開始する。
- ・本委員会でこれを支援する。

3. 各学科運営のホームページ投稿実績、新聞・テレビ・雑誌等各種メディアでの掲載・紹介実績、その他各学科独自広報活動（純粋な学外実習や社会貢献活動とは別）について

【人間生活学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

学科紹介：7、学科からのお知らせ：7

研究室紹介：(研究授業、日赤救急法講習会など) 6
以上 計 20 件

○その他学科独自の広報活動

- ・藍染シカ革小物を開発(徳島新聞朝刊 2018 年 11 月 8 日)
県のジビエ倍増モデル事業の一環として、文理大生と小松島西高生が共同開発して小物商品を作成、販売を行うことを提案。
- ・産業創造支援大学長ら要望(徳島新聞朝刊 2018 年 12 月 19 日)
地方創世関連事業への支援についての知事との懇談会において、シカ革を使った製品の商品化の支援を求めるなどの提案と要望がなされた。
- ・阿波地美栄狩猟フェスタにおいて「シカ革の商品開発について」ポスター発表
2019 年 1 月 27 日(徳島グランヴィリオホテル)

【食物栄養学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

学科からのお知らせ：12 学科の特徴と魅力：1 教員：1 研究室紹介：1
カリキュラム：1 資格：1 入学式：1 新入生宿泊セミナー：1
遍路ウォーク：1 管理栄養士国家試験合格率：1 進路・就職状況：1
AO・推薦入試説明会：1 オープンキャンパス：5 計 28 件

○その他学科独自の広報活動

- ・HACC 対応の調理室(14 号館)のリニューアルにともない、A4 チラシを作成し、オープンキャンパスなどの広報に活用した。
- ・山城祭の期間中(平成 30 年 10 月 12~14 日)に「健康ランド」を開催し、来学された一般の方々を対象に健康増進のための食生活指導を行った。
- ・2018 年 7 月 18 日~26 日の 9 日間、清水夕加里さん(食物栄養学科 2 年)が第 46 回裏千家ハワイセミナーに参加し、修了書が授与された。
- ・食物栄養学科 3 年の小野朱里さん(食生活研究会部長)が、徳島新聞の取材を受け、「専門家・先輩からのアドバイス 栄養価の高い食事に」として、平成 30 年 5 月 20 日(日)に掲載された。

【児童学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

学科運営サイト：学科のお知らせ(2 件)、研究室紹介(10 件)
学科ブログ：15 件
学科Instagram：116 件

○その他学科独自の広報活動

- ・チラシ「感・夢・温」の更新
児童学科のスローガンをベースにしたチラシを年度更新。卒業生や在校生の座談会等で学科での勉学や生活、就職について紹介した。
- ・学科ポスターの制作
オープンキャンパスなどで展示できるポスターを制作。様々な授業や行事の写真を見せることで学科の様子を伝える。
- ・広報ツールの活用
オープンキャンパス等の情報を提供する@LINE アカウントの活用。リピート参加を促すためスタンプカードの利用。

【メディアデザイン学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

学科からのお知らせ：5 新入生宿泊セミナー：1 オープンキャンパス：6
イベント：5 ボランティア：1 地域貢献：3 非常勤講師紹介：2
産学官協定：1 プロジェクト：1 カリキュラムマップ1 計 26 件

○その他学科独自の広報活動

- ・学科オリジナルのオープンキャンパスポスターおよびA4チラシを作成し、オープンキャンパス時に活用した。
- ・2018年8月23日 徳島新聞「車いす利用者どう避難 災害時の支援方法学ぶ」

【建築デザイン学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

オープンキャンパス：7 2級建築士ゼミ：1 宅建ゼミ：2
カリキュラムマップ1 AO・推薦入試説明会：1 計 12 件

○その他学科独自の広報活動

- ・平成30年度現場見学会
去る11月28日徳島県藍住町で建設中の仮称「藍住文化ホール等複合施設」工事へ、3年生全員で研修に参加した。
研修は、まもなく卒業して社会に出ることで、建設産業への魅力や関心をより深める授業の一環として実施した。
現場では町の技師からの概要の説明、また建設業者監督からは作業での細かい説明を受けました。その後現場を一巡した後は活発な質疑応答の時間をもち有意義な見学会になった。
- ・平成30年度研修旅行
建築デザイン学科では、毎年、興味深い建築物や街を訪れて勉強する学外研修旅行をしている。今年度は9月19日(水)に神戸市の「竹中大工道具館」と「兵庫県立美術館」を訪れた。

【心理学科】

○ホームページに投稿された記事のカテゴリと記事数

公認心理師(4)、教員紹介(2)、就職進路(1)、心理学科では今(3)、
カリキュラム(1)、研究室紹介(2) 計 13 件

○その他学科独自の広報活動

- ・テーマを公認心理師に絞った広報チラシの作成・配布
- ・徳島県警本部とのストーリーカーに関する共同研究の報道
H30.5 NHK 徳島放送局、徳島新聞
H30.10 山陽新聞
H30.11 NHK 徳島放送局、徳島新聞、読売新聞

4. 総括

平成30年度は6学科ともにそれぞれの特色を活かし、学科ホームページの更新や学科独自の広報活動、新聞・テレビ等各種マスメディアを利用した広報活動を行った。また、新しい取り組みとして、人間生活学部独自ホームページのリニューアルに向けて動き出した。メディアを通じてのアピールや、地域住民との交流活動、自治体や企業などとの協同プロジェクトなど、様々な活動や情報発信を通じて、広く各学科の活動を知っていただき、また学科への「共感」を感じていただくチャンスを増やしていく必要がある。改めて各学科がホームページや各種メディアを通じて魅力的な情報を発信するのに加え、地域連携活動、高大連携活動等を通じ、地域や高校生に身近な存在となるための活動を継続していかなければならない。

I 委員会の目的

教育実習等に関する資質や指導技術を確かなものするための具体的な方策を検討する。また、教員養成に関する資質や指導技術を確かなものとするための具体的な方策を検討する。

II 委員会の構成

1. 各学科より 1 名を選出して構成する。

2. 平成 30 年度委員

竹原 明美 (人間生活学科)、松原 恵子 (食物栄養学科)、◎三橋 謙一郎 (児童学科)、篠原 靖典 (メディアデザイン学科)、川村 恭平 (建築デザイン学科)、○貴志 知恵子 (心理学科) [◎印：委員長、○印：副委員長] 【敬称略】

III. 委員会開催の概要

一. 第 1 回教員養成推進委員会

日 時：平成 30 年 5 月 25 日 (金) 16:30～18:00

場 所：9 号館 10 階 (研究室⑥)

出席者：竹原、古本、松原、川村、三橋 (司会)、貴志 (記録) 【敬称略】

議 題

1. 「教職実践演習」「教職履修カルテ」について

○「教職履修カルテ」の記入について

- ・児童学科・・学習ポートフォリオとの重なりについては、改善できていない。
- ・生活学科・・ほとんどの学生が教職を取っている。指導は、担任が中心に行っている。
- ・心理学科・・3 割程度が教職を履修している。指導は、チューターが行っている。全体的に、ボランティア活動や研修会等について記入忘れがあるので、スマホからの記入も可能であるのでその都度、入力するように指導する。教職キャリアの記載については教職履修カルテと学習ポートフォリオのドッキングができるとロスも少ない。今後の課題である。その記入については、各学科とも学生への指導に苦慮している。

○「教職実践演習」について

- ・模擬授業や学校現場からの講師を招いて授業をすることもある。5 年目になり軌道にのってきている。

2. 「教育実習」および「教育実習の手引き」について

- ・今年度より実習の手引きと実習日誌を改訂している。教務が中心になって作成してくれた。中身をコンパクトにしている。実習記録も学生が書きやすくしている。
- ・誤字脱字や筆順も問題がある。
- ・欠席や遅刻についても「事前・事後指導」の授業で指導している。
- ・教育実習の評価は、実習協力校に委ねているが、絶対評価が多いので問題も出ている。今後、基準づくりも必要ではないだろうか。

3. 教員採用試験への取り組みについて

- ・児童学科・・全学共通教育センターの講座に加えて、学科独自の対策講座と直前講座を実施している。教員は全員で、学生は希望者に実施している。担任が中心になって、テストも行っている。夏季休業中も行うので、教員の負担にはなっている。
- ・人間生活学科・・家庭科教諭・養護教諭履修者については、全学共通教育センター主催の教員養成対策講座の中で、それぞれ専門講座を実施している。模擬保健室が

できたので、保健指導や模擬授業の力をつけている。また、保健室ボランティアにも参加している。

- ・心理学科・養護教諭履修者については、全学共通教育センター主催の教員養成対策講座の中で専門講座を週2回ほど実施している。模擬保健室ができたので、場面指導、保健指導や模擬授業に活用している。また、保健室ボランティアにも参加している。

4. その他

- ・児童学科が附属小学校と連携してプログラミング教育を行う予定である。
- ・学習支援センターの設立も考えている。
- ・各学科とも今後、多くのアイデアを出して学科の発展を考えていきたいとの意見があった。

二. 第2回教員養成推進委員会

日 時：平成30年11月5日（月） 16:30～17:40

場 所：9号館10階（研究室⑥）

出席者：石堂、古本、竹原、三橋（司会）、貴志（記録）、オブザーバー・辻センター長、中村課長〈全学共通教育センター〉【敬称略】

欠席者：川村【敬称略】

議 題

1. 「教職履修カルテ」について

- ・記入していない学生には、教員のコメントができない。また、教員がコメントできない場合もある。
- ・未記入の学生がいるので、授業等で周知する必要性あり。
- ・教職実践演習前に記入できていない部分については、紙媒体に記録し、チューターの認めを頂いている。

2. 教育実習について

（評価の問題点）

- ・現在は、実習校の評価を、そのまま大学の教育実習評価としている。
- ・「事前・事後指導」の大学での学びの評価が、教育実習評価に反映されていない。
- ・実習校での絶対評価が採用されているので、大学での評価と乖離している場合がある。実習校の指導教員との相性も懸念される。

（改善点）

- ・現在は、実習校の評価を4段階と得点（100点）にしているが、4段階評価のみにして大学での学修を総合的に判断した評価にしてはどうか。

（実習の受講可否について）

- ・従来から作成している規定があるが、もう少し詳細なものにしてはどうか。
- ・児童学科が作成している教育実習受講可否についてのチェック用紙を参考にして、作成するのはどうか。

3. 現時点での教員採用試験の結果について（全学共通教育センター）

- ・現時点での合格者が小学校教諭22名、養護教諭4名となっている。
- ・大学の関係者が協力し、成果をあげることができた。
- ・大学の卒業生も頑張っていて、多くの方が合格している。
- ・不合格者の中にも素晴らしい学生がいるのでその人も評価してあげてほしい。

三. 第3回教員養成推進委員会

日 時：平成31年2月13日（月） 16:30～17:30

場 所：9号館10階（研究室⑥）

出席者：松原、古本、貴志、三橋（司会）、竹原（記録）【敬称略】

欠席者：川村、

オブザーバー：辻センター長、中村課長（全学共通教育センター）【敬称略】

議 題

1. 本年度の取組について

- ・教育実習の評価について：第2回の議題にもあったが、大学内で評価をする場合は教員に負担がかかるのではないか。栄養教諭の教育実習においては、大学の教員が点数をつけている。今後、今の4段階評価を5段階評価にして、大学の教員が点数化してはどうか。実習校での評価においては、個人的な感情が入る場合もある。教務と相談し、実習校での評価を参考に大学で点数をつけるように進めていく。
- ・教職実践演習について：養護教諭は学校現場の先生に来て頂いている。その際の謝礼は出している。栄養教諭については、他県は学校見学をしているケースが多いが、徳島市はそれができず、本学では工場などの見学やゲストティーチャートとして栄養教諭に来て頂き、話を伺っている。しかし、旅費の面で問題がある。小学校は、三橋・津守・岩崎先生の3名が演習形式で実施している。テストは実施せず、レポートで評価している。中高については、教科（例えば、家庭・保健・音楽等）をまとめて実施している。3名の教員が当たっている。
- ・教職履修カルテ、学習ポートフォリオについて：：教職ポートフォリオは学生がなかなか記入してくれない。形式だけになっているのではないか。

2. その他

- ・教員採用試験について：小学校は過去最高の現役合格者を出した。今年の4年生は特に意欲的であった。チームを組むなどして沖縄県出身者は4名の合格者を出すことができた。結果を出しながら学生募集につながらないため、オープンキャンパスでの工夫や広報がさらに必要とされる。
- ・教員養成に関する研修会日程のお知らせ：3月11日に「大学生のための教職ガイダンス」が徳島県立総合教育センターで実施予定
- ・各学科の情報交換

IV 委員会活動の総括

本委員会では、本学の「全学共通教育センター」「全学教職課程委員会」「教員養成対策委員会」等と連携を取りながら、本学の学生の教員としての資質能力の向上を目指し、その中核である平成25年度後期より実施されている「教職実践演習」、ならびにそれと関連した「教職に関する科目」「教職履修カルテ」や「教育実習」「事前・事後指導」等のあり方を中心にして検討を行ってきた。

「教職実践演習」の実施に伴い、養成しようとする教員像の明確化、教職課程カリキュラムと「教職実践演習」との関係、「教職履修カルテ」の記載内容と項目の検証、「教職履修カルテ」と「教育実習」との関係、「教職履修カルテ」の作成とそのとらえ方や大学全体による教職課程運営体制の確立は必要不可欠なことである。これらの点について本委員会では一定程度、有効な話し合いができたように思われる。

この点を踏まえ、次年度は本学学生の教員としてのさらなる資質能力の向上を求めて、「教職実践演習」と関連した「教職履修カルテ」「教育実習」「学校インターンシップ」や「学習支援ボランティア」等のより具体的・実践的なあり方の解明に取り組んでいきたい。

また、教員としての資質能力を高めていくことと関連させながら、教員採用試験への取り組みについてもより具体的な対応策を検討していきたいと考えている。

第2章 各学科スタンダード

第1節 人間生活学科

人間生活学科は人間生活の全般にわたって幅広く学ぶ学科である。人の相互理解のもとに築く心豊かな生活と健やかで快適な生活環境の構築を求めて知識を深めるとともに、環境との共存を図りながら自己に適したライフスタイルを創造する能力と実践力を身につけ、教養とグローバルな思考力を持つ教員・社会人の育成を教育目標としている。

教育内容は「生活経営学」「食物学」「被服学」「住居学」「保育・保健・養護学」の各分野から構成され、それぞれ、総論から各論へ、基礎から専門へと学びを深めていく。授業形態は講義、実験、実習、ゼミナールからなっている。特に1年次前期開講の「生活文化学」は、今日の国際化の進展した生活の中で、日本や郷土を見直し、多様な価値観に対応できる技術や知識・考え方を講義や実習、学外演習験を通して身につけ、さらに、学科教員とのコミュニケーションを通して人との関わり方も理解していく。外部講師による講義も組み入れるなど、本学科の基礎的内容を総合的に学ぶスタートの科目として位置づけている。

本学科で取得できる教員免許は、家庭科および保健科の中学校教諭一種・高等学校教諭一種と養護教諭一種であり、フードスペシャリスト、医療秘書、社会福祉主事任用資格なども取得できる。どの免許・資格も現代社会においては非常に重要な役割をはたす資格である。自立した生活者としての幅広い知識と応用可能な実技力を専門的に身につけるとともに、人間生活学科で取得できる免許又は資格を取得することで自己の専門性を客観化しておく事ができる。

今後は、人間生活学科の教育内容をさらに拡充し、来る「人生100年時代における生活の質向上」を探求する学科となることを目指したい。従来の教育内容に加え「環境」「健康」「福祉」「国際」「そして「防災」の視点を持ち合わせ、生活研究を多面的に追究する学科として歩み続けたい。

- (1) 家庭科及び保健科の中学校1種・高等学校I種、養護教諭1種の教員免許を取得し、社会の変化に柔軟に対応でき、豊かな教養と包容力を持つ教員の養成を目指す。
- (2) 本学科で取得できる医療秘書、フードスペシャリスト、消費生活アドバイザーなどの資格や知識及び他学科の講義を受講・受験することで取得可能となる日商簿記などの知識を、ビジネス社会において主体的に役立たせる意欲を持つ学生の育成を目指す。
- (3) 地域の課題解決に興味・関心・意欲を持ち、積極的に関わり、得られた知見を社会において実践する気概を持つ学生の育成を目指す。
- (4) 大学院や専攻科への進学を希望する学生への十分な学術研究能力と教育実践力の養成を行う。

第2節 食物栄養学科

管理栄養士は「ヒトの健康」を維持・管理する仕事に従事する。そのため、本学科では栄養や保健、衛生に関する高度な学識と技術をもつとともに、「人間栄養学」を実践できる人間味溢れる管理栄養士を養成する。すなわち、チーム医療の一員として傷病者の健康回復を栄養面からサポートできる職業人、保健チームの一員として地域住民の健康増進と疾病予防のために役立つ職業人、あるいはフードサービス分野において栄養部門のトップマネジメントを担うことのできる管理栄養士などである。いずれにおいても、栄養アセスメントに基づくマネジメントサイクルに適応できる職業人でなければならない。

さらに、食生活の乱れに起因する生活習慣病を予防するためには、義務教育課程において食育教育が重要である。そのため、管理栄養士資格を有し、「人間栄養学」を教育できる栄養教諭を養成する。

この目的のために、四年間を通して、栄養学を中心に「人体の構造と機能」や「ヒトの健康と疾患」について、解剖生理学、病理学、臨床栄養学を深く学ぶ。さらに、これらに加えて、低学年では食品学や食品加工学、食品衛生学や給食管理、調理学について学び、高学年では、栄養教育・指導のために、公衆栄養学や栄養教育論を学ぶ。また、三・四年次には、学外臨地実習（学校、病院、給食施設、保健所など）で、実際に管理栄養士が活躍する現場を経験し理解を深める。

上記を現実のものとするには管理栄養士国家試験に合格して、管理栄養士の資格を取得しなければならない。そのために、国家試験に合格できる学力をつけることを教育の基本とする。そのため、国家試験対策としては、①演習科目の有効利用、②模擬試験の実施とその結果分析と事後指導、③自習室の積極的利用、等に対応する。一方、研究職や大学教員を目指す学生の育成にも努め、研究能力および教育能力の涵養については、卒業研究においてそれらの能力の基礎を教育・指導し、さらに大学院人間生活学研究科や専攻科において、より深い研究・教育能力を修得させる。

第3節 児童学科

今日の教育界においては、「学力低下」「幼保一体化」「待機児童」「いじめ」や「児童虐待」等の問題が、社会的論議を呼んでいる。このような客観的な状況を念頭に置き、児童学科では豊かな感性、コミュニケーション能力、情報分析力を身に付け、教育学、心理学、保育学等の学びから、多様な教育・保育ニーズに理論的、且つ、実践的に対応できる教員・保育士等の指導者養成に全力を傾けている。

このことを踏まえ、以下のように児童学科のスタンダードを構築する。

- (1) 主として、小学校教諭1種免許状、幼稚園教諭1種免許状および保育士資格（どの免許状・資格を取得するかは選択は自由）を取得し、国公立の小学校・幼稚園・保育所やその他の児童福祉施設などに就職できる。
- (2) 在学中の学内外での学校・園・施設における小学校教育実習・幼稚園教育実習・保育所実習・保育施設実習や介護等体験実習を通して、専門的知識や実践的指導力の習得のみならず、社会人としての豊かな人間性を身に付けることができる。
- (3) 教員・保育士をはじめとする指導者として必要とされる資質や能力を十分に身に付けることができる。
- (4) 「教育情報処理」、「情報処理」等の教育と情報に関する科目を履修し、将来の教育・保育などの実践現場において、情報機器類を有効に活用することができる。
- (5) 小学校教諭1種免許状の取得を目指す学生は、子どもたちに外国の身近な生活や文化に慣れ親しませる基礎的な英会話の指導ができる。
- (6) 大学院への進学を希望する学生は、十分な学術研究能力とより高度な教育的実践力を習得している。

第4節 メディアデザイン学科

メディアデザイン学科では、デザイン能力を「問題を解決する能力、新しい価値を創出する能力」と捉え、メディアテクノロジーを活用することで新しいデザインを提案できる人材を育成する。具体的には、現代社会のさまざまな問題解決のための企画・立案・実践を行うことのできる能力を習得することを目的とする。ここで言うメディアテクノロジーとは、映像などのデジタルコンテンツの処理、プログラミング、Web サイト、Web アプリケーションの開発、ネットワークの構築・運営・管理、社会調査データなどの統計分析を指す。

また、当学科では、社会で求められている能力「各個人は、人材市場でどの程度の価値を持ち、通用するのか判断できる」、「人材を求める企業は、人材戦略を明確に立案できるようにする」(IT スキル標準 ITSS) も視野に入れ、次のような資格に裏付けられた人材養成を行う。

- 1) IT 専門職：「IT スキル標準」は知識だけでなく実務能力の評価指標であるため、当学科では知識を主体とした資格取得を目標とする。上級情報処理士[㊦]、プレゼンテーション実務士、Web デザイン実務士資格の取得、IT パスポート試験、基本情報技術者試験、応用情報技術者試験、情報処理技術者高度試験、MOS (Microsoft Office Specialist) 試験の合格を目指す。
- 2) 高等学校教諭：平成 15 年度から始まった高等学校「情報」の授業の教育者として、情報社会における IT やセキュリティ、情報倫理、著作権などを学び、人間性豊かなコミュニケーションができる人材を育成する。
- 3) 社会調査士：社会調査士認定協会の認定が始まった初年度（平成 16 年）から、資格を取得できる体制を整えた。調査企画から報告書作成までの社会調査の全過程を学習することにより、基本的な調査方法や分析方法の妥当性、問題点の指摘、提言ができる実力を養う。

カリキュラムは、①情報領域、②コンテンツ領域、③調査分析領域、④共通領域の 4 領域で構成される。

また、講義の中で業界第一線の知識・技術に触れ、外部講師による専門的な経験談を取り入れ、学生のスキル向上を図るとともに、学士力の向上に努める。

第5節 建築デザイン学科

日本の建築における課題は、豪雨、台風、地震や津波などの自然災害が多く、安全で優れた建物をつくる技術の向上がますます求められている。また同時に、エネルギーを浪費せず、環境に負荷をかけず、生活に快適さをもたらす建物の室内環境調整の技術やインテリアデザインも大切であり、合わせて、建物に美しさも期待されることも求められている。さらには、高齢社会をむかえ、誰もがスムーズに使える住宅や公共施設のユニバーサルデザインも要求されている。

従って、建築デザイン学科は建築・インテリアデザインの専門家として、このような多くの課題をかかえる社会に貢献する知識や技術をもった、人間性豊かな人材の育成を、教育のねらいとして位置付けている。

人間生活学部には属するメリットを生かして、人と生活と環境を大切に、建築の3大要素である「強・用・美」をそなえる、建築・インテリアデザインの実現をめざし、課題を解決できる創造力を持った人材を育成している。

教育は、講義とともに、製図、CAD、模型製作、建築材料実験などの実習・演習を展開し、カリキュラムツリーにしたがって系統的におこなわれている。また授業以外に宅建士と二級建築士の受験講座の開催や、ドローン、コンペ、リノベーション、3Dプリンターなどのチャレンジクラブをつくって学生諸君の学研活動をうながしている。

建築デザイン学科では、次のようなスタンダード（学習到達水準）を設けて教育にあたっている。

1. 専門分野の基本的な知識と考え方を身につける。
2. 自己の考えを的確に表現し、円滑なコミュニケーションができる。
3. 都市や地域の歴史・環境・計画についての基礎知識を持たせる。
4. 建物の室内環境調整についての基礎理論を習得させる。
5. 木造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造の建物の施工や材料について基礎知識を持たせる。
6. コンピュータについて、建築系の実務に必要な基礎知識と自由に操作することができる能力を持たせる。
7. 建築士に必要な実務的知識と設計製図能力を習得させる。
8. 戸建住宅および小規模建物の基本的な建築計画・設計・施工管理ができる能力を持たせる。
9. 中学・高校の家庭科教員に必要な住生活に関する知識の基礎的事項を習得させる。

第6節 心理学科

心理学は人間の心の機能(知・情・意)とその表れである行動についての学問であり、人間行動のあらゆる領域をその対象としている。基礎的な生理的反応や知覚の領域から、カウンセリングや心理療法といった対人支援の領域、また、生産性の向上や組織運営のあり方といった産業領域での活用、地域社会や環境との関わりまで含めたコミュニティ心理学など、非常に幅広い学問である。

ヒトは社会的動物であり、人との関わりの中で人間として成長し、人が作る社会の中で生きていく。心理学は人としての基礎教養であり、また、それぞれの職能領域で「こころの専門家」としての活躍が期待されている学問でもある。心理学科においては、「心理学概論」「知覚・認知心理学」「学習・言語心理学」「神経・生理心理学」等の基礎的領域から「健康・医療心理学」「産業・組織心理学」「司法・犯罪心理学」「心理学的支援法」等の応用領域へと、幅広い領域の心理学を段階的に学べるようにカリキュラムが編成されている。また、「心理学実験」や「心理検査実習」「心理療法演習」などの体験・参加型授業によって、知識のみでなく、心理学的技能の習得を図っている。

心理学科は、卒業後の就職および進学に関連して資格取得という点から、3つの特徴ある目標指向プロセス(Goal oriented process)をもっている。これはコース編成というよりもキャリア選択に向けての具体的な指針であるので、余裕のある学生は(1)～(3)の複数の目標をもって大学生活を送ることができる。

(1) 一般企業、公務員、等 (心理標準プロセス)

人間関係が希薄になっている現代社会において、心理学を専門として学んできたこと自体が一般企業や公務員として好印象を持たれることは間違いないが、一般企業の会社員や一般公務員として社会の中で種々の役割を担うにあたって、心理学全般の基礎的知識・能力を認定するものとして、「認定心理士」と「心理学検定」がある。所定の科目を履修することで「認定心理士」の資格取得が可能である。また、在学中に「心理学検定」の受験が推奨されており、検定資格の取得を目指すことができる。このプロセスを選択して大学を卒業し、心理・福祉関連職種(児童、障害者、高齢者など種々の福祉施設)に就職・実務を経験しながら下記心理専門職を目指すことも現段階では可能である。

(2) 養護教諭一種免許取得 (心理養護教諭プロセス)

養護教諭は児童・生徒の心身の健康を担う教諭であるが、心理学科では特に「こころ」の健康に貢献できる養護教諭の養成を目指している。教育現場では、不登校やいじめなど心の問題を抱えた児童・生徒への支援が保健室の大きな役割になっており、身体的な知識に加え、心理学の専門性が必要とされている。

(3) 大学院進学と資格取得 (心理専門職プロセス)

心の専門家に関する国家資格への社会的な要請は強く、公認心理師法が成立した。本学科では、スタッフならびに実習先確保等万全の態勢で養成を始めており、大学院修士修了が国家試験・受験資格の要件なので、学部・大学院が揃っている徳島文理大学は国家資格を目指すには非常に良い環境だと言えよう。今後、医療や種々の心理相談機関において心理専門職として認められるためには、公認心理師あるいは臨床心理士の資格取得が望ましい。臨床心理士については、指定大学院卒業が受験資格とされており、本学大学院は臨床心理士養成第1種指定校であり、学部において優秀な成績を修めた者に対しては大学院進学における特別選抜制度の適用がある。

第3章 卒業生満足度評価の調査

第1節 大学全体

2018年度 卒業生満足度評価アンケート集計結果（徳島文理大学全体）

徳島文理大学

対象者数	985
回答者数	648
回答率	65.8%

I. 記入者について

性別	男性	女性	無効
	239 36.9%	409 63.1%	0 0.0%

現所属学科 の在籍年数	1,2年	3,4年	5,6年	7,8年	9年以上	無効
	58 9.0%	477 73.6%	105 16.2%	7 1.1%	1 0.2%	0 0.0%

卒業後の 進路	就職	進学	未定	無効
	566 87.3%	36 5.6%	46 7.1%	0 0.0%

あなたの成績につ いて一番多かったのは	優	良	可	無効
	282 43.5%	288 44.4%	78 12.0%	0 0.0%

II. 授業・教育課程について（全体として）

No.	設問文	平均点	上段：回答数 / 下段：回答率 (%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	授業科目は充実していましたか	4.13	249	281	80	29	9	648	0
			38.4%	43.4%	12.3%	4.5%	1.4%		
2	授業や実習内容はわかりやすかったですか	4.00	179	359	88	32	10	648	0
			27.6%	52.3%	13.6%	4.9%	1.5%		
3	専門的な知識や技能（免許・資格を含む）を 修得できましたか	4.23	299	259	50	20	20	648	0
			46.1%	40.0%	7.7%	3.1%	3.1%		
4	教育に対する熱意は感じられましたか	4.23	274	284	65	16	9	648	0
			42.3%	43.8%	10.0%	2.5%	1.4%		
5	授業以外の指導（学外実習、見学、補習など）は 充実していましたか	4.01	238	242	118	35	15	648	0
			36.7%	37.3%	18.2%	5.4%	2.3%		
6	課題（宿題やレポートなど）の量は適切でしたか	3.85	202	247	122	56	21	648	0
			31.2%	38.1%	18.8%	8.6%	3.2%		

III. 大学の施設および支援体制について

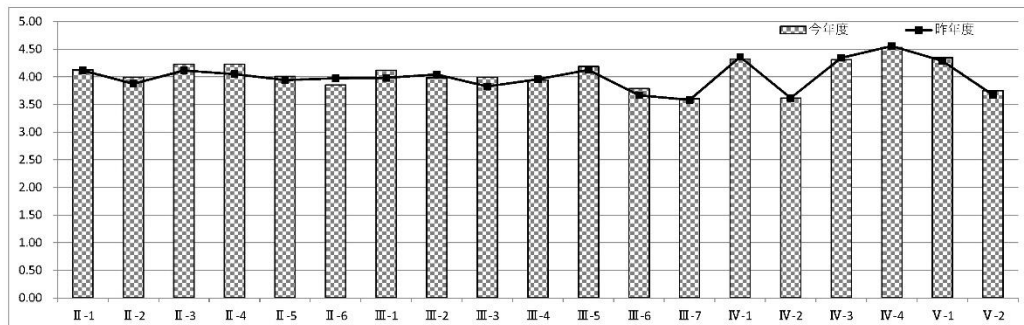
No.	設問文	平均点	上段：回答数 / 下段：回答率 (%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	履修登録の支援は役に立ちましたか	4.12	289	216	95	29	19	648	0
			44.6%	33.3%	14.7%	4.5%	2.9%		
2	就職や進路についての相談・支援は役に立ちましたか	3.98	278	187	112	37	34	648	0
			42.9%	28.9%	17.3%	5.7%	5.2%		
3	図書館は利用しやすかったですか	4.00	271	202	102	47	26	648	0
			41.8%	31.2%	15.7%	7.3%	4.0%		
4	ポータルサイトや学内のPCは利用しやすかったですか	3.94	235	231	116	42	24	648	0
			36.3%	35.6%	17.9%	6.5%	3.7%		
5	授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか	4.19	291	243	70	32	12	648	0
			44.9%	37.5%	10.8%	4.9%	1.9%		
6	食堂や売店・コンビニに満足していましたか	3.79	245	201	79	65	58	648	0
			37.8%	31.0%	12.2%	10.0%	9.0%		
7	生活や健康に関する悩みがあった場合、相談できる 体制は整っていましたか	3.60	170	188	196	52	42	648	0
			26.2%	29.0%	30.2%	8.0%	6.5%		

IV. キャンパスライフについて

No.	設問文	平均点	上段：回答数 / 下段：回答率 (%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	キャンパスは清潔でしたか	4.32	338	227	51	18	14	648	0
			52.2%	35.0%	7.9%	2.8%	2.2%		
2	クラブやサークル活動は参加しやすかったですか	3.62	181	183	192	39	53	648	0
			27.9%	28.2%	29.6%	6.0%	8.2%		
3	頼りになる教員に出会えましたか	4.31	361	168	58	21	20	648	0
			55.7%	29.0%	9.0%	3.2%	3.1%		
4	よき友と出会えましたか	4.53	458	121	40	14	15	648	0
			70.7%	18.7%	6.2%	2.2%	2.3%		

V. 総合評価

No.	設問文	平均点	上段：回答数 / 下段：回答率 (%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	総合的にみて、本学での学生生活はよかったですか	4.35	349	214	56	19	10	648	0
			53.9%	33.0%	8.6%	2.9%	1.5%		
2	知り合いの高校生に本学への進学を勧めたいと 思いますか	3.75	212	202	144	41	49	648	0
			32.7%	31.2%	22.2%	6.3%	7.6%		



第2節 人間生活学部

2018年度 卒業生満足度評価アンケート集計結果（人間生活学部）

徳島文理大学

対象者数	283
回答者数	240
回答率	84.8%

I. 記入者について

性別	男性	女性	無効
	79	161	0
	32.9%	67.1%	0.0%

現所属学科の在籍年数	1,2年	3,4年	5,6年	7,8年	9年以上	無効
	7	231	2	0	0	0
	2.9%	96.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%

卒業後の進路	就職	進学	未定	無効
	206	13	21	0
	85.8%	5.4%	8.8%	0.0%

あなたの成績について一番多かったのは	優	良	可	無効
	105	111	24	0
	43.8%	46.3%	10.0%	0.0%

II. 授業・教育課程について（全体として）

No.	設問文	平均点	上段：回答数／下段：回答率（%）					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	授業科目は充実していましたか	4.20	111 46.3%	85 35.4%	29 12.1%	12 5.0%	3 1.3%	240	0
2	授業や実習内容はわかりやすかったですか	4.13	86 35.8%	117 48.8%	25 10.4%	7 2.9%	5 2.1%	240	0
3	専門的な知識や技能（免許・資格を含む）を修得できましたか	4.32	125 52.1%	84 35.0%	19 7.9%	7 2.9%	5 2.1%	240	0
4	教育に対する熱意は感じられましたか	4.31	119 49.6%	91 37.9%	20 8.3%	5 2.1%	5 2.1%	240	0
5	授業以外の指導（学外実習、見学、補習など）は充実していましたか	4.07	104 43.3%	70 29.2%	45 20.0%	14 5.8%	4 1.7%	240	0
6	課題（宿題やレポートなど）の量は適切でしたか	3.96	85 35.4%	86 35.8%	46 20.0%	17 7.1%	4 1.7%	240	0

III. 大学の施設および支援体制について

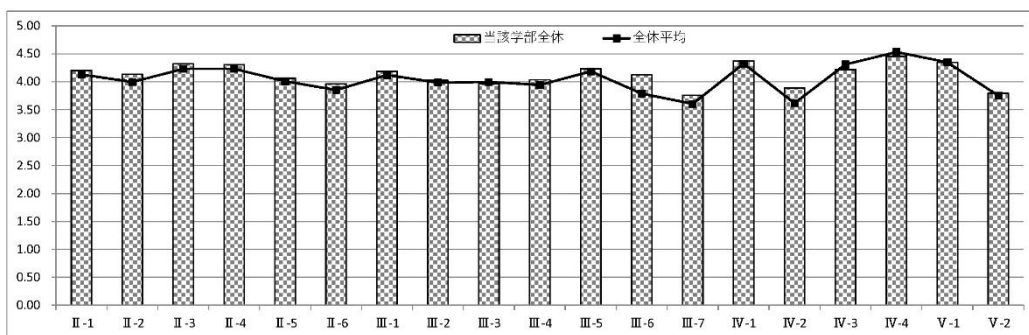
No.	設問文	平均点	上段：回答数／下段：回答率（%）					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	履修登録の支援は役に立ちましたか	4.19	118 49.2%	71 29.6%	34 14.2%	12 5.0%	5 2.1%	240	0
2	就職や進路についての相談・支援は役に立ちましたか	4.03	108 45.0%	64 26.7%	44 18.3%	14 5.8%	10 4.2%	240	0
3	図書館は利用しやすかったですか	3.97	97 40.4%	73 30.4%	42 17.5%	21 8.8%	7 2.9%	240	0
4	ポータルサイトや学内のPCは利用しやすかったですか	4.04	98 40.8%	82 34.2%	37 15.4%	17 7.1%	5 2.5%	240	0
5	授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか	4.23	109 45.4%	93 38.8%	25 10.4%	11 4.6%	2 0.8%	240	0
6	食堂や売店・コンビニに満足していましたか	4.13	117 48.8%	74 30.8%	22 9.2%	16 6.7%	11 4.6%	240	0
7	生活や健康に関する悩みがあった場合、相談できる体制は整っていましたか	3.76	75 31.3%	72 30.0%	66 27.5%	14 5.8%	13 5.4%	240	0

IV. キャンパスライフについて

No.	設問文	平均点	上段：回答数／下段：回答率（%）					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	キャンパスは清潔でしたか	4.38	137 57.1%	73 30.4%	18 7.5%	7 2.9%	5 2.1%	240	0
2	クラブやサークル活動に参加しやすかったですか	3.89	83 34.6%	79 32.9%	56 23.3%	12 5.0%	10 4.2%	240	0
3	頼りになる教員に出会えましたか	4.22	132 55.0%	61 25.4%	26 10.8%	10 4.2%	11 4.6%	240	0
4	よき友と出会えましたか	4.46	159 66.3%	51 21.3%	16 6.7%	9 3.8%	5 2.1%	240	0

V. 総合評価

No.	設問文	平均点	上段：回答数／下段：回答率（%）					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1	総合的にみて、本学での学生生活はよかったですか	4.35	135 56.3%	72 30.0%	18 7.5%	11 4.6%	4 1.7%	240	0
2	知り合いの高校生に本学への進学を勧めたいと思いますか	3.80	87 36.3%	67 27.9%	53 22.1%	16 6.7%	17 7.1%	240	0



第3節 卒業生満足度評価アンケートの結果に対する総評

人間生活学部分については、全体的に4点付近の評価を受けている。授業の充実度やわかりやすさ、専門知識や教員の熱意などについてはおおむね良い評価である。一方で、課題（宿題やレポート）の量については、今後アクティブ・ラーニング等の新しい形式で実施される授業の増加や、予習復習の推進に伴い、さらに変化が生じるのではないかと考えられる。

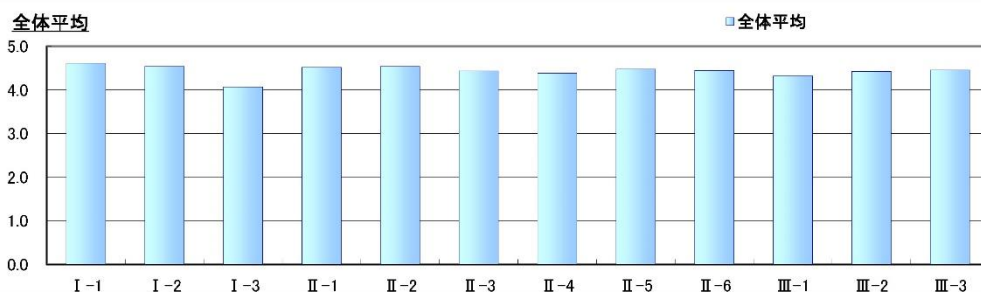
第4章 学生の授業評価アンケート

第1節 大学全体

2018年度後期 授業に対する学生の評価アンケート集計結果(全体) 徳島文理大学

受講者数	36,096
回答者数	30,536

I. あなたの授業の取り組みについて									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	あなたはこの授業にまじめに出席しましたか	4.62	21,364 70.1%	7,052 23.1%	1,628 5.3%	310 1.0%	118 0.4%	30,472	64
2	あなたはこの授業を理解しようと努めましたか	4.54	18,944 62.2%	9,397 30.8%	1,843 6.0%	192 0.6%	93 0.3%	30,469	67
3	あなたはこの授業に関して、時間外学習を行いましたか	4.07	13,752 45.2%	9,018 29.6%	5,027 16.5%	1,426 4.7%	1,209 4.0%	30,432	104
II. 授業内容及び方法について									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	授業内容は、シラバスにそっていたと思いますか	4.52	19,201 63.1%	8,342 27.4%	2,507 8.2%	204 0.7%	168 0.6%	30,422	114
2	授業に対する教員の熱意は感じられましたか	4.54	19,838 65.1%	8,130 26.7%	1,966 6.5%	293 1.0%	235 0.8%	30,462	74
3	教員の説明は聞き取りやすかったですか	4.44	18,366 60.3%	8,463 27.8%	2,582 8.5%	645 2.1%	400 1.3%	30,456	80
4	教員の説明はわかりやすかったですか	4.39	17,566 57.7%	8,755 28.8%	2,921 9.6%	736 2.4%	461 1.5%	30,439	97
5	教科書や教材(プリントなど)は適切でしたか	4.47	18,567 61.6%	8,371 27.8%	2,491 8.3%	397 1.3%	322 1.1%	30,148	388
6	板書や視聴覚教材などは効果的に利用されていましたか	4.45	18,345 60.9%	8,233 27.3%	2,715 9.0%	466 1.5%	366 1.2%	30,125	411
III. 授業全体について									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	この授業の内容は理解できましたか	4.33	15,403 50.7%	10,863 35.7%	3,116 10.3%	648 2.1%	360 1.2%	30,390	146
2	この授業は知識・技術の習得につながりましたか	4.43	17,450 57.4%	9,481 31.2%	2,687 8.8%	459 1.5%	310 1.0%	30,387	149
3	総合的に見て、この授業はよかったですか	4.46	18,291 60.2%	8,731 28.8%	2,574 8.5%	408 1.3%	357 1.2%	30,361	175
IV. 各学部用									
No.	設問文	当集計平均点	回答率(%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1			46.3%	33.7%	17.3%	0.4%	2.4%	255	30,281
2			42.4%	36.0%	19.7%	0.0%	2.0%	203	30,333
3			42.3%	36.1%	19.6%	0.0%	2.1%	194	30,342

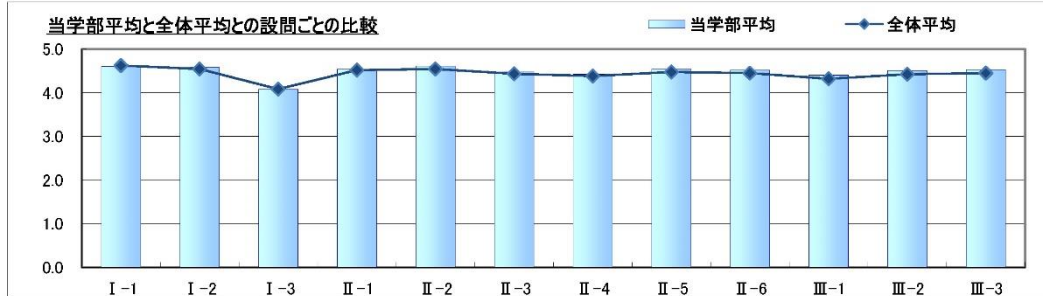


第2節 人間生活学部

2018年度後期 授業に対する学生の評価アンケート集計結果(学部別) 徳島文理大学

学部名	人間生活学部	受講者数	8,527
		回答者数	7,250

I. あなたの授業の取り組みについて									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	あなたはこの授業にまじめに出席しましたか	4.61	5,028 69.5%	1,706 23.6%	368 5.1%	107 1.5%	23 0.3%	7,232	18
2	あなたはこの授業を理解しようと努めましたか	4.58	4,730 65.4%	2,070 28.6%	372 5.1%	51 0.7%	13 0.2%	7,236	14
3	あなたはこの授業に関して、時間外学習を行いましたか	4.08	3,439 47.6%	1,914 26.5%	1,216 16.8%	341 4.7%	318 4.4%	7,228	22
II. 授業内容及び方法について									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	授業内容は、シラバスにそっていたと思いますか	4.54	4,709 65.1%	1,841 25.5%	594 8.2%	63 0.9%	25 0.3%	7,232	18
2	授業に対する教員の熱意は感じられましたか	4.61	5,068 70.1%	1,691 23.4%	364 5.0%	59 0.8%	50 0.7%	7,232	18
3	教員の説明は聞き取りやすかったですか	4.48	4,604 63.7%	1,835 25.4%	525 7.3%	177 2.4%	90 1.2%	7,231	19
4	教員の説明はわかりやすかったですか	4.42	4,412 61.0%	1,887 26.1%	612 8.5%	213 2.9%	104 1.4%	7,228	22
5	教科書や教材(プリントなど)は適切でしたか	4.54	4,790 66.2%	1,789 24.7%	506 7.0%	79 1.1%	67 0.9%	7,231	19
6	板書や視聴覚教材などは効果的に利用されていましたか	4.52	4,740 65.6%	1,757 24.3%	545 7.5%	107 1.5%	77 1.1%	7,226	24
III. 授業全体について									
No.	設問文	当集計平均点	上段:回答数/下段:回答率(%)					有効回答	無効回答
			そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない		
1	この授業の内容は理解できましたか	4.41	4,039 56.0%	2,375 32.9%	586 8.1%	142 2.0%	71 1.0%	7,213	37
2	この授業は知識・技術の習得につながりましたか	4.51	4,536 62.8%	2,032 28.1%	497 6.9%	100 1.4%	54 0.7%	7,219	31
3	総合的に見て、この授業はよかったですか	4.53	4,715 65.3%	1,850 25.6%	479 6.6%	108 1.5%	64 0.9%	7,216	34
IV. 各学部用									
No.	設問文	当集計平均点	回答率(%)					有効回答	無効回答
			5	4	3	2	1		
1			50.9%	34.0%	15.1%	0.0%	0.0%	53	7,197
2			41.9%	39.5%	18.6%	0.0%	0.0%	43	7,207
3			40.0%	42.5%	17.5%	0.0%	0.0%	40	7,210



第3節 平成30年度後期授業評価アンケートの結果に対する総評

人間生活学部分について、全体的にはいずれの設問についても4点台の評価となっており、概ね高いといえる。しかしながら、時間外学習については他の設問より低めの評価となっていることから、学生が意欲的に予習復習を行うよう、授業を実施する上での工夫がさらに必要であると考えられる。

第5章 研究授業報告

第1節 スケジュール

番号	授業日	曜日	講時	学科	科目	受講 学生数	教授法	シラバス 科目番号	授業者	教室	参観 教員数	授業者	協力者
1	7月12日	木	2	心理	青年心理学 -私にとっての被服とは-	60	アクティブ ラーニング	85075	小畑 千晴	9703	1	1	0
2	10月18日	木	1・2	人間生活	食品学実験	21	実験	13653	藤田 義彦	1501	2	1	1
3	10月24日	水	1	心理	心理療法演習 I	33	演習	13590	藤崎 ちえ子	実験室2 (9F)	3	1	1
4	10月24日	水	2	児童	生活	31	講義・演習 ・アクティブ ラーニング	14282	西原 正純	9701	3	1	0
5	12月19日	水	2	メディア デザイン	社会調査研究 I	13	講義・演習	12712	古本 奈奈代	25号館マルチ メディア室	2	1	0
6	1月11日	金	3	食物栄養	公衆栄養学 II	53	講義	14123	中川 利津代	9303	7	1	1
7	1月11日	金	3	食物栄養	臨床栄養管理論	54	講義	14172	森川 咲子	9303	8	1	0

第2節 研究授業報告書

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活学部	学 科	心理学科
授 業 者	小畑 千晴	科 目 名 (シラバス番号)	青年心理学 (85075)
授業協力者		実施教室	9703
実施日時	平成30年7月12日木曜日 2 講時		
対象学生	心理学科2年生	受講学生数： 約60名	
教授法	アクティブラーニング		
授業テーマ 青年心理学			
<p>研究授業内容自己評価</p> <p>青年期における親密な相手との繋がり方について考えさせる内容である。親密関係にある二人の間で生じる可能性があるデートDVについて、最新調査結果や原因に関する考え方、最近の傾向である女の子から男の子への暴力、LGBT 同士の暴力などについても触れた。自分だけでなく、周りがこの問題に悩んだときの対処法を示すために、徳島県が作成したパンフレットを配布し、相談機関を案内も行った。</p>			
<p>研究授業参観者の意見・感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返りが効果的・導入として良い。 ・説明が丁寧で理解しやすい。 ・事例に出てきたAさんの結末が説明不足であった。 ・LGBT など今日的課題について触れていたことが評価できる。 ・自分の研究分野でもあることにも触れていたことも良い。学生に学問することの大切さを 気づかせる意義がある。 			
授業参観教員数	1名		

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活	学 科	人間生活
授 業 者	藤田義彦	科 目 名 (シラバス番号)	食品学実験 (13653)
授業協力者	小川裕子	実施教室	1501
実施日時	平成30年10月18日 木曜日 1・2 講時		
対象学生	人間生活学科2・4年	受講学生数： 20名	
教授法	実験		
授業テーマ アミノ酸の定性試験			
研究授業内容自己評価 1. アミノ酸の性状、蛋白質の構成成分であること、蛋白質のアミノ酸の構成はDNAにより、決定されていることを理解してもらえよう分かりやすく説明することを心掛けた。 2. いろいろなアミノ酸の構造式の違いにより、ニンヒドリン検出試薬に対する呈色度合い、色合いを体験してもらい、アミノ酸の性状を理解してもらえようように努めた。 3. ニンヒドリン検出試薬は、紙に付着した指紋の検出に使用されるということを体験してもらい、授業の内容が実社会に役立っていることを体感してもらい、この知識、技術の応用力を付けるようにした。 以上の事柄について、ある程度の成果が得られた。			
研究授業参観者の意見・感想 1. 学生の興味、関心を引き出すように、独自の指紋検出の実験が良かった。 2. 試薬調整や器具の準備が良くできていて、手際よく実験が出来ている。 3. 興味、関心を引き出し全員に目的意識が持てるように、生活に即して解説しているのが良かった。 4. おしゃべりをして、実験の諸注意を聞いていない学生がいる。			
授業参観教員数	2名		

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活	学 科	心理
授 業 者	藤崎ちえ子	科 目 名 (シラバス番号)	心理療法演習 I (13590)
授業協力者	栗田麗 (TA)	実施教室	実験室 2 (9号館 9階)
実施日時	平成 30 年 10 月 24 日水曜日 1 講時		
対象学生	心理学科 2 年生	受講学生数：26 名	
教授法	演習		
<p>授業テーマ</p> <p>箱庭療法とコラージュ療法を実際に行い、セラピストになったつもりで感想をいえるようになる。</p>			
<p>研究授業内容自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参観者も一緒に感想のシェアリングに入ってもらい、感想を述べてもらったことで、学生の気持ちを感じてもらった。 ・いつもと異なる教員が入ったことで、学生も楽しめていた様子。 			
<p>研究授業参観者の意見・感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が楽しそうに実習しているのが印象的だった。 ・学生の様々な作品の奥深さに感銘を受けた。 ・教室が狭いのが残念、もう少し広ければもっとのびのびと作品作りを楽しめるのではないかと思う。 			
授業参観教員数	3 名		

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活	学 科	児童
授 業 者	西原正純	科 目 名 (シラバス番号)	生活 (14282)
授業協力者		実施教室	9701
実施日時	平成 30 年 10 月 24 日水曜日 2 講時		
対象学生	1 年		受講学生数： 31 名
教授法	講義・演習・A L		
授業テーマ 生活科新設の理由と誕生までの経緯			
<p>研究授業内容自己評価</p> <p>「問い」をもとにした授業をすることを大切にしている。自ら出した問いについて自分なりの答えを出していく過程が主体的で対話的な学びにつながっていけばと考え授業をおこなった。問いに対して各班でまとめる時間が不十分だったため、中身が乏しい答えが多かった。これからの授業の中でフォローをしていく必要がある。次の授業へのつながりとして、教科目標や学年目標に対する新たな「問い」を考えさせた。次回の授業では答えに対する吟味を班と班でしていけるように配慮したい。生活科の教科特性である気付きの質を高める手立てとして9つの内容に関する課題を出している。継続していくこと教材開発につながるようにしていきたい。</p>			
<p>研究授業参観者の意見・感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に今日の学習のメニューが提示され、学生は見通しを持って学習できていた。また、何をやるのかの手順が明確に指導されており、それぞれが活動目標を理解して取り組むことができていた。 ・パソコンや電子黒板、さらには学生のスマートフォンが有効に活用されていた。 ・生活科に関する活動を実際に学生にさせており、学生はより深く学習できていたようであった。 ・アクティブラーニングを随所に取り入れ、グループで考えさせるとともに発表させていた。学生は、落ち着いた雰囲気の中で熱心に話し合っており印象深かった。ただ、話し方や声の大きさといった学生の発表の仕方については、まだ指導の余地があると感じた。 ・最後に次週の学習内容の予告があり、予習がやりやすいよう工夫されていた。 			
授業参観教員数	3 名		

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活学部	学 科	メディアデザイン学科
授 業 者	古本奈奈代	科 目 名 (シラバス番号)	社会調査研究 I (12712)
授業協力者		実施教室	マルチメディア室
実施日時	平成 30 年 12 月 19 日 水曜日 2 講時		
対象学生	メディアデザイン学科 3 年生	受講学生数： 13 名	
授 法	講義と演習		
<p>授業テーマ 多変量解析によるニーズ分析の応用-新商品開発企画発表-</p>			
<p>研究授業内容自己評価</p> <p>本科目は、社会調査士資格取得のための必修科目であり、多変量回帰をはじめとする調査分析能力を習得することを目的としている。本講義の内容は、学生が仮想起業家として顧客に見立てた学生にアンケートを実施、ニーズ分析を行うことによって開発した新商品について企画プレゼンテーションを実施し、相互評価を行った。</p> <p>学生が自発的に関わることで資格取得において必須内容である多変量解析への理解を深めることを目的としている。</p> <p>商品開発を通じて、統計学知識に裏付けられたニーズ分析の重要性を確認することができ、一定の成果が得られたと考える。</p>			
<p>研究授業参観者の意見・感想</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 統計学の知識習得は文系の学生にとってハードルが高いが、「商品開発」という興味のある内容だったため、学生が積極的に取り組んでいた。 2. 2名までのグループによる仮想起業であったが、1名限定にした方がより勉強になる。 3. プレゼンテーションの準備（スライドのデザイン等）が不十分な発表があった。 4. プレゼンテーションの環境（プロジェクターなど）が悪かったため、次回からは改善するべきである。 			
授業参観教員数	2 名		

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活学部	学 科	食物栄養学科
授 業 者	中川 利津代	科 目 名 (シラバス番号)	公衆栄養学Ⅱ (14123)
授業協力者	石堂一巳	実施教室	9303
実施日時	平成31年1月11日金曜日3講時		
対象学生	人間生活学部・食物栄養学科2年	受講学生数： 47名	
教授法	講義		
授業テーマ 食事摂取状況に関する調査法のまとめ			
<p>研究授業内容自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業において、授業の目的を説明した後、課題を出していた。その課題の様式に沿って授業を進めたため、学生は授業内容を理解しやすかったと考えられる。さらに前回の授業の続きの所から教科書を学生に読ませ、重要ポイントを説明し、自分で作成した課題と食事摂取状況に関する調査法のまとめ（厚生労働省のスライドから抜粋）とを突き合わせながら整理したため、より深く学習できたのではと考えられる。 ・管理栄養士国家試験を学生に解かせることは、教科書で漠然とした知識が国家試験問題を解くことにより明確になり、国家試験の対策になっていると考えられる（授業終わりに学生が提出する復習プリントから国家試験の対策になっていることが十分に分かる）。 ・授業終わりに学生が提出する復習プリントにおいて、今日何を習ったのかのまとめ、同時に質問や授業の改善点、感想を記入するようになっている。このことにより学生から見た改善点も含め授業をどのように感じているかを知ることができ、授業の改善につながっていると考えられる。 ・学生が、授業終了後、わかりやすかったと言ってきた。 			
<p>研究授業参観者の意見・感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話すスピードが良かった。丁寧に説明していた。学生への対応が良かった。手間をかけていた。 ・管理栄養士国家試験を解いた後、どの答えが正解か手をあげさせると正解率がわかる。 (昨年は色紙を使っていたが、今年は学生が慣れていないので使っていない。) ・課題の追加説明は、白板に書く方が良い。(学生は白板に書いたことだけしか書かないので効果的でないとの意見も出た。) ・管理栄養士国家試験問題は、「5問でなく3問ぐらいが良い。」「訂正させる形にする 			

のが良い。」「問題数が多くてもどの言葉が重要な把握できるので良い。」等の意見が出た。
 ・時間、授業をまとめられる学生の状況、学生の変化等アンケートに関する感想が多かった。

授業参観教員数	7 名
---------	-----

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部	人間生活学部	学 科	食物栄養学科
授 業 者	森川咲子	科 目 名 (シラバス番号)	臨床栄養管理論 (14172)
授業協力者		実施教室	9303 号室
実施日時	平成31年 1月 11日 金曜日 3 講時		
対象学生	食物栄養学科3年生	受講学生数： 54名	
教授法	講義		
授業テーマ 高齢期の栄養管理(老年症候群、摂食嚥下障害、栄養スクリーニング他)			
研究授業内容自己評価			
<p>1)国家試験対策及び臨地・校外実習の事前学習として必要な項目を扱うことが出来た。 本科目は3年生後期で履修する科目であることから、上記の点を意識し、国家試験問題の演習や、症例に基づく栄養評価・食形態の評価を講義に盛り込んだ。同時に、臨地・校外実習等で科目横断的な考察ができるよう、関連科目で履修した内容を付け加えて説明した。</p> <p>2) 学生の理解度を評価・改善するための取り組みが不足しており、改善したい。 時間外学習時間の確保のため、毎回予習課題を出して授業冒頭で関連項目につき演習しているが、個々の学生の得点状況を把握できず、最終的な評価が期末試験となってしまう。従って来年度は授業毎小テストを実施したいと考えている。また、終始説明に徹した項目もあり、学生の理解状況を確認できなかった。発問を増やし、双方向的な講義が出来るよう更なる工夫をしたい。</p>			

研究授業参観者の意見・感想

(評価)

- ・授業資料内に国家試験問題があることで、学生が自己学習の目標を設定しやすいと感じた。
- ・社会的背景や今後の管理栄養士の役割、教員の現場経験を交えたことにより、学生の職業観を養う要素もあり良いと感じた。
- ・一度使用したテキスト*であっても、実習内容の復習や配布資料を用いて科目横断的な講義をすることにより、多角的な視点が養える内容であった。(*テキストは臨床栄養学Ⅰ・Ⅱで使用済)
- ・板書の字の大きさは適切であった。資料には出典が示されており、教材も有効活用されていた。

(改善案)

- ・試験で扱う項目については、もう少し強調すると良い。また、講義内容は国家試験問題を超える実践応用的内容もあり、期末試験で扱うなど学生のスキルを習熟させる工夫も必要だろう。
- ・講義で扱う内容が多いので、振り返りの時間を授業内で設定するとよい。
- ・時間内で説明されない資料があったので、一言でも言及されるとよかった。

授業参観教員数	8名
---------	----

第6章 教員活動状況の調査

第1節 人間生活学科

個人情報

1. 氏名：岡部 千鶴
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 家庭経営学、家族関係学、消費者行動論、生活文化論
2. 学部授業担当科目
前期：家庭経営学（家庭経済学を含む）、生活文化学、文理学、
専門ゼミナールⅠ、家族社会学（理学療法学科）
後期：家族関係学、生活関連法、消費生活論、家庭支援論、専門ゼミナールⅡ、
卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（2）名、大学院生：修士（0）名
4. 自己評価：
 - ①着任2年目。前年に参加した「ティーチングポートフォリオ作成ワークショップ（SPOD加盟校教員対象）」の内容を反映した教育を実践することができたと感じている。来年度も引き続き、教育の責任、理念、方法、成果、課題、改善、目標を整理し、教育に携わる専門職としての責任を自覚しつつ、日々の教育活動に従事したい。
 - ②卒業研究として2名の学生に卒業論文指導を行った。2名とも、問題意識は明確であり、熱意も強かったが、「論文」作成に関する基礎的な知識に欠けたため、初歩的な指導に多くの時間を傾注することとなった。その結果、内容的な指導はまだまだ不十分ではあったと反省している。ただし、両学生とも論文を書き上げることによって強い達成感を得ており、学生の主体的な学びの姿勢形成に貢献できたことは私にとっても大きな励みとなった。また、内1名が学科の最優秀論文に選ばれたことは望外の喜びでもあった。
 - ③毎回、授業終了時にフィードバックシートを記入させ、次回講義時に解説と共に返却し、双方向的な授業となるよう心がけた。質問、時間外学習などの記入項目を設けることにより、事前・事後学習の重要性を気づかせることができたのではないかと思っている。フィードバックシートには誤字脱字が多く、何を言いたいかわからない文章も多くみられ、毎回、チェックし添削して返却するのはかなりの負担であるが、新年度も継続したい。
 - ④今年度は、レポートの書き方に関する指導に時間を割いた。昨年度に多く見られた「教科書の丸写しまたは教科書を要約しただけ」、「ウィキペディアの丸引用」、「参考文献や資料がない」などの問題はほぼ解消された。新年度も引き続きレポート作成についての指導を行い、主体的に学ぶ姿勢が求められていることを学生に自覚させたい。

研究領域

1. 様々な困難を抱えた家族への支援策
2. 家庭における道徳的規範の世代間継承
3. 家族を超えた関係の形成によるケアの社会化

平成 30 年度分 研究業績一覧

1. 論文・著書

『現代家族を読み解く 12 章』日本家政学会編 丸善出版 (分担執筆)

2. 学会発表

なし

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

なし

自己評価：

- ①家族をめぐる状況が大きく変化している中、家族の多様性、家族を補完する新たな関係性の広がりに関する研究が求められている。家族の現状と生活の実態を客観的に把握し家族の問題を社会的な広がりで見えさせる必要があると思われる。課題を抱えた人自らがそれを乗り越えていくためにはどのような支援が必要かについて研究を深めたいと考えている。
- ②日本家政学会による『現代家族を読み解く 12 章』発行に貢献できた。
- ③生活支援専門職として日本家政学会が認定している新資格「家庭生活アドバイザー」研修に参加し、認定試験を経て、同資格を学会から授与された。今後は、本資格の認知度を高め、資格としての実効性を高めるよう学会と協力していきたいと考えている。また、本学科において、同資格の導入が可能かについて考えたい。
- ④日本防災士機構による「防災士」資格を取得した。今後は、防災や地域社会との連携という観点を持ち、「生活の質向上と人類の福祉に貢献」という家政学の理念に基づいた研究を行いたい。

大学内運営

活動報告

学科長、1 年生担任、自己点検・評価実施委員会、宿泊セミナー運営委員会、教務委員会、入学試験委員会、教員養成対策委員会、1～3 年生チューター

社会貢献

1. 学会等への貢献

日本家政学会
日本家政学会家族関係学部会
日本家政学会生活経営学部会
日本消費者教育学会

2. 教育機関への貢献

八女筑後看護専門学校看護科非常勤講師 担当科目「文化と生活」

3. 審議会等委員

- ① 徳島県政府調達苦情検討委員会委員
- ② 久留米市伝統的町並み保存審議会委員

個人情報

1. 氏名：藤田 義彦
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：医学系、薬学系、衛生学、食品学、公衆衛生学
2. 学部授業担当科目
前期：公衆衛生学（予防医学を含む）、食品の安全性、食品衛生学、食品学実験、専門ゼミナールⅠ、衛生学特論（専攻科）、生活文化特論Ⅰ（大学院）
後期：衛生学、公衆衛生学実習、食品学各論実験、食品衛生学実験、食品学実験、専門ゼミナールⅡ、公衆衛生学特論（社会福祉を含む）（専攻科）、生活文化特論Ⅱ（大学院）
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文 8名
4. 自己評価：授業内容をプリントにまとめて、分かりやすい授業の説明に心掛けた。予習で学んだことをグループで共有し、学生に発表してもらい自発的学習のモチベーションを高めた。

研究領域

1. 専門研究領域：医学・薬学・分子生物学・法科学
2. 研究課題及び概要
 - ①DNAによる徳島県特産物、薬用植物の新・鑑定法：徳島県特産物、薬用植物は、日本人の健康志向を反映して広く用いられている。しかしながら、それらを摂取、服用するときは、加工や抽出をするため原形をとどめず植物形態学的検査による品種識別は困難となる。また、偽造や異物混入も考えられ、安全と安心の健康生活を目指してDNAによる徳島県特産物、薬用植物の新・鑑定法を開発する。
 - ②法科学におけるDNA鑑定の問題点を指摘し、冤罪絶無のための解決策を示し、社会正義の実現を目指す。
 - ③世界的な法科学鑑定標準化の確立を目指す。

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- ①藤田義彦：DNAによる徳島県特産物の新・鑑定法～第5報～食品偽装のない安全と安心の食生活を目指して～、DNA多型、26、81-85、2018。（集会発表論文）
- ②藤田義彦：アメリカ合衆国におけるDNA型鑑定の検証と対策、犯罪学雑誌、84、130-134、2018。（資料論文）

2. 学会発表

- ①藤田義彦：DNAによる徳島県特産物の新・鑑定法～第6報～食品偽装のない安全と安心の食生活を目指して、日本DNA多型学会第27回学術集会、島根、2018。
- ②藤田義彦：ニューヨーク市首席医学検査官事務所におけるDNA型鑑定について（第1報）、第55回日本犯罪学会総会、徳島、2018。

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況

- ①科学研究費補助金交付、基盤研究（C）「科学的証拠の信頼性評価法と標準鑑定法の確立」

自己評価

「DNAによる徳島県特産物の新・鑑定法～第5報～食品偽装のない安全と安心の食生活を目指して～」をDNA多型に集会発表論文として発表し、DNAによる徳島県特産物の識別法を開発した。「アメリカ合衆国におけるDNA型鑑定の検証と対策」を犯罪学雑誌に資料論文として発表し、冤罪絶無のため日本におけるDNA鑑定を検証した。

「DNAによる徳島県特産物の新・鑑定法～第6報～食品偽装のない安全と安心の食生活を目指して～」を日本DNA多型学会第27回学術集会で発表した。科研費により現地で調査・研究し、「ニューヨーク市首席医学検査官事務所におけるDNA型鑑定について（第1報）」を第55回日本犯罪学会総会において発表した。なお、第55回日本犯罪学会総会は、徳島文理大学で総会会長として開催した。同総会のなかで公開教育講演、公開特別講演を実施し、本学教職員、学生に対して犯罪学の知識向上に努力した。

以上、学会発表、論文発表を行い、学会総会会長を努め、前年度以上の成果を上げることができた。さらに研究を進め、科学研究費補助金の交付を受けたことにより世界的に法科学鑑定の標準化を確立し、冤罪の絶無を目指す。

大学内運営

活動報告

倫理審査委員会副委員長、学長補佐、公開講座企画委員、宿泊セミナー運営委員、学生指導委員、就職支援委員、遍路ウォーク委員

社会貢献

1. 学会等への貢献

- ①日本法科学技術学会評議員
- ②日本犯罪学会評議員
- ③日本薬学会会員
- ④日本DNA多型学会会員
- ⑤日本法中毒学会会員
- ⑥第55回日本犯罪学会総会会長

2. 地域社会への貢献

- ①学校薬剤師(徳島文理大学附属幼稚園、徳島文理小・中・高等学校)
- ②徳島文理大学同窓会・アカンサス会顧問
- ③社会福祉法人ひまわり福祉会評議員
- ④えん罪救済センター運営委員

個人情報

1. 氏名：竹原 明美
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：家庭科教育法
2. 学部授業担当科目
前期：家庭科教育法Ⅰ・Ⅱ、調理学、食品学、調理学演習、食品加工貯蔵学実習、
専門ゼミナールⅠ、生活文化学、文理学、卒業研究
後期：家庭科教育法Ⅲ、専門ゼミナールⅡ、調理学実習、事前事後指導、卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（4）名
4. 自己評価

本年度の家庭科ⅠⅡⅢと事前事後指導では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を展開した。学生は来年度教育実習を控えているので実習校において実践できる内容を取り上げ、グループ学習やロールプレイングなどを実践した。また、模擬授業では学生が手法や工夫を凝らした展開を実践できた。受講生が少なく、一人ひとりにきめ細かな指導ができた事も良かった。結果として学生による授業アンケートでは予想以上に昨年度より好評価を得た。実験・実習の授業では調理学演習、調理学実習、食品加工学実習を担当した。本年度の調理学実習は建築デザイン学科の2年生8名、4年生1名の受講者もいて、お互いが打ち解けた雰囲気の中での実習が展開できた。しかし、出席率において、毎回欠席者が出てしまったり、実習の説明を丁寧にわかり易くしたつもりだが、いざ実習になると全く指示が通ってなかったようで、とんでもない切り方や調理をしていたりして、指導法改善の必要性を感じた。

研究領域

1. 専門研究領域：家庭科教育の実践力をつける教育法，鹿革の有効利用
2. 研究課題及び概要

家庭科は「不易と流行」の教科であり、内容は家庭生活の細部にわたっている。しかし、中・高での授業時数は非常に少ないという現状の中で、生徒たちにどう指導していく事が可能なのかを探ることを昨年度研究課題にあげた。本年度も、アクティブ・ラーニングを取り入れるとどのような効果があるのかということに取り込み実践した。受講した学生たちは模擬授業で取り入れることにより実感できた。

鹿革の研究では、鹿革の特徴を活かした染色、鹿革製品の商品開発について学生と共に進めた。本年度は徳島県のジビエ倍増モデル事業の大学の分野で参加させていただいた。その事業の中で那賀高校や小松島西高校で高校生と小物づくりの実習や話し合いを持つことができ、高大連携も図ることができた。商品開発については学生が手づくりできるものを選び、販売価格も考慮し来年度の学園祭での販売に持って行きたいと考えている。染色については草木染めにおいて、栗のいが、小豆の染色を試みた。媒染により革の硬化が出たが、その解決法や他の植物で試みていきたいと考える。

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
なし
2. 学会発表
なし
3. 知的財産権の出願・取得状況
なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
ジビエ倍増モデル事業

自己評価

授業運営については支援を要する学生もいるため、わかりやすい授業形態を実践していきたいと考えている。また、鹿革研究についてはまだまだ研究の余地が残っており染色や利用の部分で研究を進めていきたい。

大学内運営

活動報告

人間生活学科 2年担任 チューター生（4年 11名 3年 6名 2年 6名）、
教職課程委員会委員、自己点検・自己評価委員、教員養成推進委員会委員、広報委員会委員、防災対策検討委員、全学共通教育研究委員

- ① 中・高の家庭科教員を目指し採用試験を受験予定の学生に対し、教員養成対策講座はもとより、その延長として学生に受験対策を実施した。昨年度は徳島県と高知県の教員採用試験に私が赴任して初めて二名の一次合格者を出し、最終的には徳島県の高校家庭科教諭に1名が現役合格を出したが、本年度は合格者が出なかった。
- ② 県立那賀高校への広報活動を行っているが、森林クリエイト科もでき、普通科の定員も少なくなったため、大学への進学率が減少している。本学への進学者も減少しているが本年度は4名ほどが大学・短大で受験した。

社会貢献

1. 学会等への貢献

なし

2. 地域社会への貢献

- ① 地域社会への貢献今後の課題 高校家庭科では内容の一つに「学校家庭クラブ」がある。それは、家庭科で学習した知識や技術を生かし、学校内や地域の生活に目を向け、問題点の改善や生活の向上を目指して、協力していく組織である。家庭科教員になると教育現場では実践しなければいけないことであるため、特に本学でも力を注いでいる防災についてボランティア活動を中心に学生と共に地域貢献につないでいきたい。
- ② 私の取り組んでいる「鹿革の研究」の根底には野生鳥獣被害の防止策という目的がある。それは捕獲した野生獣類を廃棄するのではなく有効利用するもので肉についてはジビエ料理としての利用で認知度を上げてきたが、皮についてはほとんど廃棄されてきた。近年その皮の有効利用が進み、革製品も多く販売されてきた。しかし肉に比べるとまだ認知度は低く特に鹿革は鞣すのに費用がかかり、革の価格も牛革に比べて高いのが現状である。そこで、今後は被害について、また、鹿革の特徴や革製品の作製を高校に出向いて生徒に伝えていき徳島の現状を理解してもらいたいと考えていた。本年度は徳島県の「ジビエ倍増モデル事業」に参加させていただき、那賀高校では小銭入れ、小松島西高校では商品開発などのグループ討議をさせていただいた。また、今年度卒論生と取り組んだ草木染めや、高校での活動を県が主催する「全国ジビエサミット」や「阿波ジビエ狩猟フェスタ」でポスター発表や作品展示をさせていただいた。狩猟フェスタでは猟師の方や革職人の方などと話ができて、教えていただくことが多かった。今後の活動に活かしたいと考えている。

個人情報

1. 氏名：竹内 理恵
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：看護学 学校保健学 養護実践学 健康教育学
2. 学部授業担当科目
前期：基礎看護学 看護技術 看護学Ⅲ（心理3年） 臨床看護実習 保健科教育法
I 事前・事後指導（養護） 専門ゼミナールⅠ 臨床看護実習の事務手続き
全般
後期：臨床看護学 基礎看護技術 小児保健 教職実践演習 専門ゼミナールⅡ
3. 直接に研究指導した学部学生：卒論研究（2）名
4. 自己評価

学生が主体的に授業に取り組めるように、ルーブリック評価を取り入れ、グループ活動や各人の発表等に対する他者評価並びに自己評価を実施した。また、知識理解のために予習範囲の教科書の要点をノートにまとめさせ毎回チェックするとともに、知識の定着を図るため小テストを数回実施して、学生の自主的学習を促すようにした。

さらに、授業をきっかけにそれぞれの科目に対する興味や関心を広げ、学生の学ぶ意欲を育てるために小論文の作成を課題とした。学生が関心のある内容をテーマとして取り上げ、調べまとめる体験を通して、学ぶことへの関心を高め、論理的な思考力を少しでも身に付けられるようにした。

次年度は、小論文の構成や内容をさらに充実させるよう、一人一人へのきめ細かい指導を行っていきたい。

研究領域

1. 専門研究領域：学校保健学 養護実践学 看護学 健康教育学
2. 研究課題及び概要

養護教諭には、多様化・複雑化した健康課題を解決していく実践的能力が求められる。そこで、養護教諭養成における実践的能力の育成に関する研究と、現場の養護教諭と連携した健康課題を解決するための養護実践活動のあり方に関する研究をさらに進めていこうと考えている。

3. 平成30年度分 研究業績一覧
・論文・著書 なし
・学会発表

- 1) 竹内理恵、貴志知恵子：養護教諭志望の学生の経験過程と自己肯定感の変化 第1報 日本養護教諭教育学会第26回学術集会、兵庫県赤穂市、2018
- 2) 貴志知恵子、竹内理恵：養護教諭志望の学生の経験過程と自己肯定感の変化 第2報 日本養護教諭教育学会第26回学術集会、兵庫県赤穂市、2018
- 3) 佐野博美、竹内理恵：小学生の自己表現する力を育成するための教育活動の検討 日本健康相談活動学会第14回学術集会、徳島県徳島市、2018
- 4) 西田真理子、竹内理恵：保健室登校児童の教室復帰につながる養護教諭の支援の在り方 第2報 日本健康相談活動学会第14回学術集会、徳島県徳島市、2018

4. 知的財産権の出願・取得状況
なし

5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
なし

6. 自己評価

一昨年度より、学生の養護実践能力の向上を図るために、保健室ボランティア活動を企画・運営している。平成28年度は35回延べ120人、平成29年度は72回延べ189人、

平成 30 年度は 78 回延べ 186 人の学生が、各学校の要請を受けボランティア活動に参加した。また、養護教諭志望の 2 年に対して、小学校に依頼して保健室の観察実習の場を設定した。平成 30 年度は 8 名が参加した。このように学校現場で直接養護教諭から指導を受け、養護実践活動を行う機会を作っている。これらの体験により、学生は自分の養護教諭像をより確かなものにし、今後の養護実習や採用試験に向けて意欲を持って取り組む原動力になったと考えている。今後も、学校現場の養護教諭の協力を得て、学生に多様な体験ができる場を作るとともに、現場の養護教諭と連携した研究を進めたいと考えている。

大学内運営

1. 活動報告：教育研究委員、教員養成対策委員、選挙管理委員会委員、人権教育推進委員会委員、退学者防止対策検討委員会委員、3 年生担任、1～4 年生チューター、全学共通教育センター学習支援アドバイザー、養護教諭免許取得者の臨床看護実習の運営及び事務手続きの全般、養護教諭採用試験の二次対策指導

社会貢献

1. 学会等への貢献
 - 日本養護教諭教育学会会員
 - 日本学校保健学会会員
 - 日本教育保健学会会員
 - 日本健康相談活動学会会員
2. 地域社会への貢献
 - ① 平成 30 年度教員免許状更新講習講師
「ヘルシースクールを目指す教育実践の進め方」
 - ② 徳島大学医学部保健学科非常勤講師
平成 30 年 12 月 14 日・12 月 21 日「教育相談」講義
 - ③ 地域連携センター主催 養護教諭研修会の企画・運営・講師
平成 30 年 8 月 18 日 「メタボ予防と口腔保健 歯科専門職からのメッセージ」
徳島県内の養護教諭 13 名が参加
平成31年2月9日 「新学習指導要領の内容及び方法を取り入れた保健教育の進め方」
徳島県内の養護教諭18名が参加

第2節 食物栄養学科

個人情報

- 1：氏名：石堂 一巳
- 2：職位：教授

1. 教育の担当専門領域： 医学

2. 学部授業担当科目

- 前期： 健康管理概論・生化学Ⅱ・生化学実験・食品衛生学演習
後期： 応用生物学A・生化学Ⅰ・臨床栄養学Ⅰ・病理学・公衆栄養学演習
大学院
前期：病態栄養学特論Ⅰ（博士前期課程）・特別研究
後期：病態栄養学特論Ⅱ（博士前期課程）・特別研究

3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（）名、大学院生：修士（1）名

4. 自己評価：食物栄養学科一年生が最初に受ける講義として「健康管理概論」を担当している。新入生が「管理栄養士になりたい」というモチベーションを鼓舞する目的で、管理栄養士の活躍を放映したDVDなどを講義の初めに流し、その映像について議論を進めるなど斬新な授業を展開している。また、新入生に本を読む習慣をつける目的で教科書として新書を採用している。

研究領域

1. カスパーゼ特異的阻害剤及び合成基質の開発
2. 海藻抽出成分からの抗炎症作用物質の同定
3. QPRT 結合物質によるアポトーシスの誘導：新規抗がん剤の探索

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) Nagahama M, Takehara M, Miyamoto K, Ishidoh K, Kobayashi K. Acid Sphingomyelinase Promotes Cellular Internalization of *Clostridium perfringens* Iota-Toxin. Toxins (Basel). 2018 May 20;10(5). pii: E209. doi: 10.3390/toxins10050209.
- 2) Kubo A, Shirato I, Hidaka T, Takagi M, Sasaki Y, Asanuma K, Ishidoh K, Suzuki Y. Expression of Cathepsin L and Its Intrinsic Inhibitors in Glomeruli of Rats With Puromycin Aminonucleoside Nephrosis. J Histochem Cytochem. 2018 Jul 27;22155418791822. doi: 10.1369/0022155418791822.

2. 学会発表

なし

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成27年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) ビタミンB委員会研究奨学金150,000円

自己評価：論文を投稿するも受理されておらず、改善が必要である。

大学内運営：

食物栄養学科長
人間生活学研究科・食物学専攻長
学長補佐
全学教務委員
人間生活学部教務委員長
IR 委員会委員
組換え実験委員会人間生活学部主任
動物実験委員会
研究倫理審査委員会委員

社会貢献：

日本生化学会代議員（中国四国地区選出）
日本病態プロテアーゼ学会評議委員
AMBMB 会員
日本分子生物学会会員
日本人類遺伝学会会員
日本ビタミン学会会員
ビタミン B 研究委員会委員

個人情報

1. 氏名：橋田 誠一
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：医学系、栄養学
2. 学部授業担当科目
前期：応用栄養学 II、応用栄養学実習、調理学演習、総合演習 I
後期：応用栄養学 III、給食経営管理演習、総合演習 II
大学院
前期：食品分子生理学特論 I、特別研究
後期：食品分子生理学特論 II、特別研究
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文 (8)、修士論文 (1)、博士論文 (1)
4. 自己評価：基礎栄養学→応用栄養学+応用栄養学実習というように、基礎から応用へ、また、同じ学期内に同科目の講義と実習を行っている。講義では、小節毎に確認試験を行い、成績に反映させている。また、実習では、毎回、講義のテーマに沿って、10分程度全員にパワーポイントを用い発表をさせ、実習と講義を関連づけて学習させている。

研究領域

1. 専門研究領域：医学・栄養・スポーツ科学・臨床化学・臨床検査学
2. 研究課題及び概要；超高感度免疫測定法の開発と臨床応用
糖尿病リスク者に対する運動・栄養指導を実践し、その効果的な指導法を開発するとともにその効果を尿や濾紙血中のバイオマーカー（生理活性物質）を測定する新しい評価法を開発している。
- 3 平成 30 年度分 研究業績一覧

論文

1. 中野里咲子、中本祥絵、犬伏知子、橋田誠一：女子大生の栄養・生活活動指導による身体組成及び骨密度の変化
徳島文理大学研究紀要 95号 71-79 (2018) 研究報告 ISSN 432-4248
2. 川東美菜、藍場元弘、戎谷友希、河野友晴、柳澤幸夫、橋田誠一：食後の下肢筋肉への電気刺激が血糖値およびインスリン分泌に及ぼす影響
徳島文理大学研究紀要 96号 23-33 (2018) (査読あり)
3. 河野友晴、沼田聡、藤本侑希、黒田暁生、安田哲行、宮下和幸、坂本扶美枝、片上直人、松岡孝昭、松久宗英、橋田誠一：IA-2抗体の高感度検出法（ICT-EIA法）の開発と長期罹病若年性1型糖尿病患者における-3種膵島関連自己抗体（GADA, IA-2A, IAA）の検出について-
徳島文理大学研究紀要 96号 35-44 (2018) (査読あり)
4. 藍場元弘、川東美菜、河野友晴、戎谷友希、藤本侑希、橋田誠一：食べる順番による血糖値および尿中インスリン量の変動に関する研究
徳島文理大学研究紀要 96号 45-56 (2018) (査読あり)
5. 戎谷友希、橋田誠一、柳澤幸夫、川東美菜、藍場元弘：骨格筋電気刺激における分岐鎖アミノ酸（BCAA）摂取がエネルギー代謝に及ぼす効果
徳島文理大学研究紀要 96号 57-64 (2018) (査読あり)
6. 宇都宮由依子、橋田誠一：運動強度（METs）と成長ホルモン分泌の関連について
徳島文理大学研究紀要 96号 117-122 (2018) 研究報告
7. Watanabe T. and Hashida S.: The immune complex transfer enzyme immunoassay: mechanism of improved sensitivity compared with conventional sandwich enzyme immunoassay.
Journal of Immunological Methods 459 76-80 (2018)

学会発表

1. 藍場元弘、川東美菜、河野友晴、戎谷友希、山本真弓、藤本侑希、橋田誠一. 食べる順番による血糖値及び尿中インスリン分泌量の変動-4. 野菜及び肉を先に食べる影響について. 第 61 回日本糖尿病学会、2018 年 5 月 24 日-26 日、東京
2. 河野友晴、沼田聡、藤本侑希、黒田暁生、安田哲行、宮下和幸、坂本扶美枝、片上直人、松岡孝昭、松久宗英、橋田誠一. 超高感度測定法 (ICT-EIA 法) による若年性 1 型糖尿病患者における 3 種の膵島関連自己抗体. 第 61 回日本糖尿病学会、2018 年 5 月 24 日-26 日、東京
3. 川東美菜、藍場元弘、戎谷友希、河野友晴、柳澤幸夫、橋田誠一. 食後血糖値およびインスリン分泌抑制を目的とした筋肉への電気刺激の有効性の検討. 第 61 回日本糖尿病学会、2018 年 5 月 24 日-26 日、東京
4. 戎谷友希、柳澤幸夫、川東美菜、藍場元弘、橋田誠一. 骨格筋電気刺激と BCAA の併用が生体に与える影響. 第 61 回日本糖尿病学会、2018 年 5 月 24 日-26 日、東京
5. 藍場元弘、河野友晴、川東美菜、橋田誠一. 食後における歩行運動及び階段運動による成長ホルモンの分泌. 第 5 回日本スポーツ栄養学会、2018 年 7 月 21 日-22 日、京都
6. 藍場元弘、橋田誠一、藤本侑希、川東美菜、河野友晴. 食品の単独摂取による血糖値及びインスリン分泌の検討. 第 65 回日本栄養改善学会、2018 年 9 月 3 日-5 日、新潟
6. 河野友晴、橋田誠一、川東美菜、藍場元弘. 食後の運動が血糖値に与える影響 (運動強度での比較). 第 65 回日本栄養改善学会、2018 年 9 月 3 日-5 日、新潟
7. 柳澤幸夫、福池映二、戎谷友希、橋田誠一、鶯春夫. ポールウォーキングが呼吸機能・呼吸筋力に及ぼす影響. 第 47 回四国理学療法士学会、2018 年 12 月 1 日-2 日、高知
8. 藍場元弘、川東美菜、河野友晴、橋田誠一. 日常活動 (歩行運動及び階段運動) が食後のインスリン及び成長ホルモンの分泌に及ぼす影響. 第 22 回日本病態栄養学会、2019 年 1 月 11-13 日、横浜
9. 河野友晴、藍場元弘、秦明子、船木真理、渡辺敏弘、南川貴子、田村綾子、酒井徹、中本真理子、首藤恵泉、市原多香子、橋田誠一. コホート研究における尿中アディポネクチンの腎障害指標の有用性に関する研究. 第 22 回日本病態栄養学会、2019 年 1 月 11-13 日、横浜
10. 小川直子、佐藤理奈、犬伏知子、橋田誠一. 間食の種類が体格指標や臨床検査値に与える影響. 第 6 回日本食育学会 2018 年 5 月 12-13 日、東京
11. 犬伏知子、小川直子、松下純子、津田とみ、橋田誠一. 炭水化物量調整による糖尿病予防教室参加者の骨密度の変化 (クロスオーバー試験). 第 72 回日本栄養食糧学会大会 2018 年 5 月 11-13 日、岡山

平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

1. 科学研究費補助金 (基盤研究 C) ; 「膵関連自己抗体の早期検出法の開発と食・生活パターン解析による生活指導法の構築」代表
2. 科学研究費補助金 (基盤研究 C) ; 「高感度測定 GAD 抗体と HLA による新たな糖尿病分類の試み」分担
3. 地域イノベーション戦略支援プログラム (国際競争力強化地域) 「とくしま「健幸」イノベーション構想推進地域」; 「膵β細胞をまもる研究：膵島関連自己抗体の高感度検出による膵障害機構の解析と判定への応用」分担

自己評価：腎障害マーカーや糖尿病関連自己抗体の測定法を開発し、糖尿病性腎症や緩徐進行 1 型糖尿病の早期発見や診断を行える可能性を示した。測定法のキット化や自動機器の上市ができ、早期糖尿病予防に貢献したい。

大学内運営

1. 活動報告；発明審査委員会
2. 健康科学研究所 所長

個人情報

1. 氏名：犬伏 知子
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：食品衛生学
2. 学部授業担当科目
前期：食品衛生学、総合演習Ⅰ、公衆栄養学演習、公衆栄養学実習(2クラス)
後期：食品衛生学特論、総合演習Ⅱ、食品衛生学演習、食品衛生学実習(2クラス)
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文(5)名
4. 自己評価：
食品衛生学の教科書を以前使用していたものと変えたので、予習が思ったより大変であった。4年生の臨地実習の指導なども含まれる総合演習ⅠとⅡの担当でもあり、国家試験の合格率にも繋がる教科なので、年度の最後まで気がぬけない。

研究領域

1. 栄養

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) 女子大生の栄養・生活活動指導による身体組成及び骨密度の変化：中野里咲子、中本祥絵、犬伏知子、橋田誠一. 徳島文理大学研究紀要、**2018**、第95号、71-79.
- 2) Biphenyl increases the intracellular Ca^{2+} concentration in HL-60 cells. Inubushi, T.; Sugimoto, M.; Kunimi, H.; Hino, H.; Tabata, A.; Imura, N.; Abe, S.; Kamemura, N. *Fundam. Toxicol. Sci.* **2018**. 5(3), 99-103.
- 3) Biphenyl-induced cytotoxicity is mediated by an increase in intracellular Zn^{2+} . Ae, M.; Imura, N.; Inubushi, T.; Abe, S.; Yusuke, B.; Sugimoto, M.; Kamemura, N. *Drug and Chemical Toxicology* **2018**, 11, 1-6.

2. 学会発表

1. 間食の種類が体格指標や臨床検査値に与える影響：小川直子、佐藤理奈、犬伏知子、橋田誠一、第6回日本食育学会(東京) 2018. 5. 12-13
2. 炭水化物量調整による糖尿病予防教室参加者の骨密度の変化(クロスオーバー試験)：犬伏知子、小川直子、松下純子、津田とみ、橋田誠一、第72回日本栄養・食糧学会(岡山)、2018. 5. 11-13

3. 知的財産権の出願・取得状況

- 1) なし

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

科学研究費補助金、基盤研究(C)「調理に伴う食品添加物の残存量の変化とアレルギーに対する効果」代表、申請中

自己評価：

今年度は4年生の卒論生4名と、3年生の卒論生1名の指導に時間を費やした。4年生はパソコン作業を伴う研究で、3年生は実験を伴うテーマであり、最初は細かく指導した。

今年度と、次年度で食品添加物に関する論文をまとめたいと思う。また、4年生の卒論は早めに研究紀要などに残せるように準備にとりかかる必要がある。

大学内運営

1 活動報告

- ① アカンサス会徳島県支部の副支部長を担当
- ② 学生指導委員会の委員長を担当
- ③ 退学者防止対策検討委員会委員
- ④ 研究ブランディング事業自己点検・評価実施委員会の委員
- ⑤ 入試問題作成委員（化学基礎）
- ⑥ 臨地実習の実習先開拓を行った
- ⑦ 2年生の担任
- ⑧ 1年から4年生20名のチューター担当

社会貢献

1 学会等への貢献

- 2019年日本家政学会(徳島)の準備委員
- 2019年11月から日本栄養改善学会の評議員

2 地域社会への貢献

- ① 徳島県食の安全安心審議会委員を担当
- ② 徳島県消費生活審議会委員を担当
- ③ 徳島県危機管理部消費者くらし安全局安全衛生課の先生の指導のもと、食物栄養学科3年生を食品表示ウォッチャーとして、市場の食品表示のチェックを行なってもらった。
- ④ アカンサス会徳島県支部の行事（おもしろい理科実験、夏休みの宿題を親子で完成させよう（絵画教室）、ノルディックウォーキングで大学周辺を歩こう）の講師依頼、進行などを行った。
- ⑤ アカンサス会本部行事（相撲合宿）の実行委員担当

個人情報

1. 氏名：坂井 隆志
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：生理学、免疫学、解剖生理学、栄養学、微生物学
2. 学部授業担当科目
前期：運動生理学、解剖生理学Ⅰ、食品加工学演習、卒業研究
後期：微生物学、解剖生理学Ⅱ、解剖生理学実験、免疫学、卒業研究
大学院
前期：分子栄養学特論Ⅱ、分子栄養学特別講義、分子栄養学特別研究、生活習慣病
学域
後期：分子栄養学特別講義、分子栄養学特別研究
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（12）名、大学院生：博士後期（1）名

4. 自己評価：一年を通して講義数が多く、その準備が大変だった。担当した微生物学、解剖生理学、運動生理学、免疫学はどれも2コマの授業時間の中で教えるには範囲が広く、すべてを細かく教授することは不可能であることから、学生の目標である「管理栄養士国家試験合格」のための講義をすることを第一の目標とした。昨年度、一年生対象の授業内容をより簡易且つ試験のストレスを減らすように事務方（及び学科長、学長）から強く要望されたので、本年度は、一年生の授業における習得レベルを大幅に落として高校生物基礎レベルくらいに設定し、かなり広く浅い内容に変更した。小テストの回数も大幅に減らした（微生物学は中間テスト一回のみ、解剖生理学は前期・後期ともに2、3回に一回のペース）。そのため授業準備にかかるエフォートはだいぶ減ったと思う。しかしながら、あらたに人間生活学部の入試委員長およびセンター試験委員の仕事が加わり、忙しさは増えた気がする。そのため、予定していた研究領域のエフォートを増やすことはできなかった。

研究領域

1. 歯薬学分野・基礎医学・病態医化学

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文・著作

- 1) すべての診療科で役立つ栄養学と食事・栄養療法(羊土社) ISBN978-4-7581-0898-0 第1章-1「エネルギー産生栄養素(三大栄養素)」(p12-21)分担、2019.1.10 第1刷

2. 学会発表

- 1) 1) 新規NF- κ B制御分子ヌクリングはインスリンの発現制御に関与している。林文琳、Anh Tuan Pahm, 福井清、坂井隆志, 第91回日本生化学会大会(京都), 2018.9.24-26.

3. 知的財産権の出願・取得状況

- 1) なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) 科学研究費補助金（基盤研究 C）；「生活習慣病の発症要因としての、新規アポトーシス制御分子ヌクリングの重要性の検討」代表（不採択）

自己評価：研究成果をまとめ、論文として発表することが出来なかった。教育領域へのエフォートを取り過ぎ、研究領域が少々疎かになった感がある。

大学内運営

- 1) チーム医療促進委員会委員（医師）（0 回）、入学試験委員会委員（年数回、入試要項チェック、入学願書のチェックなど）、センター試験委員（年数回、人間生活学部内試験監督選考、試験前日の会場設営準備、試験当日の雑務、翌日の試験発送手配など）、入学試験委員会委員長
- 2) 一般および推薦入試問題の作成、問題チェックおよび採点（生物基礎）、AO 入試の面接（4 回）

社会貢献

- 1) 日本生化学会評議員（平成 30 年 1 1 月より）
- 2) 毎月 0～3 回ほど（土日祝日のみ）、徳島県赤十字血液センターなどからの依頼で医療業務に従事
- 3) 毎月 1～2 回（日曜日）、香川県高松協同病院からの依頼で病棟管理業務に従事
- 4) 徳島大学大学院講義（eラーニングによる英語の講義）
- 5) 徳島大学歯学部非常勤講師として歯学部 3 年次生に講義（1 コマ）
- 6) 徳島大学医学部講師、徳島大学大学院医科学教育部担当客員教授として研究に参加

個人情報

1. 氏名：岩田 深也
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：食品学、食品加工学

2. 学部授業担当科目

前期：食品学、食品加工学演習、食品学実験Ⅰ
後期：食品学特論、食品学実験Ⅱ

大学院

前期：無し
後期：無し

3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（6）名、大学院生：修士（）名

4. 自己評価：講義、実験等に関しては専門的な内容を、中間的なレベルの学生の能力・立場、を汲み取って、可能な限り内容を噛み砕いて解説、指導した。個人的には80点以上と考えている。成績下位層に向けて完璧に理解し易い内容とすると、上位陣が学習意欲を失うため、対象レベルの設置を固定することが困難である。ただ、最終的な目標、理想は学生全員の国家試験合格と考えているため、今後さらに、画像、映像等、内容を理解し易く、集中し易い講義内容を工夫して、全体のレベルアップ及び国家試験合格率の更なる向上に取り組んでいきたいと考えている。

研究領域

1. 発酵微生物学

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) 特に無し。

2. 学会発表

- 1) 特に無し。

3. 知的財産権の出願・取得状況

- 1) 特に無し。

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) 特に無し。

自己評価：

総合的に見て50点以下と認識している。学生の卒論ゼミ等、教育・育成に関しては優もしくは秀を付けたいが、健康の問題から、研究活動に関してはほとんど手を付けられていない。3、4年生の成績不良者に対する対応や、卒論ゼミ生に対する国家試験対策等で手一杯であった。

研究分野では、火山灰からなる酸性土壌（大隅・薩摩半島等）に生育した茅と、当県の土壌に生育した茅の時期を揃えて、糖分濃度を比較検討した結果、気候（温度差）の影響か、生育土壌自体の問題か見極められなかったが、当県で採取された萱の糖分は鹿児島のと比較して半分以下で、アルコール発酵にはやや不十分と言わざるを得なか

った。一方、農業を営む方から、過熟した（黄色くなって熟れた）ニガウリ（ゴーヤ）の利用法の相談を受け、茅と同じく、糖分を含有する未利用発酵原料として研究課題の一つに取り上げてみた。その結果、発酵とともに苦みが強く感じられるため、醸造酒としては適性を欠いていたため、アルコール発酵後、さらに酢酸発酵に取り組み、その結果、新規なゴーヤ酢の試作ができた。量的に過熟のゴーヤを集めることがなかなか困難ではあるが、新規食品として開発を進めて行きたいと考えている。現状の課題は過熟となった原料を一定量確保することである。農家の協力をいただかなければならない。

今後も体力回復に取り組み、広く未利用資源の微生物分解・発酵による利用方法の検討に取り組みたい。

大学内運営：

教育研究委員会において、新採用教員の方々の研究発表会の運営と新規図書を取りまとめ等に携わった。

社会貢献：

徳島県が開設する、農業大学校における6次産業化コースにて、講師を務めた。また、北島町における少年少女発明クラブにおいて、十数名の児童及び保護者に対して可能な限り平易な科学実験を指導した。

さらには、県内の食品産業（農業従事者本人を含む）及び食品関連機器製造業に携わる社会人の方々の食品に関する知見をより高めるため、食品の機能性等に係る、指導及び講義を行い、食品加工技術（特に発酵技術）レベルの底上げに貢献できたと考えている。全国二位の生産量を誇る筍の新製品開発にも携わる事を依頼されている。

個人情報

1. 氏名：坂井 堅太郎
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：基礎栄養学
2. 学部授業担当科目
前期：基礎栄養学、栄養学Ⅱ（人間生活学科）、応用生物学A（児童学科）
後期：基礎栄養学実習、応用栄養学Ⅰ、栄養学（理学療法学科）
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文3年（5名）・4年（6名）
4. 自己評価：
担当した授業について、一方的な講義ではなく、授業中に学生自らが授業の内容をまとめるプリントを配布し、学生が習得しなければならない知識について、体系的に身に付くよう工夫した。

研究領域

1. 専門研究領域：栄養生化学
2. 研究課題及び概要：
①食物アレルギーの発症機構に関する栄養化学的研究
アレルギーを引き起こしているヒスタミンが必須アミノ酸の一つであるヒスチジンから合成されていることに注目し、栄養生化学的な視点から栄養管理につなげていく研究を行っている。

平成30年度分 研究業績一覧

1. 総説

- 1) 妻木 陽子、坂井 堅太郎：食物アレルギー患者に対する地域社会を基盤とした支援、アレルギーの臨床、38巻9月臨時増刊号 pp. 84-88、2018年9月。

2. 学会発表

- 1) 妻木 陽子、坂井 堅太郎：長期高ヒスチジン培養条件下におけるRBL-2H3細胞のヒスタミン合成に及ぼす影響、第72回日本栄養・食糧学会学術総会、2018年5月。
- 2) 妻木陽子、坂井堅太郎：食物アレルギー対応食品の取扱いに関する実態把握、第65回日本栄養改善学会学術総会、2018年9月。

3. 知的財産権の出願・取得状況：なし

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：なし

自己評価：

本年度は、教育関連の準備および整理を進めることができたが、まだ十分に満足にできるものではない。今後、さらに教育・研究の環境整備を進めていきたい。

大学内運営

1. 活動報告
①広報委員会・委員
②災害時初期対応者

社会貢献

1. 学会等への貢献

- ① 日本栄養・食糧学会 参与
- ② 日本栄養改善学会 評議員
- ③ 日本アミノ酸学会 評議員

個人情報

1. 氏名：中川 利津代
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 公衆栄養学、公衆衛生学
2. 学部授業担当科目
前期： 公衆栄養学Ⅰ、公衆衛生学Ⅰ、公衆衛生学演習、公衆衛生学実習
後期： 公衆栄養学Ⅱ、公衆衛生学Ⅱ、公衆衛生学演習
通年： ゼミ
3. 直接に研究指導した学部学生等： 卒業論文（9）名、大学院生：修士（）名
4. 自己評価：
 - ・ 学生が興味を持ちわかりやすい授業にすることを目的に、学生に毎回授業の工夫点や授業内容の感想についてアンケートを実施した。その結果、授業の改善につながった。加えて、学生を理解することにもつながり、双方向のコミュニケーションが取れた。
 - ・ 小テストをして学生が理解していない分野を調査し、その分野を説明した。また、個別指導の回数も増やし確実に点数がとれる（理解できる）ように工夫した。
 - ・ 公衆衛生学実習でエクセルを使ってデータの分析方法を教えた。その結果、公衆衛生における疫学や研究デザイン、公衆栄養における疫学や残差法が理解しやすくなった。
 - ・ 公衆衛生の疫学指標など数学の基礎が必要な分野を苦手とする学生が多いので、国家試験の過去問が解けるようになるまで繰り返し説明した。集団での説明で理解するのが難しい学生には、個別で相談に来るように促した。その結果国家試験の点数が上がった。
 - ・ class roomに配布資料や過去問の正答と解説、分析用データなどをアップし、学生が利用しやすくなった。
 - ・ 担任している学生で、特に成績不良な学生は、保護者の方とも一緒に面談した。学生だけでなく保護者ともお手紙や電話で連絡をとり、学生指導にあたった。
 - ・ 4年生のゼミ生には、セルフコーチングができるように訓練した。月ごとの目標を立てるように指導した。またゼミ室で勉強しやすいように環境を整えた。自発的にゼミ室に来て勉強している学生は成績が伸びた。3年生のゼミ生には、本とゼミ生同士の対話から新たな発想を生み出し、目標達成に向けアクションを起こすよう導いた。
 - ・ 学生が作成した教育資材が消費者庁のホームページ及び全国で専門職が使用する指導媒体に掲載予定である（平成31年5月）。
 - ・ 学生が管理栄養士になりたいと思う取組とわかりやすい授業を目指し工夫したい。

研究領域：地域貢献を主体とした研究

1. 食品表示法での栄養成分表示の全面施行に向け、食品製造業者へのサポート法
 - ・ 栄養成分表示を推進するために質的調査から進めて量的調査で食品製造業者にかかる負担や課題及び対応策の要因を明らかにした。
 - ・ 食品成分表を使って栄養成分表示する方法を菓子製造業者と連携し研究した。
 - ・ 徳島文理大学において徳島県と連携し業者を対象に研修会を実施し効果的であった。
 - ・ 調査結果から栄養成分の表示義務化に向けての支援方策を検討する基礎資料を得た。平成29年度の調査研究の結果を受け、平成30年7月に「知事への提言」に至った。平成31年3月に徳島県規制改善会議において研究結果を発表し施策に繋げた。
2. 牟岐町における「もち麦」を使っての地域おこし事業への協力
 - ・ もち麦の熱量及び栄養成分の特徴、機能性成分であるβグルカンについて研究した。

平成 30 年度分 研究業績一覧

1. 論文

2. 学会発表

1) 「医療機関における管理栄養士の糖尿病患者への個別栄養指導の力量と関連する職場環境と卒前教育に関する研究」【第 7 回日本栄養学教育学会学術総会（於：新潟）】○中川利津代

2) 「食品製造業者が全面的な栄養成分表示を実施するために必要な要因の抽出」

【第 65 回日本栄養改善学会学術総会（於：新潟）】○中川利津代

3. 知的財産権の出願・取得状況 1) なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

1) 補助金研究費の名称：平成 30 年度とくしま政策研究センター「委託調査研究」徳島県

2) 科学研究費補助金（基盤研究 C）申請；代表（不採択）

自己評価：

1. 食品表示法では 2020 年 4 月 1 日原則栄養成分表示の義務づけが全面施行される。また、徳島県として食品表示法を所管している消費者庁を徳島県に誘致することが優先施策である。このような課題のある今、栄養成分表示の現状や課題及び対応策、そして栄養成分表示方法について研究し、消費者庁と共に基礎資料としたことは大変意義深い研究である。この度の調査結果は、平成 30 年度とくしま政策研究センター「委託調査研究」外部委員審査会や第 10 回及び第 11 回徳島県規制改革会議や徳島県食品表示法担当部局に直接報告することにより消費者庁や徳島県の施策に波及効果が大きいと期待できるものである。また調査結果を受けて菓子製造業者等を対象に実施した研修会は効果的であった。

2. これらの研究は、徳島文理大学と徳島県及び消費者庁との関係性を良好に保つために寄与していると考えられる。

3. 牟岐町における「もち麦」を使っの地域おこし事業への協力により牟岐町の農業守る会・JAかいふ・JAかいふ牟岐女性部・牟岐町・南部県民局の方々と連携がとれた。

本学学生にとって、地域の課題解決に興味・関心・意欲を持ち、積極的に楽しく関わり、得られた知見を、管理栄養士として仕事の意義を体験する機会になった。

本学において徳島文理大学生と牟岐のもち麦に関わる方々との交流会が開催され、本学の学生のことや特徴を知っていただくことができた。

大学内運営

- ・多職種連携推進委員会委員 ・防災対策検討委員会委員
- ・OA入試の面接 ・オープンキャンパスでの模擬授業等の活動 ・遍路ウォーク
- ・保護者会において保護者との面談（徳島、鳥取・島根）
- ・大学入試センター試験 ・入学説明会・施設見学会
- ・前期後期の総合演習及び業者模試試験の採点等担当
- ・管理栄養士国家試験の同行

社会貢献

- ・消費者庁による特別講義と演習「栄養成分表示は健康づくりの重要な情報源」を実施
- ・日本栄養改善学会 役職：評議員
- ・徳島大学医学部医科栄養学科 非常勤講師
- ・菓子製造業者等を対象にした栄養成分表示に関する研修会の開催
- ・牟岐町における「お米まつり」の講師
- ・吉野川市食生活改善推進協議会会員を対象とする研修会講師
- ・東みよし町介護予防講座の講師
- ・牟岐町の農業守る会・JAかいふ・JAかいふ牟岐女性部・牟岐町・南部県民局の方々との「牟岐のもち麦」をテーマにした交流会の実施
- ・「牟岐のもち麦粉」でパンケーキを焼いてみようの会の実施
- ・商品開発を目的に「もち麦うどん」の製造業者との交流会の実施

個人情報

1. 氏名：近藤 美樹
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：調理学
2. 学部授業担当科目
前期：調理学実習 I (2 クラス)、調理学、食生活論、調理学演習
後期：調理学実験 (2 クラス)、調理学実習 II (2 クラス)
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文 (2) 名、その他 (10) 名
4. 自己評価：

本年度から新入生を対象とした担当科目が増加したことにより、新規科目とこれまでの科目と関連付けて指導内容の充実を図ることができた。後期の学生実験では、臨地実習を控えた学生に対し、科目内容に加え、レポート作成を通じた文章力の向上や実習態度を含む総合的な指導に力を入れた。次年度は更に後期の授業時間が増加し、物理的に時間が不足するため、効率化が重要であると考えている。

研究領域

1. 専門研究領域：調理学、食品機能学、栄養学
2. 研究課題及び概要；
 - 1) 食品成分の調理過程における変化：古代豆の抗酸化成分の同定を目的に、成分を単離し、機器分析により同定した。
 - 2) シカ肉の未利用部位の付加価値化：有害獣鳥肉の食資源としての付加価値化を目的に、シカ肉の各部位の機能性成分の分析を通して未利用部位の有効性を示した。
 - 3) 次世代に伝え継ぎたい家庭料理の研究：先の徳島県下での聞き書き調査に基づき、本年度は祖谷地区を中心に料理の復元を行い、料理本として発行に至った。
- 3 平成 30 年度分 研究業績一覧

1. 論文・著書

- 1) 近藤美樹、古代えんどう豆の調理による抗酸化性の変化と加工食品への応用、公益財団法人 日本豆類協会、豆類時報、91、11-17、平成 30 年 6 月 1 日。
- 2) 別冊うかたま、伝え継ぐ日本の家庭料理小麦・いも・豆のおかず、(一社) 日本調理科学会編、(一社) 農産漁村文化協会、ほたようかん(徳島県)、40、2018 年 6 月 1 日。
- 3) ジビエ産業読本、奥山忠政編、四国ジビエ(株)、第 14 章 ジビエの栄養価、76 - 815、2018 年 9 月 30 日。
- 4) エssenシャル食品化学、中村宜督・榊原啓之・室田佳恵子編、第 11 章食品の機能性、株式会社講談社、197-223、2018 年 12 月 20 日。

2. 学会発表

- 1) 新家 大輔，植田 玲奈，長尾 久美子，近藤（比江森）美樹：熟成に伴うシカ肉のうま味成分の挙動。日本栄養・食糧学会第 72 回大会、2018 年 5 月 11-13 日、総社市
- 2) 近藤（比江森）美樹，新家 大輔，新居美香：フキノトウエキスの血糖値上昇抑制効果。日本栄養・食糧学会第 72 回大会、2018 年 5 月 11-13 日、総社市

- 3) M. Hiemori-Kondo: Effect of cooking on antioxidant activity of the pea (*Pisum sativum* L.) cultivar with purple pods. 256th ACS National Meeting, Boston, USA, 2018. 8. 19-23.
- 4) 近藤(比江森)美樹, 上原穂野香: ツタンカーメンエンドウの抗酸化性に及ぼす調理の影響. 日本調理科学会平成30年度大会、2018年8月30, 31日、西宮市
- 5) 金丸芳, 坂井真奈美, 松下純子, 長尾久美子, 近藤美樹, 後藤月江, 三木章江, 川端 紗也花, 高橋啓子: 徳島県の家料理 主菜の特徴 地場食材を用いた主菜. 日本調理科学会平成30年度大会、2018年8月30, 31日、西宮市
- 6) 近藤(比江森)美樹, 新家大輔, 新居美香: フキノトウエキスの血糖値上昇抑制効果および活性成分の探索、第23回日本フードファクター学会学術集会、2018年9月7, 8日、京都市
- 7) 近藤(比江森)美樹, 上原穂香, 新家大輔: ツタンカーメンエンドウの抗酸化成分の同定および調理による抗酸化性の変化. 日本農芸化学会2019年度大会、2019年3月24~27日、東京都

その他: アオサノリの食品機能性(栄養性、嗜好性、生体調節)の評価、徳島文理大学 私立大学研究ブランディング事業「藻類成長因子を用いた海藻栽培技術イノベーション」第1回 研究発表会(平成30年6月23日)、第2回 研究発表会(平成30年9月22日)

4. 知的財産権の出願・取得状況: なし

5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況:

- 1) 古代エンドウ「ツタンカーメン豆」の調理により生じる着色機構の解明と抗酸化性の解析: 科学研究費補助金(基盤研究C)、継続交付、代表
- 2) ジビエ倍増モデル事業: 「シカ肉の未利用部位の付加価値化に関する研究」の試験研究、交付、代表

6. 自己評価

これまで取り組んできた古代エンドウ豆やシカ肉の調理学的研究および郷土料理の調査研究の成果を論文や書籍として発表し、さらに栄養学や農学部(大学院)の学生・大学院生向けの食品化学の教科書を執筆することができた。従って、教育に占めるエフォートが高いことを考慮すると研究面では一定の成果を収めることができたと考える。しかし、国際誌での論文発表に至らず、次年度の課題である。

大学内運営

1. 活動報告:

就職委員、4年生担任、1~4年生チューター、臨地・校外実習担当、オープンキャンパス模擬授業、AO入試面接、大学院入試問題作成・面接、文理食生活会顧問

社会貢献

1. 学会等での社会貢献:

科学研究費委員会専門委員(平成27年度:任期満了後公開)

日本栄養・食糧学会代議員・参与、日本農芸化学会参与、日本栄養改善学会参与、第72回日本栄養・食糧学会実行委員、ICPH2019 実行委員

2. 地域社会への貢献:

那賀高等学校での講演「シカ肉の機能性とエシカル消費について」、第5回日本ジビエサミットにおける講演、阿波地美栄×狩猟フェスタにおけるポスター展示、徳島新聞「次代につなぐ古里の味」に関する記事および情報提供 2件

個人情報

- 1 氏名：小川 直子
- 2 職位：講師

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：栄養教育論
- 2 学部授業担当科目
前期：栄養教育論Ⅱ、栄養教育論実習Ⅰ（2クラス）、文理学
後期：栄養教育論Ⅰ、栄養教育論Ⅲ、栄養教育論実習Ⅱ（2クラス）、栄養教育論演習
- 3 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（10）名、大学院生：修士論文（1）名
- 4 自己評価：新たに栄養教育論を学ぶ2年生にもわかりやすいとの評価を得た。毎回授業前に行う小テストに対する学生の評価も高く、勉強する習慣がつくと喜ばれた。従って今後も毎回授業開始前に前回授業内容の小テストを行い、やれば出来る喜びを実感してもらう事を継続する。さらにそれが国家試験の点数にも繋がっており、本番はもちろん、4年生で行う模擬テストでも毎回全国平均に比べ高得点を得ていることから、今後もこの授業形態で行くつもりである。また栄養教育論実習Ⅰで学生に作成し発表してもらっているプレゼンでの集団に対する栄養教育を、給食経営管理実習の食事提供時に一般の喫食者に対して4回発表してもらった。自分の授業時間以外にその発表練習の指導が増えかなりの時間を要したが、学生にとっては一般の方々から聞いて頂ける良い学びの機会になったと思われる。

研究領域

- 1 専門研究領域：栄養学、食生活学、栄養教育・栄養指導
- 2 研究課題及び概要
 - ① 「アオサノリ（ヒトエグサ）の摂取が体格指標、臨床検査値に与える影響」
 - ② 「咀嚼が食行動や体格指標に及ぼす影響」
 - ③ 「間食の種類によって体格指標、臨床検査値に与える影響の違いについて」
 - ④ 「栄養教育による小中学生ラグビー選手の身体づくりに関する研究」
 - ⑤ 「一般市民の運動習慣が体格指標に与える影響」
- 3 平成30年度分 研究業績一覧
【学会発表】
 - ① 小川直子、佐藤理奈、犬伏知子、橋田誠一 「間食の種類が体格指標や臨床検査値に与える影響」第6回日本食育学会 2018.5.12-13（東京・女子栄養大学）
 - ② 犬伏知子、小川直子、松下純子、津田とみ、橋田誠一 「炭水化物量調整による糖尿病予防教室参加者の骨密度の変化（クロスオーバー試験）」第72回日本栄養食糧学会大会 2018.5.11-13（岡山）
 - ③ 福浦茜、大原栄二、小川直子 「給食経営管理実習におけるCSポートフォリオ分析を用いた改善施策の検討」第17回日本栄養改善学会近畿支部学術総会 2019.3.10（京都・京都光華大学）
 - ④ 藤本正己、岩田深也、小川直子 「テキストマイニングによる管理栄養士国家試験の科目及び問題内容の分析」第11回「特色ある教育・研究」全学発表会 2018.10.12（徳島キャンパス）

- 4 知的財産権の出願・取得予定： なし
- 5 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：
 ・ブランディング事業研究：「アオサノリ（ヒトエグサ）の摂取が体格指標、臨床検査値に与える影響」共同研究者
 ・科学研究費補助金（基盤研究C）：「テキストマイニングを活用した効果的栄養教育プログラム作成に関する研究」代表（申請中）
- 6 自己評価：これまで行ってきた一般市民に対して行う糖尿病予防のための栄養教育に加え、スポーツをする子どもたちへの栄養教育効果をみる研究テーマ、また一般市民の咀嚼や間食、さらに藻類であるヒトエグサ摂取の効果に着目した介入研究など、研究対象の幅が広がってきたと感じている。特にブランディング事業への参加は、様々な分野の研究者と共にヒトエグサのあらゆる効果について検討を行うことが出来、自分の専門性を改めて見直す機会となった。大学院生や学部卒業研究生への研究指導を行う中で、栄養教育分野の前進に少しでも貢献出来るよう、行ってきた研究結果を論文にまとめることが来年の目標である。

大学内運営

- 1 活動報告：(委員) 学部自己点検・自己評価委員、 新入生宿泊セミナー委員
 (クラス担任) 食物栄養学科1年生担任(50名)
 1～4年学生のチューター(各学年5名)
 (その他) 推薦入試面接、A0入試面接
 オープンキャンパス模擬授業、進路説明等
 沖縄県保護者会(那覇、名護、沖縄)面談
 新入生宿泊セミナー、遍路ウォークの引率
 アカンサス会徳島県支部の役員 等

社会貢献

- 1 地域社会への貢献
 ①徳島県栄養士会理事 ・ 研究教育協議会長
 ②一般市民、スポーツをする子どもたちに対する栄養教育
 ③アカンサス会行事(相撲合宿)実行委員

個人情報

1. 氏名：中橋 乙起
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：臨床栄養学

2. 学部授業担当科目

前期：分子栄養学、臨床栄養学実習Ⅱ、文理学

後期：臨床栄養学Ⅱ、臨床栄養学実習Ⅱ、臨床栄養学演習

大学院

前期：食品学特論Ⅰ

後期：食品学特論Ⅱ

3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文 2名（4年生1名、3年生1名）

去年度から研究指導をしてきた学生が4年生となり、「ラット肝臓に存在するビタミンD異化酵素CYP24A1 スプライシングバリエーション体(CYP24A1-SV)の局在に関する研究」というタイトルで卒業論文を作成することができた。現3年生の学生にも、引き続き研究指導を行っていく。

4. 自己評価：実習においては、グループワークや発表を重視し、自らの考えを論理的に説明できるかを評価した。講義においては国家試験を意識し、頻出の内容に関しては特に重点的に説明した。大学院の授業では、食品成分に関する英語論文を読解させることで、最新の情報に触れてもらうことができた。

研究領域

1. ビタミン、ミネラル

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) Kagawa T, Kozai M, Masuda M, Harada N, Nakahashi O, Tajiri M, Yoshikawa R, Nakao M, Takei Y, Iwano M, Takeda E, Taketani Y, Yamamoto H: Sterol regulatory element binding protein 1 trans-activates 25-hydroxy vitamin D₃ 24-hydroxylase gene expression in renal proximal tubular cells. *Biochem Biophys Res Commun*
- 2) Fukuda-Tatano S, Yamamoto H, Nakahashi O, Yoshikawa R, Hayashi M, Kishimoto M, Imi Y, Yamanaka-Okumura H, Ohnishi K, Masuda M, Taketani Y: Regulation of α -Klotho Expression by Dietary Phosphate During Growth Periods. *Calcif Tissue Int.*

2. 学会発表

- 1) 中尾 真理、山本 浩範、中橋 乙起、増田 真志、竹谷 豊：CKDラットにおいてリンは鉄代謝および腎性貧血の増悪に影響を与える。第6回日本腎栄養代謝研究会（大阪）
- 2) 川東 美菜、中橋 乙起、森川 咲子、山本 浩範：CYP24A1 のスプライシングバリエーション体（CYP24A1-SV）は正常ラットの肝臓において高発現している。第65回日本栄養改善学会（新潟）

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) 科研費 2019 年度 若手研究 申請済
- 2) 2019 年度 徳島文理大学「特色ある教育・研究」 申請済

自己評価：本年度は、これまで本学で研究してきたビタミンD代謝関連遺伝子の発現に関する研究成果を学会に発表することができた。今後も本学で得られた研究結果を発表していくとともに、これまでの研究成果を論文としてまとめていけるよう尽力する。

大学内運営

人間生活学部入試委員、全学入試委員、1年生担任、1～4年生チューター

社会貢献

全国健康保険協会 徳島支部 「徳島文理大学・短期大学部考案！！健康レシピ」作成（2018年11月、2019年3月分）

個人情報

1. 氏名：森川 咲子
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：臨床栄養学、栄養学、給食経営管理論

2. 学部授業担当科目

前期：臨床栄養管理論、臨床栄養活動論、臨床栄養学実習Ⅰ、食生活論
後期：臨床栄養管理論、給食経営管理論Ⅱ、臨床栄養学演習、栄養学

3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（0）名、その他（10）名

4. 自己評価：前期は週当たり3講義1実習の計9コマを担当し、そのうち3講義は新規に担当する講義であった。継続担当の臨床栄養学実習Ⅰも改善点が多々あり、勤務時間の大半を授業準備に充てた。その過程で、科目間の関連内容に習熟することが出来、授業運営についても要領を掴むことが出来た。また、限られた授業時間内で学生のニーズを満たすために、専門知識の学習と並行し、附属図書館を利用し教授法に関する自己学習を行った。各曜日に1~2コマずつ講義があったため、体調管理には十二分に配慮した。その甲斐もあり、授業評価アンケートではこれまでの自身のアンケート結果の中で最高評価を受けることが出来、満足のいく結果となった。

後期では週当たり4講義計4コマの担当となり、新規担当は2講義であった。臨床栄養学の関連講義については前述のように一定の手ごたえを得ることが出来たが、特に給食経営管理論Ⅱについては元々不慣れな分野が多く（経営戦略、会計、関連法規など）、学生に理解を促すのに力量不足を感じる事が多数あった。また、講義以外に学年担任として臨地・校外実習の事前指導を担当し、学生が安心して学外実習に臨めるよう各種準備を行った。学科の先生方及び教育研究支援課のご担当者様に多くのご協力をいただき、無事に全準備工程を終えることが出来た。現在は2月下旬からの実習開始を控え、必要に応じて個別指導を行っており、一定の役割は果たせたと感じている。

研究領域

1. 小児生活習慣病の早期発見・早期予防に関する臨床疫学的研究
2. 2型糖尿病患者の生活習慣療法に関する臨床疫学的研究

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

1) Kodama S, Morikawa S, Horikawa C, Ishii D, Fujihara K, Yamamoto M, Osawa T, Kitazawa M, Yamada T, Kato K, Tanaka S, Sone H. Effect of family-oriented diabetes programs on glycemic control: A meta-analysis. Family Practice. 2018 Nov 12.

2. 学会発表

1) Y. Takeda, K. Fujihara, S.Y. Morikawa, C. Horikawa, M. Hatta, D. Ishii, R. Hirasawa, Y. Yachi, H. Sone. Dietary Energy Density (DED) Is Significantly Associated with Obesity in Japanese Patients with Type 2 Diabetes Mellitus (T2DM) 78th American Diabetes Association Scientific Sessions, USA, June 23, 2018

2) 森川咲子, 石黒創, 堀川千嘉, 石井大, 武田安永, 治田麻里子, 松林泰弘, 山田貴穂, 藤原和哉, 曾根博仁. 青少年の心肺持久力及び筋力と代謝異常リスクの関連. 第37回日本臨床運動療法学会学術集会. 東京. 9月

3) 川東美菜, 中橋乙起, 森川咲子, 山本浩範. CYP24A1 のスプライシングバリエント

体 (CYP24A1-SV) は正常ラットの肝臓において高発現している. 第 65 回日本栄養改善学会学術総会. 新潟. 9 月

3. 知的財産権の出願・取得状況：なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) 科学研究費 (若手研究)：青年期の食習慣や睡眠習慣が健康状態に及ぼす影響の解明、交付、代表
- 2) 日本糖尿病協会若手研究者助成：2 型糖尿病患者の性格特性が治療アドヒアランス及び治療アウトカムに与える影響の検討、採択、代表

自己評価： 外部研究資金を複数獲得することが出来、データ解析を行うための環境構築をすることが出来た。得られた研究成果の一部については、国際誌掲載に向けて原著論文の投稿準備を進めているところであり、年度内の完成を目標としている。来年度は研究指導を控えており、学生指導のための環境整備と更なる研究力の向上が求められる。

大学内運営

食物栄養学科 3 年生担任、各学年チューター、平成 30 年度新入生宿泊セミナー準備実行委員、チーム医療促進委員会委員 (管理栄養士)、AO 入試及び一般推薦入試の面接担当、大学入試センター試験監督 (タイムキーパー)、オープンキャンパス模擬授業担当、食物栄養学科オリジナル弁当開発相談役、次年度臨地・校外実習事前指導担当を務めた。

社会貢献

原著論文査読 (日本栄養・食糧学会誌 1 報)

日本病態栄養学会学会員、日本栄養食糧学会学会員、日本栄養改善学会学会員

個人情報

1. 氏名：亀村 典生
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：食品加工学
2. 学部授業担当科目
前期：食品加工学、食品機能学
後期：食品加工学実習（2クラス）、栄養教育論演習、食品加工学特論
大学院
前期：
後期：
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（5）名、大学院生：修士（）名
4. 自己評価：食品加工学の分野を担当し、基礎分野と応用分野を担当した。食品加工学、食品機能学、栄養教育論演習においては、学生さんが一つずつ、ステップを踏んで理解できるように、教科書から国家試験の過去問題を用いて講義を行った。食品加工学実習では国家試験や将来の就職に向けて、より実践が身につくように、様々な食品の加工を学べるように実習を行った。

研究領域

1. アレルギー学、食品加工学

平成 30 年度分 研究業績一覧

1. 論文

1. Ae M, Imura N, Inubushi T, Abe S, Yusuke B, Sugimoto M, Kamemura N. Biphenyl-induced cytotoxicity is mediated by an increase in intracellular Zn⁺². Drug Chem Toxicol. 11:1-6.
2. Kamemura N. Butylated hydroxytoluene, a food additive, modulates membrane potential and increases the susceptibility of rat thymocytes to oxidative stress. Computational Toxicology. 6:32-38.

2. 学会発表

なし

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

科学研究費補助金交付、若手研究「食品添加物の細胞毒性試験による新しい毒性評価法の確立」

自己評価：

食品添加物の安全性に関して研究を行った。ジブチルヒドロキシトルエン（BHT）は酸化防止剤として、ドックフードなどに使用されている。そこで BHT の細胞毒性を調べたところ、細胞内のカルシウムと亜鉛を過度に上昇させることにより、細胞内の膜電位に異常を起こさせ、アポトーシスとは異なる細胞死を誘導することを明らかにした。ビフ

エニルはポストハーベスト農薬とされ使用されているが、その細胞毒性に関して調べた。ビフェニルは細胞内の亜鉛を増加させることにより、細胞毒性を誘導することを明らかにした。

大学内運営

なし

社会貢献

なし

個人情報

1. 氏名：川東 美菜
2. 職位：助教

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 栄養学
2. 学部授業担当科目
前期：栄養学実験
後期：
大学院
前期：
後期：
3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文（0）名、大学院生：修士（0）名
4. 自己評価：前期の栄養学実験以外は学生実習の助手の仕事をしていた。初年度であったため分からないことが多かったが、来年度は今年の反省を踏まえて頑張りたい。

研究領域

1. ビタミンD、カルシウム代謝

平成 30 年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) 「食後の下肢筋肉への電気刺激が血糖値およびインスリン分泌に及ぼす影響」(H30. 9)

2. 学会発表

- 1) 「食後血糖値およびインスリン分泌抑制を目的とした筋肉への電気刺激の有効性の検討」(H30. 5)
- 2) 「CYP24A1 のスプライシングバリエント体 (CYP24A1-SV) は正常ラットの肝臓において高発現している。」(H30. 9)

3. 知的財産権の出願・取得状況

- 1)

4. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

- 1) 科学研究費（若手）
- 2) 特色ある教育・研究

自己評価：この1年、実験結果に一喜一憂しながら研究に励んだ。来年度は今年の結果を踏まえてさらに追及していく必要がある。

大学内運営

社会貢献

文理大学考案健康レシピ（全国健康保険協会）

第3節 児童学科

個人情報

1. 氏名：河口 雅子
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：音楽科、音楽科教育法
2. 学部授業担当科目
前期：音楽A（2クラス）、音楽②（2クラス）、卒業研究
後期：音楽科教育法I（2クラス）、音楽①（2クラス）、専門ゼミナール、卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生：14名（卒業論文、卒業演奏）
4. 自己評価（工夫、反省）

学生自らが音楽科の特性や独自性を理解し、音楽の楽しさや喜び、一体感ある授業のあり方を体感できるために、授業内容をより一層研究し、実践した。毎時間終了後には、「フィードバックシート」で自己の振り返りと学びを確認させ、その内容を次時の授業に活かせるよう心がけた。

①「音楽①」「音楽②」「音楽A」では、授業を「基礎理論」「演習」「実技」の3構成に組み立て、「基礎理論」では音楽の基礎理論の理解するための手立てを工夫し、授業後半の確認作業や毎時間の確認テストの実施で定着を図った。また、「演習」や「実技」では、音楽の感性を磨くという視点からアクティブラーニングの授業を通して、楽曲の分析から曲想表現に結びつける等の内容構成を実施し、感性を高める授業の展開を図った。こうしたことから、学生自らが授業を通して表現方法を体感できるようになり、一体感を持った授業の展開が図れるようになった。また、常に、子どもたちの発する声や表情、心が見える教師になってほしいという視点で授業を実践したが、自分を表現する楽しさや喜びを体感できる学生が増え、表現の真の意味の理解が図れるようになってきた。

②教員採用試験に向けては、ゼミはもちろんのこと、学科全体での取り組みのおかげで、1次採用の勉強、面接指導、論文指導、実技指導等が充実し、昨年度より小学校では現役合格者数が過去最高となった。（23名）

③3回目のゼミの企画運営によるコンサートでは、個人演奏、ゼミ生（3年・4年）による演奏、150名の児童学科全体の合唱等、多彩な演奏の中で、昨年度に引き続き、感動が広がったコンサートを創り上げることができた。

研究領域

- 1 専門研究領域
「言葉・音を音楽にする感性へのアプローチ」「自己表現力の創造」
2. 研究課題及び概要

音楽にまつわる人の認識、思考や感情のメカニズムやプロセスから、旋律、リズム、響き、聴取という要素がいかに関わる中で普遍的認知過程を持ち、感情に繋がっていくかを一つひとつの領域で研究している。言葉や音が人の心の中で豊かな音楽を創り出すまでに至るためには、感性を磨くことが重要と考える。こうした研究を基盤とし、幼児期から児童期に係るそれぞれの発達段階に於いてどう感性を磨いていくか、楽しさや美しさを探究する子どもたちの学びをどう創造するか、どう表現活動に結び付けていくか、こうした点について、様々な教材を収集・選択し、研究を深めてきた。合唱指導においては、大学での授業及びゼミ、地域で指導している合唱団において、自己表現による人間力の創造をテーマとした演奏を目指している。

3. 平成 30 年度分 研究業績一覧
4. 知的財産権の出願・取得状況：特になし
5. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：特になし
6. 自己評価

「言葉・音を音楽にする感性へのアプローチ」「自己表現力の創造」をテーマとして、研究を続けているが、今までに実践・研究してきたものを纏めさらにテーマに結びつけていきたいと考えている。

大学内運営

1. 活動報告（委員会、担任等）
児童学科長

社会貢献

1. 学会への貢献
中四国教育学会会員
2. 地域社会への貢献
徳島県教育委員会教育委員
芸術文化・文化遺産に関する事業（徳島県教育委員会）講師
吉野川市市民コンサート実行委員
女声合唱団「Vivace みやび」指導者
徳島県合唱祭出演 吉野川市文化祭出演 西麻植地区文化祭出演
第 71 回全日本合唱コンクール徳島県大会（金賞）四国大会・香川県（銀賞）
「与謝野晶子講演会 -われ死にたもふことなかれ-」賛助出演

個人情報

1. 氏名：三橋 謙一郎
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：教育方法論、生徒指導、保育方法論
2. 学部授業担当科目
前期：初等教育方法論、生徒指導（進路指導を含む）、保育援助論、保育方法演習
後期：教育方法論、教職概論、保育・教職実践演習（幼・小）、保育方法演習、専門ゼミナール
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（5）名、その他（8）名
4. 自己評価
 - *授業では具体的な実践例を取り上げながら、理論的な内容をわかりやすく説明するように心掛けた。
 - *授業での私語対策として、学生の反応に応じて説明の仕方を変えるなどの工夫に努めた。
 - *教職科目の授業に関しては、教員採用試験との関連を考慮し、教材の精選に工夫を凝らした。

研究領域

1. 専門研究領域：教育学、教育方法学、幼児教育方法学、臨床教育学
2. 研究課題及び概要
 - ・教育的タクトのあり方に関する実証的研究：理論に支えられた教育的タクトのあり方を、現場の授業実践の参観＝分析に基づき、具体的・実践的に追求していく。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
 - 【著書】キーワードで拓く新しい特別活動・共・東洋館出版・平成31年3月
 - 【学会発表】
演劇的知の教育方法学的検討（5）—導入の意義および課題を中心として—・共・平成30年3月日本教育方法学会ラウンドテーブル①（於：和歌山大学）
4. 自己評価
 - ・広島県内、高知県内、徳島県内の現場の授業実践を中心に、授業等の分析＝検討を行い、上述の研究課題を達成するために、研究成果を発刊することで一定の成果が得られたように思う。

大学内運営

1. 活動報告
 - ① 人間生活学専攻科長
 - ② 大学院人間生活学研究科児童学専攻主任
 - ③ 全学教職課程委員会委員長
 - ④ 全学教員養成対策委員会委員
 - ⑤ 人間生活学部教員養成推進委員会委員長
 - ⑥ 人間生活学部教育研究委員会委員長
 - ⑦ 児童学科1年クラス担任
 - ⑧ 児童学科1・2・3・4年チューター等（24名）

社会貢献

1. 学会等への貢献

- ① 日本教育方法学会理事
- ② 日本特別活動学会理事
- ③ 現代学習集団授業研究会副会長
- ④ 全国私立大学教職課程研究連絡協議会カリキュラム部会委員

2. 地域社会への貢献

- ① 四国地区大学人権教育研究協議会会長
- ② 徳島県大学人権教育研究協議会会長
- ③ 徳島県小松島市学校再編有識者会議会長
- ⑤ 徳島市子ども・子育て会議委員
- ⑥ 平成 30 年度教員免許状更新講習講師【必修科目「子どもの変化についての理解ー子どもの生活の変化を踏まえた課題ー」選択科目「生徒指導の充実」、選択科目「保育指導と気になる行動の理解」】
- ⑦ 平成 30 年度 10 年次教員経験者研修会講師【選択科目「幼児の心理と教育方法」】
- ⑧ 平成 30 年度出張講義講師【「笑顔の効用」（於：徳島市立新町小学校）】

個人情報

1. 氏名：岡 直樹
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：学校心理学
2. 学部授業担当科目
前期：心理学 A、教育原理
後期：保育相談支援、教育原理、道徳教育、社会心理学
3. 直接に指導した学生：子どもの学び支援センターでの指導 19 名。
4. 自己評価：授業においては、グループ学習の機会を多く設け、受け身の学習にならないよう配慮した。子どもの学び支援センター(きらきらルーム)において、学習相談の実習を学生に行わせ、その実習に対するケース検討会なども開きながら、学生の心理教育的支援の実践力を育成している。

研究領域

1. 専門研究領域：認知心理学、学校心理学
2. 研究課題及び概要
 - ①記憶や学習についてのメカニズムに関する基礎的研究
 - ②基礎的研究から得られた知見に基づく学習指導法や学習方法についての応用的研究
 - ③学習面の心理教育支援、特に認知カウンセリングに関する実践的研究
3. 平成 30 年度分研究業績一覧
【著書】
 - ①岡 直樹 (2018) 教育分野の説明実践 山本博樹(編著)公認心理師のための説明実践の心理学, ナカニシヤ出版, Pp131-140.【論文】
 - ①小澤郁美・柏原志保・岡 直樹(2018) 個別学習支援ケースレポートの見本作成とその効果, 学校教育実践学研究, 24, 3-10.
 - ②柏原志保・小澤郁美・岡 直樹(2018) 小学生の算数における学習観, 自己効力感および学習方略に関する「改訂版算数アンケート」の作成, 学校教育実践学研究, 24, 11-18.
 - ③細川 真・岡 直樹(2018) 計算や文章題解決に困難がある児童への学習支援 : 外的リソース方略を用いて, 学校教育実践学研究, 24, 19-26.
 - ④田中 紗枝子・福屋いずみ・細川 真・岡 直樹(2018) 認知カウンセリングの経験が教職を目指す大学生に及ぼす影響 : 2014 年度後期・2015 年度前期参加学生の回答の変化から, 学校教育実践学研究, 24, 33-38.
 - ⑤中村 涼・岡 直樹(2018) にこにこ広島ルームにおける学習相談の実際 : 認知カウンセリングの今日的課題, 学校教育実践学研究, 24, 39-46.【学会発表】
 - ①Kashihara, S., & Oka, N. The changes of the university student's attitude towards education through the experience of cognitive counseling: A case study of cognitive counseling for preservice elementary teacher. The 40th International School Psychology Association Conference. 2018 年 7 月 東京成徳大学 (ポスター発表)
 - ②Ozawa, I., Nakagoshi, T., & Oka, N Personal tutoring for a elementary school

student who has difficulty with solving mathematics by cognitive counseling.
The 40th International School Psychology Association Conference. 2018年7月 東京成徳大学 (ポスター発表)

③岡 直樹・柏原志保・福永莉央 振り返りの深さと学習方略が新たな内容の学習に及ぼす効果 日本心理学会第82回大会 2018年9月 東北大学(ポスター発表)

4. 知的財産権の出願・取得状況：なし

5. 平成30年度分科学研究費補助金・各種助成金の申請・交付状況

① 科研費(基盤研究(C))「コンセプトマップを用いたアセスメント教育プログラムの構築－看護知識の構造化－」研究分担者

6. 自己評価

研究課題については、特に応用的研究と実践研究にウエイトをおいて研究を継続し、論文投稿や学会発表を行ってきた。また、今年度より本学内において学び支援活動(きらきらルーム)を開始した。事例研究に取り組むとともに、参加児童、保護者および大学生に実施したアンケート等を分析し、この取り組みについて検証し、支援方法の改善策について検討していく。

大学内運営

① 自己点検・自己評価委員会委員

② 児童学科3年生担任、1-2年生チューター

社会貢献

① 日本心理学会 専門別議員(第1部門)

② 一般社団法人 学校心理士認定運営機構 学校心理士資格認定委員会委員長

③ 一般社団法人 学校心理士認定運営機構 理事

④ 日本学校心理士会副会長

⑤ 学校心理学研究 査読者

⑥ 日本学校心理学会 理事

個人情報

1. 氏名：松本 有貴
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：教育心理学、児童心理学、臨床学校心理学
2. 学部授業担当科目
前期：教育心理学、保育の心理学Ⅰ、保育者論、保育内容（言葉）A、卒業研究
後期：児童心理学、教育相談（カウンセリングを含む）、保育の心理学Ⅱ
保育内容（言葉）B、専門ゼミナール、卒業研究
3. 直接に指導した学部学生：卒業論文（4年生ゼミナール3名・3年生ゼミナール6名）
直接指導した大学院学生：博士（大阪大学大学院連合小児発達学研究科2名）
4. 自己評価
一斉講義とともにグループ討論・課題やロールプレイを用いた演習を行い、学生の主体的学修を促した。ゲスト講師として小学校教諭を招待し学生の教職への意欲を高めた。ICTを取り入れた授業の開発が課題である。

研究領域

1. 専門研究領域：ユニバーサル予防教育、社会性と情動の学習(SEL)、認知行動療法
2. 研究課題及び概要
 - ① 認知行動療法（CBT）に基づく持続可能な学校予防教育の効果比較研究
 - ② 不登校の改善に資する保護者のメンタルヘルスとQOL（生活の質）の向上の研究
 - ③ 教員・指導員による発達障害の不安へのCBTを用いた支援の研究
3. 平成30年度分 研究業績一覧
[論文・著書]
 - ① Mio, M. & Matsumoto, Y. (2018). A single-session Universal Mental Health Promotion Program in Japanese schools: A pilot study. SOCIAL BEHAVIOR AND PERSONALITY, 1727-1744.
<https://doi.org/10.2224/sbp.7157>
 - ② ちばエコチル調査つうしん 2018 9月号 キット先生の豊かな心をはぐくむ子育て「思いやりの心をそだてたい」2019 3月号 キット先生の豊かな心をはぐくむ子育て「子どもの成長を応援したい」千葉大学予防センター
 - ③ 子どもの居場所と居心地のよさ（2018）上中修編 Professional をめざす保育者論（pp. 88-91）教育情報出版
 - ④ 久米紗生・松本有貴（2018）. 保育者の「気になる子」の早期発見・早期支援のために一簡易質問紙によるスクリーニング（SDQ）の有効性の検討— 徳島文理大学研究紀要 第96号 135-141.
 - ⑤ 南谷則子・松本有貴（2018）. 不登校の子どもを抱える親支援プログラムのファシリテーター養成の試み—認知行動療法のグループプログラムの効果的な担い手として—徳島文理大学研究紀要 第96号 143-149.
 - ⑥ 松本有貴・石本雄真・島寄仁恵・瀧澤悠・西田千寿子（2019）子どもとつながる学校心理教育 せせらぎ出版
 - ⑦ 松本有貴（2019）子ども心理プログラムワークブック 1「ミニッツ」2「ないす」 原田印刷出版株式会社
[学会発表]
 - ① 松本（2018）今後の展望 第4回トリプルPジャパン研究会わかやま大会 地域で支える子育てのヒント—親が変われば、子どもは変わる—

- ② 松本・石本・鈴木・渡辺 (2018) SEL が育む非認知能力—何を育みどのよう
に子どもたちの幸福に貢献するのか— シンポジウム 日本教育心理学会
第 60 回総会 慶應義塾大学日吉キャンパス独立館
 - ③ Kato & Matsumoto. (2018) Examination of effects on a universal
preventive program based on Brief Cognitive Behavioral Therapy with
mindfulness meditation for mental health of junior high school students
in Japan. 第 40 回国際学校心理学会 (ISPA2018 Tokyo). 東京成徳大学東京
キャンパス
 - ④ 三尾・松本 (2018) 心理予防教育 OKS の特性不安に与える影響 日本 SEL
研究会第 9 回大会 早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館
4. 知的財産権の出願・取得状況：特になし
5. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金
- 科研基盤 (C) 16K04343 (H28・29・30)
 - 科研基盤 (C) 18K02440 (H30・31・32)
 - 申請 科研基盤 (C)
5. 自己評価
- 主研究者として最終年度科研の研究計画を達成し、まとめを書籍化した。また、小
学校で使える子ども心理プログラムのワークブックを書籍化した。英語論文:A
Neuroscience-Informed Brief Cognitive Behavioral Therapy (N-BCBT) Program in
a Japanese School Setting を投稿した (審査中)。
論文投稿、学会発表に積極的に取り組むことを来年度の課題としたい。

大学内運営

- ① セクハラ防止委員会 相談員
- ② 人間生活学部学生指導委員会 委員
- ③ 全学共通教育センター学習支援アドバイザー
- ④ 児童学科 2 年生担任、チューター (24 名)

社会貢献

- ① 日本 S E L 学会副代表理事
- ② パスウェイズ・ジャパン代表
- ③ クイーンズランド大学認定トリプル P プログラムトレーナー
- ④ Journal of Evaluation and Research in Education 査読者
- ⑤ 一般社団法人日本レジリエンス教育研修センター理事
- ⑥ 理化学研究所脳神経科学研究センター親和性社会行動研究チーム研究協力者
- ⑦ 小学校 (大阪府 2 校・和歌山県 1 校) における教職員研修講師

個人情報

1. 氏名：岡山 千賀子
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：児童学・子育て支援
2. 学部授業担当科目

前期：児童学原論、レクリエーション活動援助法Ⅰ、家庭科教育法Ⅰ

レクリエーション概論、レクリエーション論、総合科目（ボランティア）

後期：家庭、レクリエーション活動援助法Ⅱ、レクリエーション実技①、レクリエーション実技②、専門ゼミナール、スポーツ・レクリエーション特講（集中）

3. 直接に研究指導した学部学生： その他（11）名
4. 自己評価

*学生指導：2年生学年主任として教育に尽力した。*就職対策：4年生6名に就職指導を行った。*採用試験対策：過去の試験問題や実技について適宜授業内で紹介し、教科では、実際の試験問題に取り組む時間を設定した。保育・教育対策講座（3・4年生対象）を担当した。*授業実践：実践力を身に付けるために、積極的にボランティア活動を推進した。総合科目（ボランティア）の担当として、6学科140余名（看護学科含む）の学生をボランティア活動に参加させた。また、事例解釈や実技を授業に取り入れたり、保育現場への見学・実践等を取り入れたりした。*最新の情報と資料を準備し、適宜ビデオやメディアを取り入れた。*アクティブラーニング：自著した「講義ノート」を活用し、その中で古文や新聞記事などを取り入れ、学生に自ら取り組み、考える力を付けるよう努力した。*児童研究「with children」担当、大学祭で「子ども広場」開催。*「次世代育成事業 おぎやつと21への学生参画指導」、*地域交流センターと連携し、イベント（イルミネーションフェスティバル等）の企画・運営を行った。
*レクリエーション公認資格課程認定校講座担当として、資格取得申請に関する指導をした。「スポーツ・レクリエーション指導者」資格課程の導入と指導を行った。平成30年度は、50名の学生が受講した。

研究領域

1. 専門研究領域：社会科学分野・児童学・家族領域
2. 研究課題及び概要；
レクリエーション・インストラクター資格・スポーツ・レクリエーション指導者資格者に必要な技術と知識に関する研究。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
・【修士論文】 「子育て支援員と親の相互認識の実態についての一考察」提出
・【その他】 「子育て支援員」へのインタビュー調査の実施。
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況： なし
5. 自己評価（成果、反省）

本年度も、日本レクリエーション協会からの依頼で新教育課程の講習会および全国公認資格認定委員の活動に取り組んだ。また、新資格の「スポーツ・レクリエーション指導者」資格の3学科（児童学科・人間福祉学科・保育科）認可、設置ができた。通信制大学院社会福祉研究科修士課程を平成31年3月に修了した。また、平成30年度全国スポーツ指導者功労賞（文部科学省）受賞。

大学内運営

1 活動報告

- ① 県内外高校へ出張講義・遠隔授業
- ② O.C.委員・高校生来学対応委員（学科内）
- ③ 児童学科2年生学年主任・担任79名、児童学科1年チューター3名・2年チューター11名・3年チューター5名・4年チューター6名
- ④ 学科内ボランティア推進係
- ⑤ 地域連携センターへのボランティア協力

社会貢献

1 学会等への貢献:

- ① 日本レクリエーション協会公認指導者資格課程認定校連絡協議会 監事
同協会全国公認資格認定委員
- ② 徳島県レクリエーション協会常務理事・組織部長、(レクリエーション・コーディネーター)
- ③ 日本消費者教育学会会員（中・四国支部役員）

2 地域社会への貢献:

- ① 徳島県教育委員会生涯学習政策課、「学校を核とした地域の教育力強化推進委員会」、委員長
- ② 徳島県立近代美術館協議会委員
- ③ 徳島県県民環境部人権教育啓発推進委員
- ④ 徳島県保健福祉部長寿こども政策局、「子育て応援の匠」
- ⑤ 徳島県立男女共同参画交流センター、「育児のポイント講座」講師
- ⑥ 徳島県レクリエーション協会、公認指導者（徳島県シルバー大学院講座講師）
- ⑦ 徳島県立総合大学校まなび一あ登録講師
- ⑧ 徳島市身体障がい者連合会評議員
- ⑨ 徳島県ウォークラリー実行委員会委員
- ⑩ 社会福祉法人 ハート福祉会 評議員
- ⑪ 社会福祉法人 悠林舎 福祉サービス評価委員
- * その他、県・市町村における子育て支援、放課後児童健全育成指導等に関する講演会活動など

個人情報

1. 氏名：津守 美鈴
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：国語科、国語科教育法
2. 学部授業担当科目
前期：国語科教育法Ⅰ、日本語の語法、文学・文学A、児童文学
後期：国語（書写を含む）、保育・教職実践演習、専門ゼミナール
卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（7）名
4. 自己評価

学生がより主体的に学修できるよう参加型を意識した授業づくりに努めたが、その分教材研究と授業準備に追われた感があった。より参加型で主体的な学修ができる授業づくりに努めたい。教員採用試験の講座については、ゼミ生だけでなく幼・保、小学校教員や他学科の養護教諭をめざす学生等に対し、休日等の時間外にも擬授業練習や論文指導をするなど、全力で指導・支援をしたおかげで、近年にない合格者を出すことができた。来年度は、学生の夢の実現に向けて、方法改善に努めさらに支援をしていきたい。また、卒論指導については、昨年度から引き続き3年生からテーマの確定と章立てをさせたり、卒業研究に関してしっかりとイメージや意欲を持たせたりするため、卒論中間及び最終発表会を実施し、改善に努めた。

研究領域

1. 専門研究領域：教育方法、国語科教育
2. 研究課題及び概要
「主体的に対話的な深い学修のできる大学授業の可能性」
授業において協働して学修できる方法について、本学のいくつかの授業で試行してみるなど、実践的に可能性をさぐってきた。また、「知識構成型ジグソー法」を用いて、その効果を実践的に検証してみたが、時間を十分につかえないと効果には結びつかないと感じた。今後は、全国的に理論・実践研究している研究会等に参加させていただき、知識や技能の向上にも努めていきたい。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
4. 知的財産権の出願・取得状況：なし
5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：なし
6. 自己評価
教育領域の自己評価にも記述したとおり、どうしても正課の授業や正課外の講座等、担任・チューター生への学生指導に費やす時間と労力が非常に大きいため、じっくりと研究に取り組むことが困難な状況がある。

大学内運営

- 1 活動報告
 - ① 児童学科3年Aクラス担任26名、1年チューター3名、2年チューター3名、3年チューター9名、4年チューター10名
 - ② 入学試験委員
 - ③ 入試作問委員
 - ④ 教員養成対策委員会委員
 - ⑤ 書道部顧問

社会貢献

- 1 学会等への貢献
国語教育実践理論研究会（KZ R）会員
- 2 地域社会への貢献
 - ① 平成30年度用国土緑化運動・育樹運動ポスター原画・標語コンクール標語部門
審査員
 - ② 徳島県平成30年度教科用図書選定審議会委員
 - ③ 徳島県第4回「平和作文コンクール」審査員
 - ④ 徳島県子どもの読書活動推進協議会委員長
 - ⑤ 徳島新聞社主催「徳島県新聞感想文コンクール」審査員
 - ⑥ 小松島市教育委員会主催「第60回ほんわかい」講師

個人情報

1. 氏名：西原 正純
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：生活科、生活科教育法、社会科、社会科教育法
2. 学部授業担当科目
前期：生活科教育法（児童 2 年）、教育方法技術論（心理 3 年他）、栄養情報処理（短大）
後期：教育方法技術論（看護他）、生活科（児童 1 年）、専門ゼミナール（児童 3 年）、社会科教育法（児童 3 年）
- 3・直接研究指導した学部学生：卒業論文（12）名
4. 自己評価

すべての授業で GoogleClassroom を活用した。昨年度は、授業で使うワークシートや資料を電子媒体で送ったり、課題の提出などもスムーズにできたりすることなどを体験させることが主であった。しかし、今年度は、授業の資料を事前に送付することで、授業の予習や事前学習ができるように課題を出した。反転授業とまではいかないが、授業の中身をより充実させるために、いっそう GoogleClassroom の活用の幅を広げていきたい。まだまだ、スマートフォンや PC などの情報機器活用に不慣れな学生もいるが、不慣れでは済まされない時代に「生きていく力」を育てていきたい。

一昨年度活用していた Google フォームを、今年度は模擬授業の評価アンケートで活用した。授業で学んだことを共有し、個人の資産を共有の財産にしていけるように積極的に活用した。

授業の形が、一方的に伝える講義型の授業にならないように心掛けた。授業開始時に授業のメニューを提示して授業の見通しをもたせるようにし、電子黒板を活用して授業の内容を視覚化・焦点化した。また、対話的な学びができるようにホワイトボードを活用し共有化を図った。授業の視覚化・焦点化・共有化は、授業のユニバーサルデザイン化の基本である。次年度も、引き続きユニバーサルデザイン化された授業になるよう授業の内容を充実させていきたい。また、新学習指導要領で示されているアクティブ・ラーニングという言葉に踊らされないよう「主体的で対話的な深い学び」をめざして授業改革をしていきたい。

研究領域

1. 専門研究領域：教科教育（生活科、社会科）、情報教育
2. 研究課題及び概要

「ICT機器を活用した授業のユニバーサルデザイン化と情報活用能力の育成」

授業のユニバーサルデザイン化は、誰もがわかるできる授業をめざしている。学校現場の ICT 機器整備環境は、まだまだ不十分ではあるが、与えられた環境の中で効果的に ICT 機器を活用することで授業のユニバーサルデザイン化を図っていきたい。また、それぞれの教科の特性に応じた情報活用能力の育成についても研究を深めていきたい。

3. 平成 30 年度分 研究業績一覧：なし

4. 知的財産権の出願・取得状況：なし
5. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：；なし
6. 自己評価
研究課題に対する取り組みを形にあらわすことができていない。次年度こそ、研究業績として書けるよう努力したい。

大学内運営

1. 活動報告（委員会委員、担任等）
 - ① 宿泊セミナー運営委員
学生自主防災会担当委員
 - ② 児童学科 4 年担任（45 名）
 - ③ チューター（29 名） 1 年生（2）名 2 年生（2）名 3 年生（10）名 4 年生（15）名

社会貢献

1. 学会への貢献
2. 学校への貢献
 - ① 阿波市一条小学校校内研修「授業のユニバーサルデザイン化」講師
 - ② 小松島市南小松島小学校プログラミング体験授業 支援
 - ③ 徳島県阿波市学力向上推進講演会 講師
3. 地域への貢献

個人情報

- 1 氏名：仁宇 暁子
- 2 職位：准教授

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：図画工作科教育法、図画工作、美術A
- 2 学部授業担当科目
前期：図画工作科教育法2年、保育内容〈表現B〉2年、図画工作①1年
後期：図画工作②1年、専門ゼミナール3年、美術A1年2年、卒業研究4年
- 3 直接に研究指導した学部学生：12名（卒業制作、卒業論文指導）、その他9名
- 4 自己評価：図画工作科教育法では、子ども一人ひとりを生かす模擬授業を、保育内容〈表現B〉では、子どもの思いを汲み上げる模擬保育の指導を、アクティブラーニングの手法を取り入れ、誰もが主体的に活動し、感性を揺さぶる授業を行った。また、図画工作科①②では、幼稚園や保育士の採用試験に必要な写実的な鉛筆デッサンをはじめとした基礎基本の技能や知識を徹底して指導した。今後、さらにICTを効果的に活用した授業の振り返りを行う必要がある。

研究領域

- 1 専門研究領域：絵画（抽象絵画によるテンペラ画の研究、インスタレーション、石膏デッサン研究）
- 2 研究課題及び概要：
 - ・創造の一過程としての石膏像の可能性
 - ・桜の花びらと藍染とキャンバス作品を使って「命の尊さ」のインスタレーション表現。
 - ・図画工作科における、感性トレーニングによる形と子どもの心との結びつき
- 3 平成30年度分研究業績一覧
 - 【個展開催】：「仁宇暁子サク・ラ イノチリーズV展」御所山王子現代アートスペース、第66回形象派美術協会展出品。
 - 【論文】：創造の一過程である石膏デッサンの可能性—感性的石膏デッサンは絵を変容させる—
 - 【著書】：「形象」に石膏デッサンと絵画展批評の原稿を掲載。
 - 【講演】：「石膏デッサンはアンチエイジング」を広島県呉市。「石膏デッサンは創造の源」と「音楽と美術のコラボレーションによる感性トレーニング」を国立台北教育大学で講演。
 - 【その他】石膏デッサンとテンペラのワークショップ。（広島県呉市、3泊4日、台湾省台北市6日間）
- 4 自己評価（成果、反省）：「イノチシリーズV」のインスタレーション個展ほぼ成功した。授業と研究に共通する課題「石膏デッサンと創造との関係」を論文にまとめた。さらに、美術教育と感性トレーニングを論文か本に記す必要がある。

大学内運営

- 1 活動報告（委員会委員、担任等）
 - 1 学生支援委員会
 - 2 児童学科オープンキャンパス（前半）担当
 - 3 広報担当
 - 4 児童学科4年生担任96名、1年生チューター3名、2年生2名、3年生チューター7名、4年生チューター12名

社会貢献

1 学会への貢献：

日本形象派美術協会 審査委員長並びに研修委員長。第66回形象派展（大阪市立美術館）の審査を行った。年に2回の絵画のセミナーの代表として、企画・実習指導で成果を挙げた。

2 学校への貢献：

- 1 国立台北教育大学から招聘され講演と実技指導を行った。
- 2 全国教育美術展 地方審査委員を務めた。
- 3 徳島県近代美術館の水彩画講座（中学生以上を対象に）の講師を務めた。
- 4 高知県立宿毛高校、徳島市加茂南幼稚園で出張講義を行った。
- 5 とくしま動物園の写生大会など様々な学校関係の展覧会審査員を務めた。

3 地域への貢献：

- 1 徳島市の病院で「発達障害や不登校」など困り感のある中・高生や成人やその保護者のための相談活動を月1回行った。
- 2 三好市の病院で2歳から100歳までに「元気になる絵画ワークショップ」を月1回行った。
- 3 徳島市の公民館で絵画ワークショップを月2回開催した。

個人情報

1. 氏名：川端 恵子
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 幼児教育
2. 学部授業担当科目
前期： 保育内容（環境）A、保育内容（人間関係）A、児童文化、事前事後指導（保育科）
後期： 保育内容（環境）B、保育内容（人間関係）B、専門ゼミナール
保育・教職実践演習、保育内容（人間関係）A（保育科）
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（1）名、その他（14）名
4. 自己評価
 - ・今年度は昨年度告示された「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が実施の年度に当たるため、特に新たに記載された部分やその意味について説明し、理解できるように留意した。
 - ・学生の理解度を考慮したり応答的に授業を進めたりすることに配慮した。
 - ・ビデオ・スライドなどを活用し視覚を通して学ぶことや、グループで学習し発表する機会を設けることで、楽しい授業を目指した。
 - ・幼稚園の現場での経験を生かし、実際の幼児の姿や事例を多く取り入れ理論と関連付けた授業を展開することに努めた。
 - ・特に、4年生の授業では実践的な内容を中心とし、保育現場で応用できるよう配慮するとともに、保育の現場で求められる保育者としての資質を高めることに意識をおいて授業内容や演習内容に留意した。
 - ・理論面においては新たに学ぶことや研究すべき事項も多々あった。教材研究は私自身の向上につながっており、次年度にもより良い授業を目指して取り組んでいきたい。

研究領域

1. 専門研究領域：保育内容
2. 研究課題及び概要
 - ①「幼児期における道徳性・規範意識の芽生えについて」

近年の生活環境の変化が、子どもの成長・発達においてどのように影響を及ぼしているかについて研究を深めていきたい。とりわけ、道徳性・規範意識等が培われることについては、担当科目の保育内容（人間関係）と重なり興味深く感じている部分であり、今後研究を深めたいと考えている。
 - ② 今年度から実施されている「新幼稚園教育要領」等について理解を深め、各幼児教育施設での教育・保育の在り方について研究していきたい。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
4. 知的財産権の出願・取得状況： なし
5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況： なし
6. 自己評価

幼児期における道徳性・規範意識の芽生えについて、著名な研究者の考えを参考にしながら私自身の実践を基にした理論を深め、学生への指導に生かしていきたい。今年度は新たな「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が実施の年度であったため、特に力を入れて授業に臨んだ。その際、学会や研修会での情報が生かされたと感じている。

大学内運営

1 活動報告

- ① 保護者会、オープンキャンパス担当
- ② 児童学科4年Cクラス担任
- ③ 1年チューター2名、2年チューター2名、3年チューター9名、4年チューター14名
- ④ 幼・保採用試験対策へのサポート

社会貢献

1 学会等への貢献

日本保育学会会員

2 地域社会への貢献

- ① 徳島県幼児教育推進体制構築事業調査研究実行委員
- ② 徳島県保育・幼児教育アドバイザー
- ③ 徳島県幼稚園等新規採用教諭研修会委員
- ④ 文部科学省指定 北島町校種間連携協議会委員
- ⑤ 平成30年度徳島県幼稚園教育課程研究協議会指導助言

個人情報

1. 氏名：五反地 由紀子
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：乳児保育・幼児保育
2. 学部授業担当科目
前期：乳児保育①、保育実習指導Ⅰ①、保育実習指導Ⅱ、児童文化
後期：乳児保育②、保育実習指導Ⅰ②、専門ゼミナール、
3. 直接に研究指導した学部学生：専門ゼミナール(8)名
4. 自己評価

授業は、昨年同様一方的な講義中心の内容にならないようにグループワークや演習、実技を取り入れ、学生が楽しく興味を持って受講できるように心がけた。また、学生が安心して前向きな気持ちで学修でき、何でも質問できるように、常に学生を受容する姿勢と、授業時も柔らかな雰囲気醸成に努めた。

保育士資格を取得するために欠かすことのできない保育実習については、希望実習先調査に始まり、振り分け、実習先との調整等丁寧に行った。新たに担当した保育実習指導Ⅰ②(施設実習)については、保育所を除く児童福祉施設の特徴や、実習先に応じた実習の意義・目的を理解させると共に、社会人としてのマナーを含め、保育士として身につけるマナー、ルール、身だしなみ、そして倫理観の大切さを学ぶことに力点を置いた。具体的には実習時に役立つ施設調べや、ポイント指導、実習時に役立つ遊び・玩具作り(実技など)を積極的に行ったが、まだ課題は多いと感じている。

研究領域

1. 専門研究領域：保育内容
2. 研究課題及び概要
①「伝承遊びについて」昨年度からの研究を継続していきながら、学生の伝承遊びへの関心や意識・課題を模索している。乳児保育・児童文化・保育実習指導すべての教科に関連する題材として伝承遊びを保育実践の場に定着させたい。学生と共に考え取り組むことで保育実習に繋げることに努めた。
②「平成29年度告示保育所保育指針の理解と学生への指導について」新たに示された保育所保育指針を学び理解し、学生への適切な指導・理解に繋げていく。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
4. 知的財産権の出願・取得状況：なし
5. 平成30年度分科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：なし
6. 自己評価

授業・講座・実習に係る準備調整等で時間的な制約もあり、研究面に関しては不十分であったと反省する。「伝承遊びについて」は、実践的体験を重視しながら私なりに研究する姿勢を持ち続けたい。「平成29年度告示保育所保育指針の理解と学生への指導について」は、まだ深い学びには至っていないと感じた。

大学内運営

1. 活動報告

- ① 児童学科お遍路ウォーク・宿泊セミナー運営委員
- ② 児童学科3年Cクラス担任26名（3年生78名）
- ③ 1年チューター2名、2年チューター9名、3年チューター9名、4年生チューター6名
- ④ 児童学科オープンキャンパス担当
- ⑤ 全学共通教育センターの学習支援アドバイザー
- ⑥ 幼・保採用試験対策へのサポート

社会貢献

1. 学会等への貢献

2. 地域社会への貢献

石井町立保育所職員への保育助言

個人情報

1. 氏名：林 向達
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：情報教育、教育学
2. 学部授業担当
前期：教育方法・技術論、情報処理、保育原理
後期：教育方法・技術論、情報科学、情報ネットワーク論、保育原理、専門ゼミナール
3. 直接に研究指導した学部学生：
学部：3年生（4）名、4年生（4）名
大学院：なし
4. 自己評価：

情報技術分野は、昨今のネットワーク活用動向やプログラミング教育への注目の高まりを反映させる形で授業内容を更新した。教育・保育分野では、新たに保育原理を担当することとなったものの、保育所保育指針の改訂を踏まえた教科書選定が難しいタイミングであったことなどもあり模索の多い実践となった。後期には、プロジェクト活動として講義と平行しながら教育・保育思想を調べまとめる活動を合わせるなど、アクティブラーニングの取り組みも試みた。

研究領域

1. 専門研究領域：教育情報化史、教育課程論、教育工学
 2. 研究課題及び概要：教育と情報の歴史資料収集と分析整理
 3. 平成30年度分、研究業績一覧
- ① [学会発表] 林向達「Computational Thinkingに関する言説の動向」日本教育工学会研究会（関西大学），2018年5月27日。
 - ② [学会発表] 林向達「アブダクション習得としてのプログラミング教育の検討」日本教育工学会研究会（福井大学），2019年3月9日。
5. 自己評価

プログラミング教育に関係する研究が盛んになる中で、“Computational Thinking”や「プログラミング的思考」という用語が扱われる機会も多くなった。しかし、用語の独り歩きも目立ってきたことから、これらの用語概念に関する先行研究と生成過程を史的に整理する研究を行った。これらを踏まえて、教育と情報の歴史研究全体につなげていく取り組みを継続する予定である。

大学内運営

1. 活動報告
- ① 児童学科2年生担任
 - ② 学部広報委員
 - ③ 学科広報委員

社会貢献

1. 学会等への貢献

- ・日本教育メディア学会研究委員会（国内）副委員長

2. 地域社会への貢献

- ① 鳴門教育大学嘱託講師「現代授業メディア論」，2018年7月30日～8月1日
- ② 学生活動「プログラミング体験教室」のサポート
- ③ 東みよし町立足代小学校公開研究会討論コーディネーター，2019年2月13日
- ④ 岡山県総合教育センター・サテライト研修講座講師（県立林野高等学校）
- ⑤ 学習ソフトウェア情報研究センター「学習デジタル教材コンクール」審査
- ⑥ 大阪市教育センター学校教育 ICT 活用事業コーディネーター
- ⑦ やたなか小中一貫校公開授業助言，2018年11月14日
- ⑧ 滋賀県近江八幡市 ICT 活用指導助言

以上

個人情報

- 1 氏名：土岡 大介
- 2 職位：准教授

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：健康・スポーツ科学、幼・児童体育
- 2 学部授業担当科目
前期：体育②（児童 3BC、児童 3AC）、健康スポーツ A（建築 1A、看護 1A 総合政策 1A）
後期：スポーツ科学理論（児童 1AB）、健康スポーツ B（看護 1B、理学療法 1、食物栄養 1B、総合政策 1A、心理 1B）
- 3 直接に研究指導した学部学生：その他（5名）
- 4 自己評価

専門体育で扱う実技は、各運動領域（器械運動、マット・跳び箱・鉄棒、陸上運動、ボール運動、水泳、身体表現等）によって求められる運動能力が異なる。学生の体力・運動能力の現状を踏まえ、開講期間だけでなく、4年間を通じて継続的に取り組む必要性について今後も強調し、また施設の利用方法、運動時間の確保等、具体的な実施方法、環境を整えたいと考える。

研究領域

- 1 専門研究領域：健康・スポーツ科学、運動方法学(バレーボール)、指導者養成
- 2 研究課題及び概要：
 - ① 幼児を対象とした体力・運動能力の向上に関する研究（継続）
 - ② バレーボール競技における競技力向上・指導者育成（公的資格取得）・競技人口の拡大・普及発展に関する研究（継続）
- 3 平成 30 年度分 研究業績一覧
 - ・土岡大介「バレーボールの基本フォーメーション(6・9人制)」，平成 30 年度全国大学バレーボール部員対象(公財)日本スポーツ協会公認スポーツ指導員資格取得講習会(バレーボール専門科目)講師，2018 年 8 月 13 日，大阪府立大学工業高等専門学校
 - ・平成 30 年度全国大学バレーボール部員対象（公財）日本スポーツ協会公認スポーツ指導員資格取得講習会，専門科目/筆記試験・実技審査 4 種目（ボールコントロール，サーブ，トス，スパイク）担当，2018 年 8 月 15 日，大阪府立大学工業高等専門学校
 - ・一世界へつながる情報を未来の全日本へー，（公財）日本 VB 協会国内事業本部指導普及委員会一同科学研究委員会情報戦略班共同プロジェクト，STINGO 配信事業担当（2018 継続事業）
- 4 知的財産権の出願・取得状況
- 5 自己評価

スポーツの公的な指導資格の取得・指導者養成に関連した分野に継続して取り組んでいる。日本の競技スポーツは、どの競技においても、対象のサンプリング期に、如何にその競技に楽しさや魅力を感じさせ、専門化期へと継続・連携させていくかが課題であり、公的な資格をもった指導者の資質向上と養成（数）が必要不可欠である。コーチングコンテキスト毎に専門的な知識・指導方法を身につけた指導者を育て、現場において適切な指導を行い、体罰等の諸問題を無くし、延いては競技人口の拡大・競技力の向上に繋がりたいと考えている。

大学内運営

1 活動報告

教員採用試験対策講座担当(体育実技)、防火・防災管理委員会委員 7号館責任者、5号館 AED 管理責任者、スポーツ推薦入試(バレーボール窓口)担当、入試面接担当、附属幼稚園特設保育体育あそび教室(毎週1回)担当、男・女子バレーボール部部長、女子バレーボール部監督、大会への出場引率、体育館の使用申請責任者・管理業務、トレーニングマシン使用の指導・管理、一般教養科目充実協議会準備委員会委員、新8号館建設準備担当、体育科カリキュラム作成に関わる業務・用品申請管理担当、入・卒業式の総代指導・会場設営等、学内体育設備管理 等

社会貢献

1 地域社会への貢献

- ① (公財)日本バレーボール協会ハイパフォーマンス事業本部デベロップ推進部指導者養成委員会副主事として国内バレーボール事業の情報発信を担当した。国際バレーボール連盟(FIVB)公認コーチ、日本バレーボール協会(JVA)公認講師として、指導者養成委員会事業である日本スポーツ協会公認指導者資格取得講習会・更新講習会の開催、講師、審査委員を担当した。
- ② 日本スポーツ協会公認コーチとして指導者の資質向上・育成普及に関わる講習会等の企画・運営に関わり、日本ヤングクラブバレーボール連盟理事・運営事務局として、指導者養成委員会事業である第21回全国ヤングクラブバレーボール男女優勝大会(参加者1749名)を統轄運営した。
- ③ 四国大学バレーボール連盟副会長、徳島県バレーボール協会参与、同一貫指導体制推進委員会委員、大学部強化・指導普及委員長、徳島県大学バレーボール連盟会長・女子強化委員長、徳島県ヤングクラブバレーボール連盟理事として四国地域における選手強化指導を担当した。また、大学バレーボール競技として、四国学連春・秋季リーグ戦大会を大会副会長として、徳島県大学選手権大会、秋季大会を大会会長として開催した。

個人情報

1. 氏名：田中 紗枝子
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：教育心理学、認知心理学、学校心理学、保育心理学
2. 授業担当科目
前期 【学部】 幼児理解、教育心理学
【短期大学部】 保育内容（言葉）A、保育の心理学 I、教育心理学、教育相談（カウンセリングを含む）
後期 【学部】 幼児理解、教育心理学
【短期大学部】 保育の心理学 II、幼児理解
3. 直接に指導した学生：専門ゼミナール（卒業論文指導）7名、子どもの学び支援センターでの指導19名。
4. 自己評価：これまでの授業内容をふまえながら、学生にも参加を促す課題やグループワークを実施した。しかし、実践に応用できる知識の獲得という点からはまだ改善の余地がある。今後は主体的に知識が応用されるような課題づくりが必要だと考える。

研究領域

1. 専門研究領域：認知心理学、教育心理学。特に認知心理学の知見を踏まえた学習方法について研究している。また学習に困難を抱える子どもへの支援活動の実施や、その活動が支援実施者へ及ぼす影響についても検討している。
2. 研究課題及び概要
 - ① 「テストに取り組むこと」が学習を促進するという現象について、学習者の能動的な情報処理（検索）の観点から、そのメカニズムの解明と教育活動への利用について研究している。
 - ② 認知カウンセリング（認知心理学の知見をふまえた学習支援活動）について、支援者として参加する大学生の教職意識や力量の形成に及ぼす影響を検討している。
3. 平成30年度分研究業績一覧
【論文】
 - ① 田中紗枝子・岡直樹・宮谷真人・福島久美子（印刷中）. 連立方程式の解法の習得に向けた認知カウンセリング—再活性化説にもとづいた反復学習による支援— 学校心理学研究
 - ② 田中紗枝子（2018）. 二重課題が誤検索効果に及ぼす影響 広島大学大学院教育学研究科紀要, 67, 193-200.
 - ③ Iwaki, N., & Tanaka, S. (2018). Electrophysiological decomposition of attentional factors on the hypercorrection effect of false lexical representations. *Brain and Cognition*, 124, 64-72.
 - ④ Tanaka, S., Miyatani, M., & Iwaki, N. (in press). Response Format, Not Semantic Activation, Influences the Failed Retrieval Effect. *Frontiers in Psychology*,
【学会発表】
 - ① Tanaka, S., & Miyatani, M., Failed retrieval facilitates learning IV: effect of longer delay. The 40th International School Psychology Association Conference. 2018年7月 東京成徳大学（ポスター発表）
 - ② 田中紗枝子・宮谷真人 誤った検索による学習促進(5)—解答方法の影響— 日

本心理学会第 82 回大会 2018 年 9 月 東北大学 (ポスター発表)

③ 田中紗枝子・宮谷真人 二重課題が誤検索効果に及ぼす影響 中国四国心理学会 2018 年 10 月 広島国際大学 (ポスター発表)

4. 知的財産権の出願・取得状況：なし
5. 平成 30 年度分科学研究費補助金・各種助成金の申請・交付状況
 - ① 科研費 (基盤研究 (C)) 「誤記憶想起の学習促進効果に関する応用的研究」研究分担者
 - ② 科研費 (若手研究) 「主体的な学習はなぜ効果的なのか—誤検索効果を用いた検討」研究代表者 (申請中)
6. 自己評価
研究課題①については、これまで継続的に実施してきた実験結果を各学会で発表し、またこれらをまとめたものを論文として投稿した。来年度以降は、これまでの結果を踏まえた新たな実験を実施する予定である。研究課題②については、今年度より本学内において学び支援活動 (きらきらルーム) を開始した。参加児童および大学生に実施したアンケートをまとめて論文等で報告するとともに、より良い支援方法についても検討していきたいと考えている。

大学内運営

活動報告

児童学科 1 年生担任、1-4 年生チューター、学科内宿泊セミナー担当、学科内子どもの学び支援センター「きらきらルーム」支援員

社会貢献

地域社会等への貢献

日本生理心理学会編集委員会 事務局担当、徳島県社会福祉審議会 委員

第4節 メディアデザイン学科

個人情報

1. 氏名：篠原 靖典
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 総合領域 情報学 知能情報処理
2. 学部授業担当科目
前期：メディアデザイン通論、専門ゼミナールⅠ、Web プログラミング入門、情報システム演習Ⅰ、プログラミング入門、卒業研究
後期：情報セキュリティ論、専門ゼミナールⅡ、Web プログラミング応用、情報システム演習Ⅱ、プログラミング応用、応用データベース、卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生： 卒業論文 (2)名
4. 自己評価：
 - ・専門ゼミナールⅠ・Ⅱにおいて、徳島県南部総合県民局他と「県南地域づくりキャンパス」推進事業を実施した。平成29年から牟岐町西又地区において炭窯を復活させ備長炭作りを通して、地域の交流人口の増加や活性化を図る取り組みを始めている。このような取り組みの中、牟岐町を訪ね炭窯の見学や地域の方々と意見交換を行った。この体験をもとに、地域の活性化案を考えた。
 - ・「デジタルコンテンツ人材育成セミナー」を開催し、最新の情報に触れる機会を設けた。

研究領域

1. 専門研究領域：
総合領域 情報学 知能情報処理
2. 研究課題及び概要
「ニューラルネットワークを用いた画像の領域分割に関する研究」 「電子書籍開発」 「インターネットを利用したインタラクティブ学習」
3. 平成30年度分 研究業績一覧
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
 - ・徳島県南部県民局(補助)
対象事業名：「県南地域づくりキャンパス」推進事業 398,000円
 - ・徳島市社会福祉協議会(研究助成) 50,000円
5. 自己評価
 - ・行政との連携による地域再生・活性化事業において、一定の役割を果たすことができた。

大学内運営

1. 活動報告：

- ・メディアデザイン学科長
- ・大学院生活環境情報学専攻専攻主任
- ・認証評価委員会委員
- ・宿泊セミナー運営委員会委員
- ・教務委員会委員
- ・教員養成対策委員会委員
- ・情報センター副所長
- ・防火・防災管理委員
- ・地域連携センター運営協議会委員
- ・1年生～4年生チューター
- ・本学入試監督・面接

社会貢献

1. 地域社会への貢献

- ・e-とくしま推進財団 評議員
- ・徳島県西部地域政策総合会議 副会長
- ・徳島県立文書館協議会委員 委員長
- ・徳島県立工業技術センター試験研究評価委員会委員
- ・とくしまOSS普及協議会 幹事
- ・大学と高等学校との連携事業・教育情報作業部会委員
- ・南部津波減災対策推進会議委員
- ・徳島県警察との連携事業「ネットウォッチャー」事業実施
- ・徳島県警察との連携事業「情報発信ウォッチャー」事業実施
- ・とくしま産業振興機構との連携による
「デジタルコンテンツ人材育成セミナー」開催

個人情報

1. 氏名：清澄 良策
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 総合領域 情報学 知能情報処理
2. 学部授業担当科目
前期：メディアデザイン通論、専門ゼミナールⅠ、情報データベース、情報処理、情報通信ネットワーク論、プログラミング論B、オペレーションズリサーチ、情報システム論A、卒業研究
後期：情報システム論、専門ゼミナールⅡ、コンピュータネットワーク論、プログラミング論A、コンピュータネットワーク演習、情報数学、卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生： 卒業論文 (0) 名
4. 自己評価：
 - ・専門ゼミナールⅠ・Ⅱにおいて、徳島県南部総合県民局他と「県南地域づくりキャンパス」推進事業を実施した。備長炭の炭焼き体験や交流を行い、この体験をもとに、地域の活性化案を考えた。
 - ・卒業研究や専門ゼミナール等で使用する機器・ソフトのメンテナンスを行った。（経年劣化や機材の移動などによるコンピュータの故障が多発し、修理に多くの時間を要した。

研究領域

1. 専門研究領域：
総合領域 情報学 生活情報技術
2. 研究課題及び概要
「教育情報コンテンツ構築とその活用システムの研究」 「電子書籍開発」
「情報コンテンツ構築とその構築技術の研究」 「インターネットを利用したインタラクティブ学習」
3. 平成30年度分 研究業績一覧
論文
学会発表
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
・徳島県南部県民局(補助)
対象事業名：「県南地域づくりキャンパス」推進事業 398,000円
5. 自己評価
・インターネットを利用したピアノレッスンのインタラクティブ学習方法を開発し試験運用を行うことで、その実行可能性を検証した。

大学内運営

1. 活動報告：
教育研究委員会、4年生担任&チューター、本学入試監督・面接

社会貢献

個人情報

1. 氏名：古本 奈奈代
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：社会調査・統計解析 プレゼンテーション論
2. 学部授業担当科目：
前期：メディアデザイン通論、プレゼンテーション技法、社会調査論、社会調査研究Ⅰ、
専門ゼミナールⅠ、卒業研究
後期：生活と情報B、社会調査研究Ⅱ、プレゼンテーション演習、プレゼンテーション
論、専門ゼミナールⅡ、卒業研究、看護研究Ⅱ（看護学研究科）
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（2）名
4. 自己評価：
 - ① 講義全般においてスライド教材作成、補助教材プリントの作成により学生の理解を助けるように努め、授業評価アンケートにおいて成果が確認された。
 - ② 社会調査士資格認定校として社会調査関係の認定科目を指導し、特に「社会調査研究Ⅱ」においては少人数グループによるフィールドワークを実施し、報告書をまとめることにより資格取得希望者全員が資格を取得することができた。
 - ③ 学外の企業や徳島県内の行政機関行政などと連携し、地域貢献事業に積極的に参加した。課題発見型授業を実践することができたと同時に、その実績は高い評価を得た。

研究領域

1. 専門研究領域：数学 数学一般（確率論・統計数学）
2. 研究課題及び概要：
 - ① ランダムデータの統計的処理とその応用に関する研究
 - ② 教育従事者における自己評価とその再教育に関する研究
3. 平成30年度分 研究業績一覧：
学会発表
 - ① 保育書に基づく乳幼児の音楽表現の姿について-3歳未満児の場合-，日本保育学会第72回大会，2019年5月
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：
 - ① 徳島県南部県民局（事業費）対象事業「地域がキャンパス」推進事業：300,000円
5. 自己評価：
 - ① 調査分析の専門家を認定する社会調査士資格取得者を10名輩出することができた。
 - ② 調査分析に関する専門的知識を用いて他学部他学科の研究をサポートした。
 - ③ 徳島県が推進する地域再生事業に対する大学の役割を遂行することができた。

大学内運営

1. 活動報告：
 - ① 人間生活学部教員養成対策委員会委員
 - ② 退学者防止対策委員会委員
 - ③ 入学試験 監督・面接

社会貢献

1. 地域社会への貢献:

- ① e-とくしま推進会議委員
- ② 徳島県職業能力開発審議会委員
- ③ 徳島県総合計画審議会委員
- ④ 徳島県環境審議会委員
- ⑤ とくしま障がい者雇用促進県民会議委員
- ⑥ 徳島県科学技術県民会議委員
- ⑦ 徳島県新事業分野開拓者認定審査委員
- ⑧ 徳島県有料産業廃棄物処理業者認定委員会委員

個人情報

1. 氏名：山城 新吾
2. 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域
総合領域 教育工学
総合領域 メディア情報学
2. 学部授業担当科目
前期： インストラクショナルデザイン インストラクショナルデザイン演習 コンピュータグラフィックス論Ⅰ コンピュータグラフィックスⅠ メディア基礎論 メディア制作論 専門ゼミナールⅠ メディアデザイン通論 卒業研究
後期： メディア基礎演習 メディア教育演習 メディア教育論 専門ゼミナールⅡ 基礎ゼミナールB 卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生
卒業論文（2）名、大学院修士（0）名
4. 自己評価
全授業で視聴覚教材の提供や学生による課題遂行・レポート提出・プレゼンテーションを推進した。その他、「メディア基礎演習」でティームティーチング実施、「インストラクショナルデザイン演習」で学生によるeラーニング教材制作と実践を行った。

研究領域

1. 専門研究領域
総合領域 教育工学
複合領域 社会システム工学・安全システム
2. 研究課題及び概要
[課題]
防災教育・啓発プログラム・教材の開発
学校等における災害対応・教育再開における課題
[概要]
東日本大震災の発生前より、近い将来発生が予想される南海トラフ巨大地震に備え、防災や津波に対する対策の必要性を訴える教材開発や各種教育活動を実施してきた。平成30年度は保育所における災害対応と保育再開について、平成29年夏の九州北部豪雨の被災地で行った調査結果をまとめて発表した他、これまで実施してきた体験型避難シミュレーションゲームの指導について改善を行い発表した。
3. 平成30年度分 研究業績一覧
論文・著書
・「2017年九州北部豪雨における保育所の危機管理と保育継続の問題」土木学会論文集F6（安全問題）2018年74巻2号 p. I_85-I_92. （高橋真里・中野晋・金井純子・山城新吾・藤澤一仁）

- ・「前線性集中豪雨発生時における学校の安全管理の課題～2017年九州北部豪雨の事例分析～」 土木学会論文集 F6(安全問題) 2018年74巻2号 p. I_77-I_84. (中野晋・金井純子・高橋真理・藤澤一仁・山城新吾)

学会発表

- ・「豪雨災害時の保育再開の課題～2017年九州北部豪雨に学ぶ～」日本保育学会第71回大会発表要旨集, p. 1030. (山城新吾・高橋真里・藤澤一仁・金井純子)
- ・「2017年九州北部豪雨における朝倉市内の保育所の緊急対応」 日本保育学会第71回大会発表要旨集, p. 1159. (高橋真里・藤澤一仁・中野晋・金井純子・山城新吾)
- ・「体験型避難シミュレーションゲームの展開と改善」日本安全教育学会第19回横浜大会予稿集, pp. 73-74. (山城新吾・末澤弘太・中野晋)
- ・「津波災害を想定した車椅子移動支援に関する学習教材の作成 ～OBサーキットトレーニングの実践的評価～」 日本災害情報学会20周年記念大会予稿集, pp. 134-135. (柳澤幸夫・山城新吾・鶯春夫)

4. 知的財産権の出願・取得状況 なし

5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況 なし

6. 自己評価

これまでに培ってきたeラーニング・電子教材のノウハウを活かしつつ、平成29度から継続中の防災教育系の分野で一定の成果を出すことが出来た。

大学内運営

活動報告

- ・人間生活学部自己点検自己評価委員会 委員長
- ・全学FD研究部会 委員

社会貢献

1. 学会等への貢献

- ・教育システム情報学会四国地区学生研究発表会 審査担当

2. 地域社会への貢献

- ・教員免許状更新講習「マルチメディアに関する講習」講習担当
- ・徳島市立高等学校出張講義「学校が避難所になったら」平成30年6月25日
- ・つるぎ町立貞光中学校防災講演会講師 平成30年7月9日
- ・徳島県立阿波高校出張講義「防災について考えてみよう」平成30年7月31日
- ・徳島県教委幼稚園教員研修講師「学校における防災訓練の展開例」平成30年8月9日
- ・徳島市津田保育所在宅育児相談室講演会講師「防災について考えてみよう」平成30年9月19日
- ・徳島市立高校教員研修講師「GoogleClassroom入門」平成30年12月7日
- ・徳島市社会福祉協議会災害ボランティアセンター設置訓練指導 平成31年1月14日
- ・徳島市津田保育所保護者講演会講師「防災について考えてみよう」平成31年1月18日

個人情報

1. 氏名：長濱 太造
2. 職位：助教

教育領域

1. 教育の担当専門領域：情報学基礎・統計
2. 学部授業担当科目
前期：メディアデザイン通論、コンピュータ概論、情報処理論、情報処理・統計学、生活と情報A、専門ゼミナールⅠ
後期：応用統計学、コンピュータ基礎演習、コンピュータグラフィックス演習Ⅰ、CGアニメーションⅠ、専門ゼミナールⅡ
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（1）名、大学院修士（0）名
4. 自己評価：
 - ・全ての授業で、PowerPoint や E x c e l、テキストファイルで指導案を配布し、受講者の理解がより深まるように工夫している。
 - ・学習内容が定着するよう、授業のひとまとまり毎にレポート提出や小テストを実施している。
 - ・コンピュータグラフィックス系の授業では、コンテストを開催し、受講者のモチベーションが向上するよう工夫している。

研究領域

1. 専門研究領域：総合領域・情報学・統計科学
2. 研究課題及び概要：
 1. 徳島市における特別支援教育推進調査のテキストマイニングによる分析
 2. 鳴門市 福祉に関するアンケート調査のテキストマイニングによる分析
 3. コンテンツ工学を活用した地域コンテンツに関する研究
3. 平成 30 年度分 研究業績一覧：なし
4. 知的財産権の出願・取得状況：なし
5. 平成 30 年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：なし
6. 自己評価：
 - ・徳島市における特別支援教育推進調査及び、鳴門市における福祉に関するアンケート調査について、テキストマイニングを用いた分析を進めている。次年度には研究業績として出せるよう進めていく。
 - ・コンテンツ工学を活用し、徳島県精神保健福祉士協会と協同で地域移行地域定着に関する広報 DVD を制作、Google マップとストリートビューを活用した地域イベント支援、徳島県からの依頼でコンテンツ系の選定委員、また徳島県高校放送コンテストの審査員という実践を展開した。

大学内運営

1. アカンサス会本部役員
2. アカンサス会徳島県支部役員
3. アカンサス会高知県支部立ち上げ委員
4. ホームページ委員会
5. 広報担当者会
6. 人間生活学部広報担当委員長
7. 人間生活学部学生指導委員会
8. オープンキャンパス 模擬授業講師 2 回担当
9. 平成 28 年度入学生担任, 平成 27~30 年度入学生チューター
10. 入学試験 監督・面接

社会貢献

1. 小松島商工会議所主催「ITを活用した販売促進勉強会」講師
2. 徳島県観光情報サイト「阿波ナビ」リニューアル業務 選定委員
3. 徳島県「GO!GO!すだちくんPASS」アプリ創造事業委託業務事業者選定委員
4. 徳島県「徳島観光アプリ」愛称選考委員
5. 徳島県高校放送コンテスト 審査員
6. 教員免許状更新講習「マルチメディアに関する講習」 講習担当
7. 阿波の狸 奉賛会世話人
8. 第41回阿波の狸まつり（ふるさとカーニバル実行委主催）において、紙芝居「阿波の狸合戦」の上演および、徳島文理大学名誉教授の飯原一夫先生の作品「追憶の昭和徳島」の映像作品を上映
9. Google マップを活用した地域イベント支援。狸の祠めぐりオリエンテーリングの参加者を支援する目的で、Google マップで公開されていなかった狸の祠へのルート、直近のストリートビューのルートまでを5または10m間隔で360度カメラで撮影し、ストリートビューで公開した。
10. 徳島県精神保健福祉士協会と協同で、地域移行地域定着に関する広報DVDを制作。精神保健福祉協会、徳島保健所で活用されている。

第5節 建築デザイン学科

個人情報

1. 氏名：森田 孝夫
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：建築計画学、都市計画学
2. 学部授業担当科目
前期：建築計画論、都市計画論、住宅政策論、生活施設計画、住宅設計製図Ⅱ
後期：住居学、景観論、人間工学、インテリアデザイン基礎、専門ゼミナール
3. 大学院授業担当科目 後期 住居環境学特論
4. 直接に研究指導した学部学生、大学院生：
卒業論文（ 1 ）名 修士論文（ 0 ）名
5. 自己評価：

担当授業科目は、建築学における〈都市計画・建築計画領域〉で、1年生科目の住居学から、2年生の建築計画論、住宅設計製図Ⅱ、インテリアデザイン基礎、3年生の都市計画論、4年生の景観論という流れがある。テーマに関連する新聞記事を読ませるなどして、講義法の多様化に努めている。また、講義で習ったことを設計製図のテーマの中にとりこみ、講義と設計をリンクさせて、学習効果をアップさせる工夫を図っている。

都市計画論は、講義ノートをつくり、都市の歴史と法制度、都市イメージの思潮、都市空間のデザインそして美観に焦点をあてて授業を構成させている。法制度ではゾーニングや用途規制そして区画整理事業について、アメリカとドイツにルーツを求め、どのような経緯で今日に至ったかを解説できるように努めている。また住宅都市計画のルーツとなるハワードの田園都市論を重視している。

これらの計画領域とは別の人間工学は、人間—機械—環境系の理論的枠組みでデザインをとらえる授業で、インテリアデザインのための理論を提供する。前半は椅子やベッドなどのエルゴノミクス、後半は人間—機械—環境系のヒューマン・エンジニアリングの視点から進めている。人間工学の進歩は速く、ロボットやAIを加えて語らなければならない。

インテリアデザイン基礎では、課題のひとつとして地域公共図書館のインテリア設計を課した。内部空間だけでなく建物全体もモデル化するようにして、総合的な建築設計になるように考えている。本学にある優れた図書館を生きた教材として活用して、インテリアのスケッチなどをさせている。

研究領域

1. 専門研究領域： 建築計画、都市計画
2. 研究課題及び概要
研究課題：地域施設と防災機能（避難所の計画）

研究概要：阪神淡路大震災から始めた避難所計画の研究を継続している。2016年熊本地震においては、自動車の利用が盛んで、車中泊が大きな問題になった。この問題について多面的な分析を試みた。そのひとつにコンピュータソフトのKH Coderを用いた新聞記事のテキスト分析がある。震災には個性があり、同じ都市直下型地

震でも避難所の被害に違いが生まれるにちがいない。この仮説を調べるために、1995年兵庫県南部地震と2016年熊本地震の新聞記事を、KH Coderを用いてテキスト分析を行った結果、興味深い結果が得られたので、下記の学術論文にまとめ、建築学会誌「地域施設計画研究」36号に投稿し採択されている。

論文・著書

1. 森田孝夫：2016年熊本地震における自動車避難と避難所計画に関するテキスト分析、地域施設計画研究、36号、日本建築学会、pp.185-194、2018年7月。

平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況 なし

自己評価：

平成30年度前半は、日本建築学会地域施設計画シンポジウムにおいて論文発表を行った。平成30年度後半は、平成30年9月6日に道央を中心におきた北海道地震に関する新聞記事を収集し、ライフラインの電気の停電問題と、観光客の避難空間の確保に関して新しい知見が散見されたが、KH Coderにかけるテキスト分析にまで至らず、第37回地域施設計画研究シンポジウム論文に応募するに至らなかった。

大学内運営

1. 活動報告
 - 1) 紀要編集委員会委員
 - 2) 大学院人間生活学研究科長
 - 3) 大学院博士後期課程人間生活学専攻主任
 - 4) 人間生活学部長
 - 5) 全学入試委員会委員長

2. 記録すべき活動内容

平成30年4月に、人間生活学部長に任命された。大学院人間生活学研究科長と後期課程人間生活学専攻主任も務めている。

社会貢献

1. 学会等への貢献：
 - 1) 日本建築学会会員
 - 2) 国画会絵画部会員
2. 地方自治体における審議会・委員会としての活動
 - 1) 土成図書館・公民館新築工事に伴う基本・実施設計業務公募型プロポーザル評価委員および委員長（平成30年6月1日～平成30年7月31日）
 - 2) 阿波市立幼保連携型伊沢認定こども園新築工事に伴う設計業務指名型プロポーザル評価委員および委員長（平成30年6月1日～7月31日）
 - 3) 阿波市立幼保連携型大俣認定こども園新築その他工事に伴う基本・実施設計業務指名型プロポーザル評価委員および委員長（平成30年10月10日～平成30年12月31日）
3. 文化活動
 - 1) 森田孝夫展（ギャラリー恵風、京都市。9月18日～9月30日。）

個人情報

- 1 氏名：森岡 英之
- 2 職位：教授

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：住宅施工、住宅構造Ⅰ、住宅構造Ⅱ、図学、住宅材料学Ⅰ、住宅材料学Ⅱ、住居安全論、住宅管理、専門ゼミナール
- 2 学部教授担当科目
前期：文理学・・・1年生
図学・・・1年生
住宅構造学Ⅱ・・・2年生
住宅施工・・・3年生
住宅材料学Ⅱ・・・4年生
後期：住宅構造学Ⅰ・・・1年生
住居安全論・・・3年生
住宅材料学Ⅰ・・・3年生
専門ゼミナール・・・3年生
住宅管理・・・4年生
- 3 直接に研究指導した学生
・徳島県建築士事務所協会主催による「建築作品発表会」出品の3年生2名指導。
- 4 自己評価
・「施工」は、特に建築専門用語を理解させることと、工（構）法やモノの組合せ、また仕組みを学ぶために、映像や見本（サンプル）による指導に時間を投じた。そのほか例年通り、要点に絞った内容のミニテストに力を注ぎより具体的な学習により理解度を高めた。
また、3年生全員を対象に「藍住文化ホール」建設工事現場に見学に出向き、まもなく卒業して社会に出ることで、建設産業への魅力や関心をより深める授業の一環として実施した。
また、2級建築士程度及び2級建築施工管理技士程度の演習問題を実施した。
・「図学」は、三次元のモノを二次元に表現する作図法に要点をしぼり、実践的な課題を実施することにより理解度を高めた。
・「材料学Ⅰ」は、建物を建てるための仮設、土工、躯体から仕上げに至るまでのすべてに用いる主要な材料の映像や見本（サンプル）など個々の用い方、また重要な点を要点的に指導した。
実験はコンクリートの材料実験として、骨材のふるい試験から圧縮強度試験までを実践に合わせた形で、専門技術者を招聘しより詳しく実施した。
・「材料学Ⅱ」は、材料の持つ力学的性質を理解させるための簡単なコンクリートのひずみ実験を実施した。座学においては様々な建築材料の物理的性質を知るために、つまり材料力学となる内力（内部に働く応力）と、外力（物体の外に働く力、つまり建築構造物の自重、荷重、土圧、水圧、地震力）などの違いを、図解を用い理解し判断できるようにした。
また、2級建築士程度及び2級建築施工管理技士程度の演習問題を実施した。
・「構造学Ⅰ・Ⅱ」は、構造部材（骨組）の構成や関連付け（納まり）の理解、各種構造の性能が理解できるような映像、そのほかサンプルなどを用いて理解度を高めた。また、要点を絞った内容のミニテストや現場作業の動画鑑賞により、より理解度を高めた。
更には、2級建築士程度及び2級建築施工管理技士程度の演習問題を実施した。
・「安全論」は、特に「建物の火災について」を要点に絞って指導をした。
・「住宅管理」は、長寿化が進み、且つ高度な文明が発達した現代、住環境も急激に変化して、それに伴う住宅管理も専門的になってきて、一個人では解決できない状況になってきた昨今である。従って授業は一個人で処理・調整などに手が届くメンテナンスや、集合住宅の管理、居住地の管理に重点をおいた内容として理解を求めるようにした。

研究領域

- 1 専門研究領域：特になし
- 2 研究課題及び概要：特になし

大学内運営

- 1 活動報告
 - ・全学 教育連絡部会
 - ・学部 教務委員会
 - ・学務 就職支援委員会
 - ・教員養成対策委員会
 - ・各種入試による合格者協議会
 - ・学科長
 - ・チューター

社会貢献

- 1 地域社会への貢献
 - ・30年8月5日は「徳島アカデミックステップアップ事業」に建築デザイン学科として参加地域の子供とドローン教室などの交流を実施した。
 - ・30年10月11日～13日 「徳島ビジネスチャレンジメッセ」に出展
2. 徳島県建築士会主催の「建築おもしろ」発表会
 - ・30年11月17日、3年生学生1組と4年生1名の作品制作発表会
3. 11月28日徳島県藍住町で建設中の仮称「藍住文化ホール等複合施設」へ学生（3年生）引率した。

個人情報

1. 氏名：山田 實
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 建築環境学、建築設備
2. 学部授業担当科目
前期：家庭電気・機械 1年生、食物栄養1年生、人間生活3年生
福祉住環境論 2年生
住生活環境学Ⅱ 3年生
住宅設備Ⅰ 1年生
環境保全論 4年生
文理学 1年生
後期：住居環境学 3年生
住生活環境学Ⅰ 2年生
住宅設備Ⅱ 3年生
専門ゼミナール 3年生
住居衛生学 食物栄養2年生、総政4年生、人間生活4年生
文理学 1年生
3. 直接に研究指導した学部学生：
卒業論文（0）名
4. 自己評価：
 - ・建築デザインは、意匠・構造・設備の三部門で設計をまとめるが、今後優れた建築物を設計するためには、意匠・構造・設備の三部門をトータルに考えて設計する、すなわちトータルエンジニアリングデザインが重要であると考えている。よって、建物の性能を大きく左右する設備について実務に基づいた知識・技術を指導教育した。
 - ・「福祉住環境論」では、今後増加すると考えられる老健施設等の計画を行う時の基本的な事項について実施例を示して教育した。
 - ・「住生活環境学Ⅰ」と「住生活環境学Ⅱ」では、同じ教科書を使用し、2年生の「住生活環境学Ⅰ」では全般概論を講義し、3年生の「住生活環境学Ⅱ」演習問題を主体に学生が自から考えて学べるような授業とした。
 - ・「住居環境学」では実施例等のスライドを作成し、講義を行うことにより学生の理解度をより深めるようにした。
 - ・「住居衛生学」では食物栄養学科の学生が建築環境の基本的な事項を理解するように講義した。また、建物冷暖房負荷計算、騒音計算等を随時演習として組み入れて学生の理解度を高めるようにした。
 - ・「住宅設備Ⅰ、Ⅱ」では、実務経験での不具合事例を交えて講義することにより、より興味を深めるようにした。特に建築計画をするうえで建築と設備とのかかわりを重点的に講義した。「住宅設備Ⅱ」では冒頭に学生に空調に関しての不満を発表させ後の授業で具体的な解決策を考えさせ講義した。
 - ・「環境保全論」ではアクティブラーニングを導入し、学生が環境に関して問題とを考えていることを発表させ、各々の課題の具体的な解決策を考えさせた。

研究領域

1. 専門研究領域： 建築環境学、建築設備
2. 研究課題及び概要
研究課題： 建物における最適エネルギーシステムの研究
研究概要：
地球温暖化、省エネルギー、環境問題等、建物のエネルギーシステムをどう組み立てるかは大きな課題である。そこに原子力発電所の問題が起こり、再生可能エネルギーの活用をはじめ、日本のエネルギーを如何にするかは国家的な課題である。実務で経験した、蓄熱システム、コージェネレーションシステム等を有効に組み合わせることで最適エネルギーシステムを構築する。
3. 平成30年度分研究業績としての論文等は無。
4. 知的財産権の出願は無。
5. 平成30年度分科学研究費補助金等は無。
6. 自己評価：研究についてはあまり成果を上げられなかった。

大学内運営

1. 活動報告
 - ①オープンキャンパスでの学科説明、模擬授業
 - ②人間生活学部入学試験委員会委員
 - ③人間生活学部教育研究委員会委員
 - ④建築デザイン学科1年生担任（45名）

社会貢献

1. 学会等への貢献：
 - 1) 空気調和衛生工学会会員
 - 2) 建築設備技術者協会会員

個人情報

- 1 氏名：川村 恭平
- 2 職位：教授

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：
工学： 建築学 建築環境・設備 情報工学
家政学： 住居学
- 2 学部授業担当科目
前期：CAD演習Ⅰ、コンピュータ演習Ⅰ、住居意匠学
後期：住生活論（製図を含む）、日本建築史、CAD演習Ⅲ、専門ゼミナール
- 3 直接に研究指導した学部学生6名：その他（2）
- 4 自己評価
授業については紙媒体も含めIT機器の活用などに努めた、しかしながら授業者としてITの活用（特にPowerPoint）の使用した授業の工夫・改善の必要があると痛感した。
授業者は多くのデータ（通常の授業の3倍程度の情報量）に対して授業を受ける学生側の準備ができていないことがある、結果として流れた授業になった。

研究領域

- 1 専門研究領域：
工学 建築学 建築環境・設備
家政学 住居学
- 2 研究課題及び概要：
日本の住居形式と熱環境（伝統的な住まい方）についての研究
3Dプリンタの活用による建築模型の製作方法の研究
ドローン（無人航空機）による建築分野での活用方法の研究
- 3 平成30年度分 研究業績一覧
- 4 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：
- 5 自己評価
研究については、本学25号館の東側全面ガラス窓の熱環境、特に日射について実測調査を行い熱環境の分析と対応策の検討をおこなった。
また、本学で実施している避難訓練を学生の側からみた自主避難マニュアルを作成し、卒業論文の資料とした。
25年度徳島県立光慶図書館の3D復元（徳島県立文書館）および村崎女子職業校の3D復元と卒業論文の指導
26年度は千秋閣3D復元と卒業論文の指導
27年度はフランクロイドライトの落水荘の再現に関する卒業論文の指導
28年度は3Dプリンタの建築プレゼンテーションの活用及戦前の徳島市の著名な建築物の再現に関する卒業論文の指導
29年度徳島県ビジネスチャレンジメッセに3Dプリンタの建築分野での活用というテーマで出展、また吉野川市美郷において旧診療所や小学校のリノベーションに参画、とくしま科学技術アカデミーステップアップ事業として徳島文理大学建築デザイン学科フェアを実施
30年度は3Dプリンタによる建築模型の製作及び間取り作成用のパーツを試作し、住宅会社における試用を開始している。また、高等学校家庭科の住居分野における間取り作成ツールを製作し、実際の高等学校の授業で使用している。
また、卒業研究で展示用の大学全景模型（1/300）の2号館を作成した。

大学内運営

1 活動報告

人間生活学部教員養成推進委員

人間生活学部学生指導委員

社会貢献

1 学会等への貢献:

日本環境学会（大阪市立大学）

2 地域社会への貢献:

19年度徳島県のLOHASな徳島入門講座でe c oな生活、e c oな住まいのテーマで講演

20年度徳島県緑化マイスター講習会で講演

21年度徳島県エコオフィス事業との連携による壁面緑化の効果に関する研究

22年度徳島県エコオフィス事業との連携による壁面緑化の効果に関する研究

23年度 Yes 21 においてボランティアによる住宅間取り相談

24年度とくしまエコみらいハウスの評価助言指導

24年度徳島県立光慶図書館の3D復元 作業(徳島県立文書館)

25年度徳島県立光慶図書館の3D復元 徳島県立文書館および村崎女子職業校の3D復元の完了

26年度 千秋閣の3D復元の完了および徳島県との地域連携として高開の石積みの擁壁の測量を行った。

27年度 徳島県との地域連携の2年目として高開の石積みの擁壁の測量を行った。この際ドローンの積極的な活用を行った。

28年度 3Dプリンタの建築プレゼンテーションの活用及戦前の徳島市の著名な建築物の再現に関する指導、さらにドローンの建築現場における活用を行った。

29年度 徳島県ビジネスチャレンジメッセに3Dプリンタの建築分野での活用というテーマで出展、また吉野川市美郷において旧診療所や小学校のリノベーションに参画、とくしま科学技術アカデミーステップアップ事業として徳島文理大学建築デザイン学科フェアを実施

30年度 徳島県ビジネスチャレンジメッセに3Dプリンタの建築分野での活用というテーマで出展、また吉野川市美郷において廃校となった種野小学校のリノベーションに参画、とくしま科学技術アカデミーステップアップ事業として徳島文理大学建築デザイン学科フェアを実施

個人情報

1. 氏名：池田 文夫
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 建築関連法律、設計（意匠、構造）全般、コンピュータ（CAD）
2. 学部授業担当科目：
前期：住宅設計製図Ⅲ、建築法規、西洋建築史、CADⅡ
後期：住宅設計製図Ⅰ、コンピュータ演習Ⅱ、専門ゼミ
3. 直接に研究指導した学部学生：
卒業論文（1）名、その他（ ）名
専攻科（ ）名、大学院修士（ ）名
4. 自己評価
5年目を迎えて授業で使用する資料は、かなり学生のレベルを考えながら自分なりに、充実できたと考える。学生によってかなり学習能力にバラつきがあり、全体的な学習バランスをとるのが難しいと感じている。実務的な、法的、設計的な知識を身に付けさせる授業を行うのが理想であると考えているが、全体的バランスの中で授業方法のあり方を模索している。

研究領域

1. 専門研究領域：建築関連法律全般
2. 研究課題及び概要
保有耐力法等による最新耐震設計技術の動向の研究

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
特に無し
2. 学会発表
特に無し
3. 知的財産権の出願・取得状況
特に無し
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：
特に無し

自己評価

建築学会などの関連する講習会に2回出席した。最新の情報を身につけるためにも今後はもって積極的に参加してあたらしい知識、技術を身につけるよう努力したい。

大学内運営

1) 活動報告

① 国家試験取得に向けての取り組み

1 学年希望者を対象として、宅地建物取引士セミナーを昨年 11 月から週 2 回のペースで行い、在学中に試験合格を目指す取り組みを行っている。

平成 31 年 1 月末現在 参加者数約 25 名

試験日 平成 2019 年 10 月中旬

② 広報担当として、広報活動、学科ホームページの更新等の広報活動を行った。

社会貢献

特に無し

個人情報

1. 氏名：笠井 敬正
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育担当専門領域：建築構造力学、建築計画
2. 学部授業担当科目
前期：構造力学Ⅱ、測量学、インテリア計画、
後期：構造力学Ⅰ、住宅設計論、インテリアデザイン論、インテリアデザイン応用、
住宅設計製図Ⅳ、専門ゼミナール
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文（1）名
4. 自己評価

あらゆる科目において常に基本に立ち返りながら、学習内容が知識として蓄積する授業となるように心掛けた。

「構造力学Ⅰ」については毎時間前回の復習をしながら進めていった。理系を不得意とする学生も多く受講生全員が理解してくれたとは言えない。今年度は「中間試験」を取り入れてみた。

「測量学」は、座学・外業・内業という一連の流れを通して知識としてだけでなく自分の経験として身につく授業である。理論と実習を交えた授業を行うことで、より学習の定着化が図れたと考える。

「インテリアデザイン応用」は本年度も前期に自分が設計した木造とRC造2種類の建物のパースそしてインテリアを含めた模型製作を課題としたが、学生は興味を持っていろいろ考えながら楽しく取り組んでいた。

「住宅設計製図Ⅳ」では最後の設計製図として将来受験するであろう建築士試験を見越しての課題を設定し、図面そしてパースまたはイメージ図の提出を課した。学生たちにはその建築物についてしっかり調べさせることから始めた。例年と同じく、構造、法規、設備上の問題等わからないところもたくさんあり当初なかなか考えがまとまらなかったようだが、最後にはきちんと完成させることができた。

その他の実習等を伴わない授業に関しては、映像で理解度を深め、レポート提出で復習の機会を設けた。

研究領域

1. 専門研究領域：建築計画
2. 研究課題及び概要

研究課題：地域の状況から見る古民家の特徴についての調査に関する研究

研究概要：家の様相は過去から現在そして未来へと大きく変化していく。その変化の様子はかつてその地域に根ざした人々の生活の上にならって起こりうるものと考えられる。私達のまわりの地域の歴史や特徴、そしてそこに住む人々の生活の状況並びにそこに現存するまたは過去に存在した古民家の特徴を調査・研究していく。

3. 平成30年度分 研究業績一覧（なし）
4. 知的財産権の出願・取得状況：（なし）
5. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：（なし）
6. 自己評価

研究についてはあまり成果を上げられなかった。

大学内運営

- 1 活動報告
 - ・ 建築デザイン学科 4 年担任
 - ・ 学部宿泊セミナー運営委員会委員
 - ・ 学部自己点検・自己評価委員会委員

社会貢献

- 1 学会等への貢献（なし）
- 2 地域社会への貢献
 - (1) 3ゼミ合同で
平成 29 年度「とくしま科学技術アカデミーステップアップ事業」の「ドローン体験セミナー」の準備・指導を行った。
日時：平成 30 年 8 月 5 日（日） 10：00～14：00
場所：技の館（上板町泉谷字原東 32-4）
 - (2) 「徳島県建築士事務所協会主催学生研究発表会」で発表する学生の指導を行った。
日時：平成 30 年 11 月 17 日（土） 14：00～16：00
場所：徳島市シビックセンター

第6節 心理学科

個人情報

1. 氏名：青木 宏
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：心理学（臨床心理学、犯罪心理学、学習心理学等）
2. 学部授業担当科目
前期：心理学概論（心理1年）、心理学実験（心理2年）、学習・言語心理学（心理1年）、異常心理学（心理3年）
後期：生理心理学（心理2年）、教育相談（心理3年、生活3年、栄養3年他）
心理学研究法（心理1年）、ライフサイクル論（心理4年）、専門ゼミナール（心理3年）
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文2名
4. 自己評価
学生の興味を引き、知的好奇心を刺激するために、映像や動画をふんだんに盛り込んだ自作のプレゼンテーションを使用した。また、テーマによっては、グループディスカッションや模擬面接、PGR測定器を用いた実習なども実施し、主体的な取り組みを促した。加えて、毎時間、その授業で「よく分かったところ」「分かりにくかったところ」「その他質問、感想」を尋ねるコメントシートに記入させ、次の時間に振り返りや補足説明を行うとともに、授業の改善に生かした。

研究領域

1. 専門研究領域：臨床心理学、犯罪心理学
2. 研究課題及び概要
「非行少年の家族関係に関する研究」
家庭内の問題が、決定的な破たんへ帰結する前に、家族の成員、特に父親が軽度の引きこもりや近隣への別居のような形で葛藤を回避することによって、壊れそうで壊れない状態が遷延するという事例が目立ってきている。最終的には子どもの非行によって、父が否応なく問題解決の土俵に引き戻されることになるが、その非行化の機制は従来の劣悪な家庭環境由来のものとは異質である。葛藤の回避による「安定した不安定」の状態は何によって生み出されているのか、どのような家庭内力動や社会環境の変化が背景となっているのかを探求しているところである。

平成30年度分 研究業績一覧

- ・研究会事例提供
「保護室収容を繰り返した女子少年」徳島県非行臨床研究会
「父のプチ引きこもり」徳島県非行臨床研究会

自己評価

これまで収集した事例の分析を行うとともに、引きこもりやニートなどの関連分野の情報収集に努め、より広く現代家族についての理解を深める方向で研究を継続しているところである。

大学内運営

- 1) 広報委員会委員を分担した。
- 2) 広報担当として、「大学案内」の制作に携わったほか、公認心理師養成課程にポイントを絞ったビラの作成を行った。
- 3) 心理学科各学年のチューターとして 31 名の学生の個別指導に当たった他、講義を受講した学生からの相談事にも応じた。
- 4) オープンキャンパスにおいて心理学科の学科説明を実施した。
- 5) 高校生の大学見学の際にミニ講座を実施した。

社会貢献

- 1) 板野郡中学校生徒指導研究会定例会に原則月 1 回アドバイザーとして参加し、事例について助言を行った。
- 2) 北島町人権セミナーの講師として「再犯防止のために」というテーマで講演を行った (2019. 1)。
- 3) 法務省矯正研修所高松支所において、若手心理技官に対し、心理アセスメントについての講義を行った (2019. 2)
- 4) 教員免許状更新講習で発達障害の少年に対する処遇についての講義を受け持った。(2018. 8)
- 5) 日本犯罪心理学会全国区理事 (2018. 12～)

個人情報

1. 氏名：岡林 春雄
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域： 認知心理学 学校心理学 認知—感情インタラクション
2. 学部授業担当科目

前期： 心理学実験

後期： 専門ゼミナール、知覚・認知心理学、学校心理学、卒業研究

大学院

前期： 特別研究（院1）、特別研究（院2）、臨床心理実習Ⅰ、学校臨床心理学、心理統計法特論、研究法特論、臨床心理学研究法特論

後期： 臨床心理実習Ⅱ、特別研究、心の健康教育に関する理論と実践、心理学特別演習

3. 直接に研究指導した学部学生等：卒業論文1名

4. 自己評価：

大学院の授業では、プレゼンテーションからディスカッションという院生主体の考える授業を目指しており、その成果は見えだしている。学部の授業でも、心理学実験ではディスカッションを取り入れ、学校心理学の授業ではアクティブラーニングを導入した。これまで、受け身的で、座っているだけという授業に慣れていた学生にとっては脅威であったようである。しかし、やる気のある学生にとっては、アクティブな関りをもとめる授業は好評であった。大学に入ったばかりの1年生に対する知覚・認知心理学の授業では、プレゼンテーションを導入し、“アサイメント—プレゼンテーション—ディスカッション”のシークエンスから徹底して、論理展開に気を配った文章作成、ならびに、ポイントを他者に伝えることができるアサーションスキルを身につけることができたと思われる。今後とも、学生自ら思考する学生主体（Student Centered）の教育への意識改革を行っていきたい。

研究領域

1. 専門研究領域：認知心理学 認知科学 ダイナミカルシステム

2. 研究課題及び概要

- ・会話における意思疎通性を生体信号のリズムから解析
- ・リアルタイムでの認知—感情インタラクションからマクロタイムのパーソナリティ形成への自己組織化作用
- ・「わかる」という心理作用は、般化によるものなのかカオス現象なのか

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

岡林春雄 2018 心理学教育を考える. 徳島文理大学研究紀要, 第96号, 109—115.

2. 学会発表

岡林春雄・千野直仁・佐藤俊雄・河合優年 2018 変化をとらえる Dynamical System Approach. 日本心理学会第82回大会 シンポジウム, SS-053.

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況：

なし

自己評価：

大学ならびに学会を通して、若手の研究者を育成している。

大学内運営

活動報告

- 1) 心理学科長
- 2) 大学院修士論文副査 1 件
- 3) 教育研究委員会委員

社会貢献

- 1) 日本心理学会ダイナミカルシステム研究部会代表
- 2) 放送大学（山梨）面接授業 心理学実験 非常勤講師
- 3) 帝京福祉専門学校 こころのしくみ 非常勤講師

個人情報

- 1 氏名：小畑 千晴
- 2 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：臨床心理学
2. 授業担当科目
前期：臨床心理学概論、青年心理学、心理検査法Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ、特別研究。
後期：人間発達学（心理）、人間発達学（理学療法学科）、臨床心理実習Ⅱ、専門ゼミナール演習、ジェンダー論、パーソナリティ障害論、特別研究。
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文1名、大学院修士1名
4. 自己評価
・学生の授業への意欲向上と、教員との繋がりを持たせるために毎回授業後には、感想や疑問などを記入させて、次回講義の最初にそのフィードバックを必ず行った。

研究領域

1. 専門研究領域：臨床心理学・精神分析学
2. 研究課題及び概要
 - 1) ストリーキングの発生に関する包括的モデルの検討
 - 2) 被服素材とした原子価論に基づく心理教育
 - 3) 女性の両立問題に関する心理的理解と支援

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
該当なし
2. 学会発表
小畑千晴, 篠原陽子：大学生の着装に関する基礎的研究Ⅲ（於：金城学院大学）
(2018.6)
久米和美・小畑千晴：Selfesteemに関する原子価論的考察（於：神戸国際会議場）
(2018.8)
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし
5. その他：報告書
小畑千晴, 中津達夫, 高橋宏之, 貴志知恵子, 吉田広樹, 近藤正章：徳島県内の若者を対象として安心まちづくりのためのアンケート結果報告書, 徳島県警察本部生活安全部報告書 (2018.11)

自己評価

教育活動に重点を置きつつ、できる限り研究活動にも取り組んだ。

大学内運営

- 活動報告（委員会委員、担任等）
- 1) 心理学科3年担任
 - 2) セクシュアルハラスメント防止委員
 - 3) 退学者防止対策委員
 - 4) 心理相談室相談員

社会貢献

1 学会等への貢献

岡山プシコフィリア研究会 世話人

2 地域社会への貢献

- 1) 徳島文理大学臨床心理相談室相談員
- 2) 徳島県 警察少年サポートアドバイザー
- 3) 岡山いのちの電話 研修講師 (2018. 6. 29.)
- 4) 岡山市立第一藤田小学校 PTA 教育研修 講師 (2018. 10. 11.)
- 5) 徳島県警察本部 人身安全関連事案対策専科研修講師 (2018. 6. 5.)
- 6) 徳島県 藍住町人権教育推進協議会第1回人権講座 講師 (2018. 8. 1.)
- 7) 徳島県警察本部 生活安全任用研修科研修講師 (2018. 6. 5.)
- 8) 徳島県南ロータリークラブ 卓話 講師 (2018. 10. 19.)
- 9) 徳島県犯罪被害者支援センター 支援活動員養成講座 講師 (2018. 12. 8.)
- 10) 徳島経済産業会館総合支援連携会議構成団体人権研修 講師 (2019. 1. 8.)
- 11) 国際ソロプチミストアメリカ西日本リジョン 女性のための教育訓練賞 審査員 (2019. 1. 25.)
- 12) 徳島県立人権教育啓発推進センター徳島ヒューマンネット 人権教育啓発運営検討会議委員

個人情報

1. 氏名：貴志 知恵子
2. 職位：准教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：教科教育学・保健
2. 学部授業担当科目
前期：学部：事前・事後指導、養護概説、救急処置及び看護法Ⅰ、養護学特講、卒業研究
後期：学部：救急処置及び看護法Ⅱ、教職実践演習、専門ゼミナール、健康相談活動、学校保健、卒業研究
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文4名、その他9名
4. 自己評価
卒業論文については将来、教職志望学生であり教育現場での研究活動に繋がる課題を選んだ学生が多かった。また、教育実習やボランティア活動等での子ども達との関わりや社会体験から幅広い学修を含めた内容となったが、ゼミ生の10名の内、4名が書き上げた。卒業論文が選択科目であるため途中で執筆を放棄する学生がいることが今後の学科やゼミの課題である。

研究領域

1. 専門研究領域：性教育、健康相談
2. 研究課題及び概要
 - 1) 性教育と人権の問題について、将来、養護教諭を目指す学生への指導において、学校教育の中で、性の多様性を学ぶことで自己を見つめることや他者理解を進め、心情に配慮したきめ細かい教育がおこなえるような方策について検討している。
 - 2) 養護教諭のおこなう健康相談活動において、これまでのカウンセリング的対応に加えて、思考パターン、言語パターン、反応パターン等に気づき、やり方や行動を変えるコーチングのアプローチを取り入れることで生きる力の具現化をはかる方策を志向している。

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
該当なし
2. 学会発表
「いのち・人権の視点から発達を支援する養護教諭の性教育」 第29回人間の生活・身体・社会研究フォーラム 日本健康相談学会第14回学術集会 徳島大学 2018.10.27
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし

自己評価

研究では、養護教諭の進める性教育や保健室コーチングを活用しての健康相談について取り組んでいる。また、共同研究として倫理審査を経て、養護教諭志望学生の経験過程と自己肯定意識の変化—保健室ボランティアへの参加を通して—について継続研究を行っている。今後は、科学研究費補助獲得に向けて、研究をすすめたい。

大学内運営

活動報告

- 1) 教職課程委員会委員
- 2) 教員養成推進委員会委員
- 3) 教員養成対策委員会委員
- 4) 人権教育推進委員会委員
- 5) 全学共通教育センター学習支援アドバイザー
- 6) 教員免許更新講習 講師
- 7) 学部：1・2・3・4年生チューター（37名）

社会貢献

- 1 学会等への貢献
 - 1) 日本養護教諭養成大学協議会代表評議員
 - 2) 日本学校保健学会代議員
- 2 地域社会への貢献
 - 1) 救急救命指導員として救急救命講習活動に参加
 - 2) 徳島県養護教諭初任者研修として学校での救急救命講習を実施
 - 3) 徳島県養護教諭2年次研修として学校での授業力向上研修を実施
 - 4) 地域連携センターとの共催で第3回徳島県養護教諭研修会「学校歯科保健にかかわる歯科医師からのメッセージ」同第4回「養護教諭のすすめる保健学習について」を実施

個人情報

- 1 氏名：小坂 清文
- 2 職位：教授

教育領域

- 1 教育の担当専門領域：犯罪心理学
- 2 授業担当科目
前期：犯罪心理学（心理3）、心理検査法Ⅱ（心理3）、心理統計学演習（心理2）、心理学A（薬学1・2）、発達障害論（音楽3、人間生活4）
後期：心理学特講（心理3）、社会・集団・家族心理学Ⅰ（心理1）、専門ゼミナール（心理3）、心理学統計法（心理1）、心理学A（薬学1・人間生活2）、卒論指導（心理4）
- 3 直接に研究指導した学部学生：卒業論文2名（うち1名は現在も指導中）
- 4 自己評価：
 - ・ 犯罪心理学では、矯正施設での勤務経験や法務総合研究所での研究経験を活かして、犯罪者や非行少年の実像を理解しやすいようにした。
 - ・ 心理学特講では、公務員試験、教員採用試験、企業の一般常識試験に向けて実践的な授業となるように工夫した。
 - ・ 心理学統計法では、エクセルの統計解析への理解・習熟が進むように、数多くの例題を実際に解きながら、丁寧な説明を繰り返した。
 - ・ 心理学Aでは、心理学を専攻科目としない学生が心理学の基本的な知識を習得できるよう、平易で印象に残りやすい授業になるように工夫した。

研究領域

- 1 専門研究領域：犯罪心理学
- 2 研究課題及び概要
卒業論文を指導：徳島県の交通事故発生原因に関する研究

平成30年度分研究業績一覧

1. 論文
年齢発達曲線に関する論文を3本執筆中（内2本は日本犯罪心理学研究にて査読中）
2. 学会発表
「少年鑑別所入所少年の非行性形成モデルの研究」日本犯罪心理学会第56回大会、奈良県文化会館（2018.12）
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし

自己評価

卒論の指導では、担当した学生の取り掛かりが非常に遅く、時間的な制約が大きかったが、何とか期限内までに提出することができた。

年齢犯罪曲線に関する研究に精力的に取り組み、現在、査読論文2本の審査を受けている。

大学内運営

活動報告

- 1) 学生指導委員会
- 2) 退学者防止対策検討委員会
- 3) 宿泊セミナー運営委員会

社会貢献

1 地域社会への貢献

- 1) 徳島学院安全管理委員会委員
- 2) 平成30年度徳島県児童自立支援専門員選考試験の試験委員
- 3) 徳島大学総合科学部非常勤講師（犯罪心理学の特別講義）

2 学会等への貢献

- 1) 日本犯罪心理学会編集委員
- 2) 講演「最近の少年非行の動向」, 2018年9月, 徳島県臨床心理士会研修研修会
- 3) 講演「年齢犯罪曲線から見た少年非行」, 2018年10月, 非行臨床研究会
- 4) 講演「年齢犯罪曲線から見た少年非行と予後」, 2019年2月徳島県臨床心理士会研修研修会

個人情報

1. 氏名：高橋 宏之
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：心理学（臨床、教育、発達、産業分野）
2. 学部授業担当科目
前期：教育心理学（栄養2年、心理2年）、児童心理学（心理2年）、心理学A（音楽1年、理学1年、メデ2年、建築2年、短音1年）、心理療法演習Ⅱ（心理4年）
後期：産業心理学（心理2年）、臨床心理学（理学2年）、臨床心理学演習（心理2年）、心理療法演習Ⅰ（心理3年）、心理検査法実習Ⅰ（心理2年）、心理検査法実習Ⅱ（心理3年）、専門ゼミナール（心理3年）
大学院授業担当科目
前期：臨床心理査定演習Ⅰ（研究心理1年）、臨床心理実習Ⅰ（研究心理2年）
後期：臨床心理関連行政論（研究心理2年）、臨床心理実習Ⅱ（研究心理2年）
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文0名、その他9名
4. 自己評価
毎講時、自己制作のプレゼンテーション用スライドを活用したほか、授業の重要事項に関する詳細な解説を盛り込んだ補助教材（プリント）を配付し、受講生の理解を深めさせた。また、授業終了前に当該講義内容に係る小レポートを受講生に作成させることにより、受講生の理解の程度を的確に把握するとともに、理解不足が認められた事項については次回授業で改めて説明し、その理解の定着を促した。その他、実習・演習においては、学習進度に遅れが生じた学生に対し、TAによる個別指導を並行して受けさせることにより、全体としての授業レベルを向上させることができた。

研究領域

1. 専門研究領域：臨床心理学、犯罪心理学
2. 研究課題及び概要
「非行少年・犯罪者の資質的負因に関する事例研究」
非行や犯罪行動の発現には、その人の資質的負因、環境的負因及びそれらの相互作用が密接に関係すると考えられるところ、前職での経験（矯正施設被収容者の資質の鑑別調査）を踏まえ、目に見えにくい資質の問題を「適応能力」と「性格傾向」の両面から考究している。

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
該当なし
2. 学会発表
該当なし
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし
5. その他：研究会講義
「留置施設視察委員会の活動について」徳島県非行臨床研究会（2018.6）

自己評価

法務省退官後、矯正施設被収容者のデータを収集することには制約が生じているものの、自らが所管する「徳島県非行臨床研究会」での活動を通じて、非行少年・犯罪者の資質的負因に関する研究を継続した。

大学内運営

- 1) 人間生活学部入学試験委員会委員を務め、心理学科の入試関連業務を分担した。
- 2) 心理学科4年生69名の担任業務（卒業研究に係る事務、日本心理学会認定心理士に係る事務等を含む。）を処理したほか、心理学科各学年のチューターとして30名の学生の個別指導に当たった。
- 3) AO・推薦入試説明会及びオープンキャンパスにおいて心理学科の学科説明や模擬授業を実施した。（2018.5、2018.8）
- 4) 高校生の大学見学の際にミニ講座を実施した。（2018.11）
- 5) 心理学科カリキュラム検討ワーキンググループの一員として、公認心理師資格に対応したカリキュラムの編成に関与した。

社会貢献

- 1) 徳島県留置施設視察委員会委員に就任し、徳島中央警察署、美馬警察署、三好警察署、阿波吉野川警察署及び徳島名西警察署の各留置施設を視察し、その運営に関する意見を提出した。
- 2) 徳島県非行臨床研究会を所管し、毎月の定例会で関係機関の職員に専門的な知見や情報を提供した。
- 3) 徳島文理大学臨床心理相談室相談員として、一般市民に対する相談業務に従事したほか、臨床心理相談室紀要に寄稿した。
- 4) 教員免許状更新講習で非行犯罪理論についての講義を受け持った。（2018.8）
- 5) 徳島県警察学校において同校専科生を対象に「非行動向と犯罪理論」の題目で特別授業を行った。（2018.12）

個人情報

- 1 氏名：中津 達雄
- 2 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：臨床心理学 人格心理学
2. 授業担当科目
前期：家族心理学(学部)、人格心理学特論(院1)、臨床心理実習Ⅰ(院2)
後期：人格・感情心理学(学部)、専門ゼミナール(学部)、投影法特論Ⅱ(院1)、
臨床心理査定演習Ⅱ(院1)、臨床心理実習Ⅱ(院2)、特別研究(院1、
院2)
3. 直接に研究指導した学部学生：卒業論文2名、大学院修士4名
4. 自己評価
各教科の準備時間には1コマにつき平均3時間程度をかけ、すべての科目においてレジメを作成し、理解度を高めることに配慮した。また学部授業については終了時にアンケートを実施し、学生の理解度を確認した。
本年度から、心理学研究科専攻主任(臨床心理相談室長)としての運營業務、特に公認心理師養成実習準備に追われ、学生指導に十分な時間をとれなかった。そのため、学生からの評価はやや低く、反省するところである。新年度からは公認心理師養成のための教科、実習演習科目も本格化することから、その充実に努めたい。

研究領域

1. 専門研究領域：社会科学・心理学・臨床心理学
2. 研究課題及び概要
・心の問題理解、特に社会構成主義的な立場に立つてのナラティブ・アプローチ及びセラピー
・描画法、特に樹木画テストのアセスメントとしての量的研究と、描画の持つ治療的側面検討のための質的研究

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
該当なし
2. 学会発表
該当なし
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし

自己評価

学科、研究科運營業務に追われ、殆ど研究活動は行っていない。

大学内運営

活動報告(委員会委員、担任等)

- 1) 研究科心理学専攻主任(臨床心理相談室長)
- 2) 入試委員会(全学)
- 3) 教務委員(学部)
- 4) 教員養成対策委員(学部)
- 5) 心理相談室相談員(委嘱)
- 6) 全学共通教育センター支援アドバイザー(委嘱)

社会貢献

- 1 学会等への貢献
 - 1) 県臨床心理士会選挙管理委員 (2014. 4. 1～)
- 2 地域社会への貢献
 - 1) 徳島県保健福祉部 社会福祉審議会委員 (2011. 4. 1～)
 - 2) 徳島県警察本部 少年サポート・アドバイザー (2011. 4. 1～)
 - 3) 平成 27 年度教員免許状更新研修講師 (2018. 8. 4、8. 29)
 - 4) 日本 B B S 連盟徳島支部 徳島文理大学支部顧問 (2009. 7. 1～)

個人情報

- 1 氏名：東 知幸
- 2 職位：講師

教育領域

1. 教育の担当専門領域：心理学、臨床心理学
2. 授業担当科目
前期：(学部) 老年心理学、心理学実験
(大学院) 臨床心理基礎実習Ⅰ、心理実践実習Ⅱ、臨床心理面接特論Ⅱ、特別研究
後期：(学部) コミュニティ心理学、心理検査法実習Ⅰ、心理検査法実習Ⅱ、
専門ゼミナール演習、卒業研究
(大学院) 臨床心理基礎実習Ⅱ、心理実践実習Ⅱ、特別研究
3. 直接に研究指導した学生：修士論文2名(進行中)
4. 自己評価
平成30年度から学部と大学院で心理職の国家資格である「公認心理師」養成カリキュラムをスタートさせた。特に大学院の公認心理師カリキュラムにおける学外実習の整備に貢献することができた。

研究領域

1. 専門研究領域：臨床心理学、カウンセリング心理学
2. 研究課題及び概要
 - ・人生グラフテスト (LGT)
 - ・「人生グラフ with コラージュ」(LGT+C) を用いたグループアプローチ

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文
東 知幸 (2018). 中学生に対する「人生グラフ with コラージュ」を用いた構成的グループ・エンカウンター：修正版グラウンデッドセオリー法による心理的効果の分析. コラージュ療法学研究, 9, 3-13. (査読付)
2. 学会発表
東 知幸 (2018). 働く人に対する「人生グラフ with コラージュ」を用いた心理的援助. 日本コラージュ療法学会第10回大会, 徳島文理大学. シンポジウム話題提供
3. 知的財産権の出願・取得状況
該当なし
4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況
該当なし

自己評価

4年連続で査読論文の出版ができたことに満足している。また、日本コラージュ療法学会第10回大会大会長として本学で年次大会を開催し、臨床心理学分野における本学の知名度向上および大学院生に貴重な経験を与えることができたことにも満足している。

大学内運営

活動報告（委員会委員，担任等）

- 1) 心理学科2年生担任
- 2) 就職支援委員
- 3) 臨床心理相談室相談員
- 4) フットサル部顧問
- 5) テーブルゲーム同好会顧問

社会貢献

1 学会等への貢献

- 1) 日本コラーゲ療法学会理事（2016.9～現在）
- 2) 日本コラーゲ療法学会第10回大会大会長（2018.10）
- 3) 徳島県臨床心理士会事務局員（2017.4～現在）

2 地域社会への貢献

- 1) 和歌山県立医科大学非常勤講師（2014.4～現在）
 - ① 保健看護学部「精神療法」講義（2018.10/15, 11/12）
 - ② 助産学専攻科「女性のメンタルヘルス」講義（2018.12/12）
- 2) 田辺市ひきこもり検討委員会委員（2008.4～現在）
- 3) 徳島県教育委員会主催「大学・研究機関等研修」講師（2018.7/30）

個人情報

1. 氏名：藤崎 ちえ子
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：心理学（総論、臨床、教育、発達）
2. 学部・大学院授業担当科目
前期：臨床心理面接特論Ⅰ（研究心理1）、心理療法演習Ⅱ（心理4年）、臨床心理実習Ⅰ（研究心理2）、臨床心理実習Ⅰカンファレンス（研究心理1・2）、特別研究（心理4年）、心理療法（心理3年、専器3年、専音1年）、文理学（心理1年）
後期：臨床心理学特論Ⅰ（研究心理1）、専門ゼミナール（心理3年）、心理療法演習Ⅰ（心理3年）、臨床心理実習Ⅱ（研究心理2）、臨床心理実習Ⅱカンファレンス（研究心理1・2）、特別研究（心理4年）、心理検査法実習Ⅰ（心理2年）、心理検査法実習Ⅱ（心理3年）、文理学（心理1年）
3. 直接に研究指導した学生：卒業論文4名（内3名は来年度卒業見込み）、修士論文1名（来年度修了見込み）、修士事例論文1名。
4. 自己評価
毎講時、自己制作のプレゼンテーション用スライドや視聴覚資料（DVD等）を活用したほか、授業の重要事項に関する詳細な解説を盛り込んだ補助教材（プリント）を配付し、受講生の興味を掻き立て理解を深めさせた。さらに、学生にゲーム等で楽しく学ぶアクティブラーニングを行わせ、学生にも好評だった。
心理相談室の大学院生スーパーヴィジョンでは新しい方法を取り入れるなど力を入れてきた。

研究領域

1. 専門研究領域：臨床心理学、学校臨床心理学、生理心理学
2. 研究課題及び概要
 - 1) 内観療法とマインドフルネス応用心理療法：愛恩法の効果
 - 2) 児童青年期の心理臨床

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

Chieko Fujisaki 2018 A Study Evaluating Mindfulness and Naikan Based Therapy : AEON-HO for Attachment Style, Self-Actualization and depression. Psychological Reports, doi.org/10.1177/0033294118811106 (査読付)

藤崎ちえ子 2018 小学校の校長・教頭（副校長）・一般教師のバーンアウトとエゴグラム自我状態の関係について. 徳島文理大学研究紀要 第96号 (査読付)

秦裕也, 藤崎ちえ子 2018 プレイセラピーでの攻撃行動への対応のあり方—不登校ぎみの児童の事例を通して—. 徳島文理大学研究紀要 第96号

2. 学会発表

藤崎ちえ子 「内観マインドフルネス - 愛恩法 - : セルフコンパッションとレジリエンスへの効果」日本マインドフルネス学会大会, 早稲田大学 (2018. 12) (査読付)

3. 知的財産権・資格等の出願・取得状況

国家資格公認心理師 取得。
糖尿病サポーター 取得。

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況

科学研究費 申請中。

自己評価

特に年度前半は新国家資格公認心理師受験のため、あまり研究活動や学会発表活動に時間を割けなかった。しかし、そのような中でも国際論文を1本出すことができた。これにより3年間で主著者査読付国内論文2本、主著者査読付国際論文2本の出版となった。

また、新1年生83人の一人担任や、1～4年生のチューターとして32名の担当をする等、学内活動に貢献することができた。また地域貢献としても、出張講義や教職員研修で講師を務めるなどバランスよく仕事を行えた。

大学内運営

- 1) 学生指導委員会委員。
- 2) FD委員会委員。
- 3) 新入生宿泊セミナー準備委員会委員。
- 4) 人間生活学部入学試験における面接官・試験作り・採点・会議出席等。
- 5) 1年生学年担任(83名:新入生オリエンテーション, 文理学, 宿泊セミナー, 各種相談等)。
- 6) 心理学科1～4年生のチューター(32名)。
- 7) 不登校等学生と保護者の面接、各部署との連携等。
- 8) 徳島文理大学臨床心理相談室相談員。
- 9) オープンキャンパスにおいて心理学科の学科説明(2018.3)。
- 10) 福岡保護者面接会にて保護者面接(2018.9)。
- 11) 大学入試第I期A日程試験監督(2019.2)。
- 12) 大学院修士論文査読。

社会貢献

- 1) 徳島県教育委員会特別支援教育センター専門家チーム員。
- 2) 徳島文理大学臨床心理相談室相談員として、一般市民に対する相談業務。
- 3) 県・大学等連携による教職員研修で「保護者のクレーム対応の仕方」の講義(2018.8)。
- 4) 高知県高知工業高校2年生全員へ「愛恩法」の特別授業(2018.11)。
- 5) 徳島県職業能力開発審議会委員(2018.3)。
- 6) Psychological Reports (U.S.A.)査読者。

個人情報

1. 氏名：山崎 暁子
2. 職位：教授

教育領域

1. 教育の担当専門領域：精神医学
2. 学部授業担当科目
前期：精神医学、精神病理学、
後期：精神保健学、精神保健学特論
大学院
前期：臨床心理実習Ⅱ、精神医学特論Ⅰ（保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅰ）
後期：心身医学特論、臨床心理実習Ⅰ、心理実践実習
3. 自己評価
臨床心理実習で指導とコメントをした。

研究領域

1. 精神医学

平成30年度分 研究業績一覧

1. 論文

- 1) 高井 逸史, 山崎 暁子, 他. 健康寿命延伸をめざした歩行支援用具のあり方「予防」そして「活動・参加」を支援する用具(2). 地域ケアリング 20(1), 35, 2018.
- 2) S. Kudo, A. Yamasaki. The effects of health guidance for men with high risks of metabolic syndrome. Clinics in Oncology Volume 3, Article 14471, 1-2, 2018. (査読付)
- 3) S. Kudo, A. Yamasaki. Activities and role perception of long-term care prevention project volunteers in super-aging society-comparison between mountain and fishing villages-. United Journal of Medicine and Health Care 1(1), 1-5, 2018. Sep. (査読付)
- 4) S Kudo, A Yamasaki, et al. A literature study on a smoking cessation support by nurse at medical institution. Journal of Dentistry Forecast. Article 1006, 1(1), 1-5, 2018.

2. 学会発表

なし

3. 知的財産権の出願・取得状況

なし

4. 平成30年度分 科学研究費補助金・各種助成金等の申請・交付状況

なし

自己評価

広報活動を行うことで、臨床心理相談室のちらしを病院に掲示して頂き、クライアントの確保に努力した。

大学内運営

- 1) 臨床心理相談室紀要編集委員

社会貢献

- 1) 京都大学一講師
- 2) 米国 Psychological Reports-Associate Editor

編集後記

平成 30 年度の教育・研究年報作成にあたりましては、年度末の大変お忙しい中ご協力を頂きまして発刊できますこと、心より御礼を申し上げます。

人間生活学部はそれぞれ分野の異なる 6 学科から構成されており、教員間の交流はあまり多いとは言えません。この年報を通じまして、それぞれの先生方のご講義・ご研究や社会貢献等の活動を知っていただくとともに、教員相互の理解が深まることを願っております。また、人間生活学部における自己点検・自己評価および各種 FD 活動の推進に貢献することが出来ましたら幸いです。

全学 FD 研究部会での検討に基づき、平成 31 年度からはこれまでのマークシート式の授業評価アンケートに替えて、PC・スマートフォン等から学生が入力を行う新しい形式の全学授業アンケート導入が予定されるなど、本学における授業評価には大きな変化が見込まれております。平成 31 年度も引き続き、各先生方ならびに関係の事務職員の皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

徳島文理大学人間生活学部 平成 30 年度 自己点検・自己評価委員会	
人間生活学科	竹原 明美
食物栄養学科	小川 直子
児童学科	岡 直樹
メディアデザイン学科	山城 新吾 (委員長)
建築デザイン学科	笠井 敬正
心理学科	藤崎 ちえ子

平成 31 年 4 月吉日

編集責任者：山城 新吾